

## 第四 南山

**人**は変わろうとして変われるものなのか。それを妨げるのは己自身か。反乱が続いても皇帝は元のままであり、揚州に旅した韋荘も以前のまま莊園に戻る。

その旅に出ようとしていた二ヶ月ほど前の咸通十一（八七〇）年八月に同昌公主が死んだ。寵臣の韋保衡に降嫁した皇帝の娘である。その死が韋蘭の商売に何かしら影響するのではと韋荘は案じた。蘭は意に介することなく、「皇帝の娘ごとき幾人死のうと、俺が驚かねばならぬ理由はありませんな。唐朝がひっくり返ろうとも、笑って眺めていられる商売を目指しておるのですからな」と、予定通り揚州に向かった。

それから一年半後の咸通十三（八七二）年春に韋荘は虢州に帰還した。思っ

ていた以上の長旅であった。

同昌公主が死の病に陥ったとき、医者は様々な薬を勧めた。何ら効き目がなく、皇帝は苛立ち、医官連中は、紅蜜白猿膏（こうみつぱくえんこう）を処方すればあるいはと、申し上げた。同昌公主の病は救えそうになく、紅蜜白猿膏は決して手に入るまいと、苦しまぎれの返答であった。皇帝の命で宮中の倉庫がくまなく調べられ、梵離国（ぼんりこく）より貢がれた紅蜜数石と、南海国より貢がれた白猿膏数甕が奥の奥にしまい込まれていたのが発見された。医官連中は慌てふためいた。どう処方してよいのかわからず、出鱈目に盛ると、公主はあっさりと死んでしまった。皇帝は激怒した。医官二十余人は皆殺しとなり、それでも腹の癒えない皇帝は、医官の親族三百余人を獄に繋いだ。宰相の劉瞻（りゅうせん）と都知事の温璋（おんしょう）は、医官の親族に罪はないと皇帝を諫めた。皇帝は二人を都から追放した。温璋は「生きて時に逢わねば、死も惜しむに足りない」と、毒を仰いだ。このときに皇帝の怒りを煽り立てた路巖（ろげん）という男が、劉瞻が去って空いた宰相の座をまんま

と手にした。

韋莊と韋蘭が揚州に到着したころ、同昌公主の葬儀が盛大に行われた。生前の衣服、諸道具が、彼岸においても使えるようにと邸宅の庭で燃やされた。それらは金銀宝玉がふんだんに施されたものであり、それこそが蘭の大儲けの種であった。同昌公主の召使たちは、焼いた灰の中に手を突っ込み、燃え残った金宝を奪い合った。幾つもの御殿を備えた壮麗な墓が造られた。都から墓所まで、そこに納める副葬品を運ぶ車が三十余里にわたって連なった。

埋葬を終えても皇帝の悲しみは深まる一方で、宮廷楽工の李可及（りかき）は、皇帝を慰めるため、『歎百年曲』を作った。数百人の女官から編成される「歎百年隊」が、宮中所蔵の最上級の首飾りと絹を纏って舞った。

同昌公主の婿であった韋保衡は皇帝に重く用いられた。せつかく宰相となつた路巖は無謀にも韋保衡と争つてつまずき、都を追われた。地方へ落ちゆく道々で、その卑劣さを憎む民衆が瓦礫を投げつけた。路巖がいなくなると、皇帝は劉瞻の高潔な人柄を懐かしみ、遠い南方から都の近くまで呼び寄せた。

劉瞻は虢州の知事として戻った。韋莊は、その劉瞻の帰還と時を同じくして莊園に帰ってきた。

韋莊は家に落ち着く間もなく、すぐさま新知事の赴任を祝う宴に列席する。州の役所の大広間に土地の名士が呼び集められ、多くは韋莊の顔馴染みである。知事が変わっても、州の役人たちはほとんどが元のままだ。韋莊は仕官してない処士として、簡素な服で、しかし気品のあるものを身に着け、知事の出を待つ。隣席の者と揚州のことなどを話していると、すつと人声が止む。

正面の扉が開く。韋莊は言いかけていた言葉を呑み、からだをそちらに向ける。静謐の声が続いて案内係の小役人が入ってくる。広間の全員が起立する。州の役人たちが左右に並ぶ間から、音もなく劉瞻が現れ出る。人々の肩越しに、韋莊は劉瞻の冠の上の方だけを見る。相当に小柄であるようだ。しかし、劉瞻が一足歩み込んだだけで、部屋の空気はすでに一変している。

劉瞻はゆつたりと歩み、韋莊の前までくる。韋莊は拝礼する。足を引き摺っているのは、気候の悪い南方での流寓生活が響いたせいだろうか。腰も曲

がり、大義そうである。それでも、得も言えぬ威厳が小さなからだに具わっている。

劉瞻は奥の席につき、人々は着座する。劉瞻は人々に向かつて、就任の挨拶をする。やはりからだの具合が思わしくないのだろう、弱々しい声である。劉瞻の顔には、深い皺が刻まれ、その奥に柔和な笑みあり、視線は遠くに定まり、その高雅さに、韋荘は思わず恥じらいを覚える。これが唐朝の宰相の本来のあるべき姿なのだろう。我が祖もあるいはこのようであったのか。それに引き換えいまのこの身は。

劉瞻の声は小さくとも明晰な都の発音である。遠く離れた韋荘にもよく了解できる。このような場にふさわしい儀礼的な言い回しが多いが、そこにも、唐朝のいまを憂う思いが自ずと滲み出て、少なからず感動させられる。このような人が朝廷にいて皇帝を正しく補佐するならば、唐朝も揺るがないはずなのである。

宴が段取り通りに進み、韋荘に役目が回ってくる。土地の人々を代表して

詩を献上する。劉瞻の前に進み出て用意の詩を恭しく捧げる。虢州の名園にいま咲き競う牡丹の美に新知事の徳をなぞらえる。ありきたりの譬えではあるが、それなりに技巧を凝らした。この立派な新知事に諂いの辞はふさわしくないことや臆する。この場に及んではどうすることもできない。

劉瞻は詩を受け取ると、目を細めて一句一句をうなずきつつ読み進む。詩を褒め、書を褒める。詩は賛辞に値しないが、書に対する言葉はそのまま受け止めたい。

「剛毅朴訥、仁に近し。孔子はそう言われたが、剛毅にして不仁なる者は多くあろうとも、朴訥にして仁より遠い者はおらぬと、この書は示してくれるようだ」

劉瞻は書を透かすように見入っている。

それは弟の藹が書いた。兄が留守の間、藹は書に没頭し、帰ってきたときには驚くほど上達していた。弟の欲心のなさそのままの書だ。それを唐朝の大物に賞賛され、韋荘は満足する。

劉瞻に促され、韋莊は詩を読み上げる。弟には及ばぬともそれなりに美声である。人々の喝采を受ける。

劉瞻は、韋莊がかの名高い詩人の四世の孫であると聞き、しきりに感嘆し、虢州がかくもよく治まっているのは、お上の恩顧を忘れぬ旧家が累世に亘り変わらぬ徳を保っているからだ、さらに讃える。劉瞻がこうも韋莊に好意を示してくれるのは、虢州の役人たちがあらかじめ新知事によく吹き込んでくれたからなのかも知れない。役人たちは誰もが韋莊の莊園からよい思いをさせてもらっている。

韋莊は、劉瞻の体を労わる言葉をそれとなく口にする。

「いまこそが大事なときであるのに」

劉瞻は深く嘆息する。無定見な寵臣と貪欲な宦官が宮中を乱している様を、怒りを含んだ声で語り、

「この体が言うことをきくならば」  
拳を袖の内に震わせる。

「あなたのような才ある若い方、それも唐朝と深い縁のある人が、力になってくれるとよいのだが。いま一度、貢挙を受けられる気はないのか」

「私などは不才の極みにございます」

韋莊は型通りに謙遜する。

もしここで発奮すれば、韋家の面目も施せようか。が、貢挙を受ける身には戻りたくない。

儀礼的な言葉のやりとりがしばらく続いて韋莊の役目が終わる。

酒食が振る舞われる。盃を持つ姿も劉瞻は上品で美しい。劉瞻の姿は旧きよき唐朝のありさまを今日に伝えるのだろう。あるべき規範を身に備えているのだ。

己の詩は美辞麗句に満ちるが、中は空疎だ。己に備わるものがないから言葉だけが上滑りする。韋家もこれが末の姿である。

不意に孔子の言葉が頭に浮かぶ。「郷原は徳の賊」。郷原とは、平凡な町で尊敬を集める凡庸な偽道徳者。真の道徳者と紛らわしい似非者を、孔子は厳



しく「賊」と断じた。己こそがその「徳の賊」ではなかるうか。口当たりのよい詩を作り、土地の名望家として慇懃に振舞う。その裏で、役人に賄賂を配り利を貪る。これが「徳の賊」でなくして何であろう。劉瞻の前にこの身を置き、詩を褒められ、よく恥じずにいられるものだ。

劉瞻の勧めに従って貢拳を受けると思い直すならば、幾分か恥も拭い去れようか。貢拳ばかりは考えたくない。

「徳の賊」のこの己はこれから如何に生きるのか。その問いには関わりたくない。揚州への旅は己の生き方についての答えを持ち帰れなかった。考えようがない。

**町**から荘園に戻れば、そこでは弟の婚儀の準備が進められている。韋荘の旅が長引いたら、薛未亡人のはからいで挙行されることになっていたのだが、兄の帰りを待つてからと、藹が強情を珍しく貫いた。薛未亡人は、「藹ちゃん

の気がすむようにしたらよい。藹ちゃんが待ち遠しかろうと、早くしてあげたいと思っただけなんだから。あんなよい娘、もし見たら、一日だって待てないでしょうに」と、大いに笑った。

薛未亡人が吉日を占って決めたその日まであと十日ばかりとなり、陸氏の家から衣類や諸道具が送られてきて、韋莊兄弟の新しい屋敷へと運び込まれる。

それは韋莊の留守の間に薛未亡人が建てたものだ。元の屋敷の西隣に韋莊兄弟の家を造る話がかねてからあったし、凶面もできていた。何かと延び延びになって、旅に出たころには立ち消え同然だったのだが、韋藹の嫁がくるまでにと、薛未亡人の一存で着工となり、広場の北に二つの門が並び立つのを韋莊は莊園に帰ってきた日に見て、初めて新しい屋敷が造られたのを知った。

薛未亡人は「びっくりしたでしょう」と、ひどく嬉しそうだった。なかなかの費えだったはずで、韋莊と蘭がこっそり点検すると、莊園の蓄えは旅に

出る前よりも増えていた。薛未亡人の手腕は実に恐るべきで、二人の息子は「ぐう」とも言えぬ目に遭わされていた。

楊爺から聞いたところでは、最初に大目玉を食らったのは長兄だった。水車小屋で挽いた粉をこっそり横流しして小遣いを稼いだ。韋荘はいないし、母親は甘く見てくれるだろうと、うまくやったつもりでいたのだが、兄を羨んだ次兄が告げ口した。長兄はこっぴどく叱られた。次兄は、母親も自分には甘いと勘違いし、繭玉を都の武大人を通さずに売り払い、かなりの利を手にした。今度は長兄が告げ口した。薛未亡人は次兄を叩きのめした。莊園の仕事に今後一切手出しはならぬと、薛未亡人は二人の息子に厳命した。ここで腹を立てたのは兄弟の嫁だった。嫁は上辺は姑に従順なようできて、実際には長年に亘って憎しみを募らせている。嫁同士の仲も単純ではない。薛未亡人に万一のことがあったときには、相手に先を越されまいと、いがみ合っているのだ。

古い東の屋敷はそのような具合であるが、西の新しい屋敷では嫁を迎える

ために何かとあわただしく、陸氏から送ってこられた荷をしかるべきところにおさめようと人々が動き回る。主人兄弟がいたのでは邪魔になるだけで、二人はさしさわりのないあたりで時を消す。

晩春の花をそぞろに訪ねつつ、ぽつりと藹が言う。

「妻とは迎えなくてはならないものなのではないでしょうか」

「どうした。気が進まないのかい」

いつもは感情の読み取りにくい弟が、首を斜めにいかにも困った様子である。

「わからないのです」

「何がだい」

「どうなるのか」

「不安なのか、どんな嫁がくるのか。叔母上が一生懸命に探し、楊爺が調べてくれた。あの愚笠子も間違いないと言った。心配ない」

「しかし」

弟は身をねじつてもどかしそうにする。うまく言えないのだろう。

「それに、なかなかの美人らしい」

韋荘は笑いながら言う。薛未亡人がそう言っていた。

「そんなことはどうでもよいのです」

「莠くんも、叔母上が見つけてくれた娘とともうまくいつている。案じることはない」

藹は花の枝を折り取る。しばし見入ってから投げ捨て、滅多に見せたことのない渋い顔をする。

「だからなのです」

「何を気にしているんだい」

「笑わないでください」

「笑ってなどいない。どうしたんだい」

藹はすぐには答えない。

その姿を見て、あるいは、弟を悩ませているのはこの己ではないのかとの

思いに至る。何しろ韋荘の場合に夫婦仲は破綻している。その様子を間近に長年見ているのだから、弟が不安がるのも無理はない。揚州から帰って妻とはまだまともに顔を合わせていない。嫋嫋との別れを思い返せば、遠く妻の姿を見るだけでも面白くない。その妻もなかなかの美人である。

弟が無造作に投げた花を見下ろしていると、

「気がかりなのです。兄上とこのままでいられるのかと」

弟は意外なことを言う。

「そなたが結婚して、我等兄弟がどうにかなってしまふのかい」

すぐに、己にも似た不安があると知る。

弟とのこうした時間は、これからは自由に持てるものではなくなるかも知れない。揚州への旅に出る前もそうであったし、旅から帰ってきてからはなおさらのこと、心穏やかに過ごせるのは弟と二人でいるときだけだ。蘭がいてくれればまた違ふのだが、蘭の部屋の札が蛤の側であったのはほんの数日で、いまは雀が表になっている。

莊園で心を許せる者としてはあと一人楊爺がいる。時に、狐潭の風光を眺めつつ楊爺の小屋を訪ねるのは楽しいひとときである。しかし、こここの楊爺はどこか元気がない。原因はわかっている。甥の楊胆が莊園を去ったからだ。役人に楯突いた事件で狐潭の奥にしばらく身を潜めていたのだが、ほとぼりが冷めたと見て義父の元へと帰っていった。楊胆を早くから楊爺の後継者にしておけばよかったと韋莊が残念がったのと同じようなことを楊爺も感じているのだろう。楊爺の仕事ぶりは以前のままのようであり、どこともなく張りがない。このまま楊爺は年老いてしまいかと思うと寂しくなる。

いみじくも弟が不安がるように、嫁がきて、これまでの兄弟のあり方に変化が生じて、一緒に筆をとり、弟の朗読を聞くのが叶わなくなったりすれば、はなはだ嬉しくない。もちろん、生活がいままで通りであるはずはない。弟の場合は、己のようにはならず、夫婦の仲はよくあるべきだ。

「秀兄さんは都に行っておしまいです」

藹はぼそつと言う。

「あれは蘭くんに頼まれたのだ。仕事だ」

「莠兄さんは仲良くしすぎです」

弟は口を尖らせる。それがおかしくて韋荘は笑う。

確かに莠のところはすこぶる仲が良い。長安にいつてからも変わっていないだろう。二人目の子も生まれた。今度は男だ。

莠の新しい商売は順調であるらしい。長旅から帰った蘭を迎えにきた楊銀が、長安の店は万事うまくいっていると話していた。

蘭が得たあぶく銭で、儲ける必要がなくて莠が始めたのは、金貸し業だ。

長安の金貸しといえば、韋荘の莊園も苦しめられたように、大抵は悪辣な手合いが多い。とくに西方の商人は、利子に利子を付ける複雑な計算法を持ち込み、とんでもない高利を取り立てる。それで破綻に追い込まれる者が後を絶たない。世の中が不安定になると、悪徳とわかっていても金貸しに頼らねばならない者が大勢いる。

莠のやり方はまるで違う。無利子で貧者に小口の金を貸す。莠にとっては、



利子に利子を付ける計算など少しも難しくない。それがとんでもない高利になつてゐるのは、第一に暴利を貪るためであり、第二に無理な取立てに経費がかかるからだ。その両者がないのだから無利子で構わないというのが莠の理屈である。もちろん全くの無利子であれば商法として成り立たない。借主がいくらからでも利息を持つてくれば、それは受け取り、次のときにはより多くの錢を貸す。

莠のこの奇妙な金貸しは、高利貸から妨害を受けながらも、武大人の支援を受け、楊銀、肋の親子と、妻の手助けもあつて、じわじわと都の貧民層に支持されてきているという。

「莠が仲良くしているのは結構なことではないか」

藹は今度は小枝を折り取り、ぐるぐる回しながら、

「叔母上のところでは諍いが絶えません」

「あそこは仕方がない」

結婚はとにかくろくな結果をもたらさないと、弟は言いたいようだ。

薛未亡人のところは特別だ。あの性格ではどんな嫁ともうまくいかない。薛未亡人は自分が生んだ子でありながら、二人の息子を少しも可愛く思っていないようだ。死んだ夫をいまも憎む余り、父親にだんだんと似てくる息子を嫌っているのだろうか。

薛未亡人とその夫は最初から仲が悪かったらしい。夫は幾人もの妾を抱え、韋愠の母親がいびり出されてからは、屋敷の外に妾を隠し持つようになった。洛陽には誰も会ったことのない憐という息子がいる。

父や叔父たち三兄弟はそれぞれに嫁をもらった前と後とで互いの関係が変わったりしたのでろうか。韋莊の父は都にいて、他の二人はそれぞれ別の莊園に住んでいたから、三兄弟が揃って一堂に会したのを見た記憶は韋莊にはない。韋莊の母は、自分の夫がたまたま長男であるために苦しまされていない。と、弟たちを恨むような愚痴をよくこぼしていた。次男はふしだらな男で、三男は世捨て人を気取る自堕落な男である。弟たちに何も言えず、勉強ははかばかしくなく、いつも陰気な顔をしている夫に、韋莊の母は不満を募らせ

ていた。それを見て育った韋莊は、自分こそは貢挙に合格せねばならないと幼いころから強く思っていたのである。

藹は杖を投げ捨てる。

「どこもそんなものです」

弟は暗に韋莊夫婦のことも言っているのかも知れない。

「嫁のせいで、兄弟の仲がおかしくなると、考えているのかい」

韋莊の妻は莠と藹を愚か者と嫌い、それで別々の家に住むようになった。

「違いますか」

「どうか」

藹は木の間に隠れるように入り込んでいき、

「変になるのが、嫌なのです」

弟はかなり真剣だ。

「わかった。そなたの心配はもつともなことだ。ならば、こうしようではないか。叔母上のお見立てはきつと間違っていない。しかし、もしも、そなた

のところにくる娘が、莠の妻のようでなかったなら、心配するな、私が即刻  
追い出してやる。それならよいだろう」

笑いながら弟の方へと歩み、

「そなたが、変な嫁よりも、この兄を大切に思ってくれているのならばだけ  
どな」

と、付け加える。

「それでは、女が哀れではありませんか」

弟は弟なりにいろいろ考えているようだ。

「そなたにその優しさがあればきつと大丈夫だ」

己にはその優しさが無い。妻を哀れと思う心をもっていない。

木の間に入っていった弟に追いつく前に、若い者が屋敷の内から走ってき  
て、荷の置き場所を確認してほしいと言う。

それでこの話は打ち切りとなる。

**陸**氏の娘がくると薛未亡人の慧眼ぶりが証明される。

可愛らしく淑やかで、それでいてなよなよとしたところはなく、根がしっかりとしてしている。古くからのその家に伝わる作法を厳しく躰けられたようで礼儀正しきは申し分ない。自身からものを言うことは少ないが、問われれば的確な返事をする。薛未亡人は、その簡潔で明晰な嫁の話しぶりを気に入る。

陸氏は夫の風変わりな性格をすぐに理解し、夫との温和な関係を上手にくくっていく。それは莠の妻よりもみごとであり、より自然である。大きな家にはどこでもそれぞれに複雑な事情があるものだが、陸氏はそれもすぐに飲み込む。

嫁のこのように優れたところを知れば、弟夫婦のためには、兄が少しばかり離れるのが賢明であろうと、毎日共に筆を持つ習慣は変わらなくても時を決めて区切りを付け、むしろ、夜中に目を覚ましたときに弟に史書を朗誦してもらおうようなことはすっかりなくなる。

己一人で埋めなければならぬ時間が韋荘には増え、自ずと楊爺の小屋を訪ねることが多くなる。それでか、楊爺は徐々に元氣を取り戻す。時には小屋に泊まる。楊爺は大喜びで昔通りに甲斐甲斐しく世話をしてくれる。やはり己には楊爺なのかと思うと、楊爺を有難く思うと同時に、満たされないものがあるとも感じられてくる。それでは楊爺に悪いと思ひ、やり場のない痛みが生じ、いたたまれなくなる。そして、ついには、抑えようがなくなつて、揚州での日々が思い出されてくる。こうなることを恐れ、こうした回想を避けてきた。心を紛らわす他の事がなければ、どうしてもそこに行き着かざるを得ない。

己を変えようとした旅だった。その結果、得たものはあつたのか。愚笠子、南東の地で、これからの人生に関わりを持つ誰かと出会うと予言した。信じたのではなかったが、その誰かがいたのか。旅の間にたくさんの方と出会った。その中で、思い出すのが最も辛いのは嫋嫋である。

悔恨故に思い出しそうになると振り切ろうとした。そのようにしていれば、

時とともに心が感じなくなるだろうと期待していた。ここにきて、実際には逆であるとわかった。このごろは、夜中に目覚め、言い知れぬ苦しさに激しくもがくことがしばしばである。弟に史書でも朗誦してもらえば、心が安らぐに違いないのだが、それができない。

本来の己を得たと思つたあの揚州の色里での心の高まりは何であつたのか。我が心の不条理に慄然とし、何もかもこの夜が明ける前に終わらせてしまいたいときえ考える。あのとときに、終わらせるための言葉を発したのは己であつた。

「必ずまたくるから」

嫋嫋に告げた最後の言葉だ。嫋嫋は返事をしなかつた。

これが当てにならない偽りの言葉であるのは、韋莊自身より嫋嫋の方がよく知っているはずと、韋莊は思つていた。この言葉が真実ではないと互いに了解しているから、別れが成り立つ。別れというものをここにとにかく現出させれば、後は歳月が解決してくれる。月日とともに薄れ、いつしか消える。

もしも「必ずまたくる」を真実の言葉と期待したならば、互いに執心が残り、いまの別れはできない。韋莊としては必ずまたきたいのである。その言葉を真実のものにしたい。だが、嫋嫋への恋はここで終わりと決めた。これは遊びではない。恋である。だから、苦しくとも、嘘によつてでも、別れを成り立たせなければならぬ。

もしも、別れないとすれば、嫋嫋を請け出し、妾として虢州に連れて帰る、それが唯一あり得ることだろう。芸妓を買って妾にするのはごくありふれた行為で、薛未亡人の夫がそれをよくした。薛未亡人が嫌悪した叔父と同じことが己にできようか。

それが嫋嫋を請け出そうと考えなかつた理由ではない。別の、少なくとも二つの困難があつた。当然のこととして金が要る。蘭の財布も無尽蔵ではない。揚州でさまざまなこと金を使った。韋莊が色里に入り浸りになるとは、蘭にとつて計算外の出費であつたらう。それでも好きにさせてくれた。あれほどあつた金もほぼ底をついた。ただ、それが一番の困難であるとは思つて



いかなかった。

何が最も大きかったのかと言うと、虢州の莊園を歩く嫋嫋の姿を想像できなかったことだ。もしも嫋嫋を虢州に連れて帰ったらどうなるのかと、考えようとしても、頭の中で、嫋嫋を莊園に置くことができなかった。

嫋嫋に恋をしていた。恋は揚州にいるからこそ成り立つものなのだろう。莊園に帰れば自ずとそこでの日常が始まり、嫋嫋との恋はそこでは続かない。気の弱い嫋嫋が、莊園の種々雑多に耐えられるかとの心配もない訳ではないが、問題はそれではなく、己自身の心である。恋をする韋莊は虢州の莊園にはいない。だから、莊園には想像の上でも嫋嫋を置けない。

そのような理由で、嫋嫋に偽りの言葉を告げ、別れるとは、全くの身勝手である。時が経つにつれ、嫋嫋の心を踏みにじった己への嫌悪が募る。そうしていることが嫋嫋への言い訳のようにも思え、さらに辛くなる。

莊園も何もかも捨てて嫋嫋との恋に走ろうと思ったこともなかった訳ではない。甘美な空想でしかなかった。二人してどこかへ出奔し、裸になって生

きる。そんな力は韋荘にも嫋嫋にもない。莊園があり、旧き家名があるから、韋荘は立派な御曹司なのであり、揚州で遊んでもいられ、嫋嫋との恋に浸つてもいられる。

己を変えようとして出ていった旅で得たのは、己が恋をする男であると初めて知ったこと、そしてその恋を嘘の言葉で平気で終わらせられる卑劣漢であること知ったことだった。旅先でしかあり得ない恋を終わらせ、莊園での日常が再び始まれば、恋などをする己を消して、別の己にならなければならぬ。

恥ずべきただの卑劣漢ではないとのささやかな矜持は保ちたい。だから敢えて理想を言い、田疇を掲げる。結局は前の旅で得た結論に戻るしかない。戦乱の跡を見れば、この小さな莊園一つで何ができるのかとの無力感にも捉われるが、ここを守らずして己の抛り所はどこにもない。蘭は風任せと口では言いつつ、実のところは確かな抛り所としての己を持っている。韋荘自身には何があるのか。それを見出そうとして揚州の旅に出たのである。韋荘の

思考はこうして堂々巡りとなる。

そこからの出口は一つはある。韋荘もそれはわかっている。劉瞻の勧めに従い、再び貢挙を受けることだ。韋一族の宿願を果たし、唐朝が困難に陥っているこの時期に、皇帝陛下のもとに立派な官人となつて唐朝の再興に努める。かつて宰相をも出した韋一族の責務であるとも言えよう。貢挙は立派な目標だ。勉強のために恋を捨てるのは賞賛に値しよう。

貢挙は受けないと決めた。二十七年間、貢挙しか知らずにいたあのころに戻る気はない。蘭とともに逃げるようにして最初の旅に出たあのころの苦しさを思うと、そこには戻れない。

ならば、どうしても一つのことしか残らない。莊園の主らしくすることだ。虢州ではそのような己しか存在しないと観念するしかない。

そのようなところに落ち着くしかあるまいと、幾度も同じ思考を繰り返すうちに夏となり、ある日、韋荘は、妾の子の愠を屋敷に呼ぶ。勉強の進み具合をみるのである。己は受けなくても、一族の誰かを貢挙の及第者にするの

は、莊園の主として立派な仕事である。慍を杖で撃つてからすでに九年。その直後に勉強部屋と一切の書物を与え、勉強も随分と進んだはずだ。あらかじめ詩の題を与え、日を決めて答案を持つてこさせる。

慍は身なりを整え、胸を張って韋莊の前に現れる。なかなか爽やかに挨拶する。義母に苛められて泣いてばかりいた少年の頃とは見違えるようだ。よい方向に変わってきたと、期待を持って詩の答案を見る。一読して、可もなく不可もなしである。詩は規則通りに作れば、それなりに格好がつくものだ。その点は上手にこなしていて可に近い。しかし、読んで興趣を覚えるところが何もない。与えられた題に対する平凡な叙述しかなく、詩想と言うものが感じ取れない。これは不可に近い。

「先人の詩をよく読み、研鑽を積みなさい」

韋莊は穏やかに言う。もしも蘭がこの詩を読んだら、どう評価するだろうか。「寢床に伏せても書ける」とは、韋莊の詩への得意の評である。それより辛辣に言うのは、泣き虫の慍にはきつすぎるだろう。

慍は少しばかり顔を赤くし、

「まだまだ勉強が足りない未熟者です」

さきほどの爽やかな挨拶とは少々異なる、淀んだ言い方をする。

韋荘は、誰の詩を学んでいるのかと問うと、慍は頬をわずかに膨らませ、著名な詩人を列挙し、

「そのそれぞれのよきところを得ようと努めております」

と、各々の詩人の長短を論じる。力のない者ほど、先人の短所をあげつらうものだと、韋荘は聞くだけ聞いてしまうと、『春秋』『書経』『礼記』から一つずつ質問を出す。貢挙の勉強から離れて何年にもなる韋荘が思いつく問いであるから、ごくやさしいものだ。

韋慍もそう感じたらしく、にやりと笑い、そんな初歩的なことを聞いてくれるなという態度で、三つの問いへの答えを早口で一気に並べる。

その答えの傍証として挙げた事項の原典を、念のためにと尋ねると、慍はまた頬を膨らませ面倒そうに、しかじかであると答える。韋荘は腑に落ちな

いが、己の記憶が定かではなくなっているの、咎めるつもりはなしに、

「しかとそう書いてあるのかい」

慍はさつと顔を赤くし、

「いえ、間違っております。お忘れになったのですか」

口を強く尖らせる。

薛未亡人に苛められ続け、性格がねじけてしまったのかと、そこは少し同

情的に、

「書物は一文字ずつ丁寧によく読むように」

と、優しい口調で諭す。慍は顔をしかめる。

「それと、一つ気になったのは、兵法家の書物も読んでるように聞こえたが、そうなのかい」

「どこがでしょうか」

韋荘は、慍が引いた言葉を挙げると、

「いえ、それは『孟子』のほうです」

胸を張って答える。

「ああ、そうだったかも知れぬ」

「兵法家の書物は見てはいけないのでしょいか」

「必ずしも悪いと決め付けはしないが、読むべきものを読んでおるかどうか気になるだけだ」

「もちろん読んでおります」

愠は鼻をひくつかせながら言う。

愠の心の内は想像がつく。ずっと前に落第し、もう試験を受ける気のない人間などにとかく言われたくないのだろう。

苦い思いの内にも、『論語』の中からそれらしい言葉を引いて訓戒を与え、引き下がらせる。愠は背中に不満な気持ちを顕わにして帰っていく。

人を戒められるような立派な人間かと、己を省みれば、それはそれで十分に面白くない話で、このようなことはしなければよかったと気が塞ぎ、晴天のもと、外を歩けば少しは気分も晴れようかと、そこらを見て回りつつ、時

折はそうするように、叔父の韋韜の隠居所へと足を伸ばす。

今日のように前触れなしにふらりと立ち寄って、戸を叩いて叔父に会えることは滅多にない。叔父は雨でなければ、薬草畑の世話をするか、狐潭で釣糸を垂らすか、先祖の詩を吟唱しつつ野山を散策するか、一度出るといつ帰ってくるかわからない。この好天ではまずいないだろうと、中を覗くと、珍しく叔父がいる。昨日、都の蘭から幾つかの荷が荘園に届き、その中に叔父宛の一箱もあった、今朝それが隠居所に運ばれ、中身はぎっしりと詰め込まれた写本。叔父は一冊ずつ、時を忘れて眺めている。

「あいつめ、よくぞこれだけ集めたものだ。朝から始めて、まだこれだけだ」机の上に積まれた本の山。箱の中にまだその数倍が残る。このおびただしい数量の写本はいずれも詩を記したものだ。叔父は詩人の名をぎっしりと挙げる。聞いたような名もなくはないが、大半は初めて耳にする。

「無名でも案外、面白い詩がある。これなどはどうだ」

叔父は一冊を抜き出し、一つの詩を読み上げる。



「ありし日の長安、春の終わりの陽気に誘われ、人々がそぞろ歩きをする様が目に浮かぶようではないか」

と、感に堪えぬ様子。

名を聞かぬのがもつともな稚拙な詩だが、春風駘蕩たる気分は出ている。

「開元年間の人であるようだ」

叔父は遠く見るように目を細める。玄宗皇帝の治世の前半期、大唐の最盛期である。泰平の日々を謳歌して陰りのないこのような詩は、そのころの人でなければ書けず、その時代であったから無名に終わった市井の詩人にも、このような詩が作れたのだろう。

叔父より借りて写本を眺めるうちに、韋荘はふと興に誘われ、

「これに似せて、一つ捻ってみましょうか」

と、即興で一篇の詩を詠じてみせる。

長安二月多香塵

長安の二月、塵さえも香り高く

六街車馬声騾騾

街はどこもかしこも車馬の響き。

家家楼上如花人

家々の楼の上に、花のような人が並び

千枝万枝紅艷新

千枝万枝に紅の花が艶やかに開く。

簾間笑語自相問

簾の内で笑いながら尋ね合う。

何人占得長安春

「長安の春って誰のものなのかしら」。

長安春色本無主

長安の春に、もとより主などいたりしないけれど

古来尽属紅楼女

古来、すべては色里の女のものとなっている。

如今無奈杏園人

しかし、進士に及第した若者がいたのではどうにも

ならない

駿馬輕車載將去

駿馬に乗り車を飛ばして、春をみなもっていつてし

まうのだ。

叔父は笑い、

「開元の風情がある。いや、たいしたものだ」

楽しく大らかな気分くらいは出せたかと韋荘は思う。

詩中にある「杏園の人」とは貢挙の合格者を指す。長安の春で最高の幸せ

者は貢举合格者に決まっている。その得意満面の姿と、意気消沈した落第者の間には、残酷なまでの開きがあつて、韋荘自身もそれを体験した。そのような個人的な経験から離れて、開元の人のように軽やかに歌う。

しかし、「紅樓の女」と詠んだときには、不意に嫋嫋の顔が浮び、胸がいささか苦しくなつた。

己のこのごろの思いを、ふと叔父に打ち明けたくもなるが、蘭が送つてきた写本を楽しそうに眺めている叔父を、そのようなことで煩わせるべきではない。叔父はいまや俗世から離れたところで身を遊ばせている。そうなつてほしいからこの隠居所を建てた。そのような叔父であるからこそ己のことをわかつてくれるようにも思うのだが、叔父のところには俗事を持ち込みたくない。

韋荘はしばらくの間、叔父と詩談義に花を咲かせ、初夏の長い午後もそろそろ終わりがけようかと言う頃合いになつてから辞去する。

隠居所にいた間だけは気がまぎれていたが、外に出れば満たされない気持

ちがあると思わずかされ、すぐに帰ることもできず、丘の最も高いところを越える道をわざわざ選ぶ。莊園の人々が「南山」と呼び習わしている頂に一人立ち、四方に広がる畿州の眺望をほしのままにすべく、尾根伝いのゆるい坂を上る。

彼方より、少年の勇ましい掛け声が響く。枝を打つ音だ。劍術の稽古をしているようだ。山頂で静寂に浸ろうとの目論見は崩れる。

邪魔をするのは誰なのかと、坂の終わりから木立の先を見透かせば、腰に布を巻くだけの姿で棒を振り回す少年がいる。伍七だ。揚州の新しい店に残した伍伝の倅である。

山頂は中央に一本の槐だけを残して広々と草木が刈られている。その槐の下で伍七は素振りをしている。伍伝は腕も確かで機転も利き、旅の間は大いに重宝した。その息子がこうして劍術に励んでいるとは感心だ。

背後から近づく足音に気づいたのだろう、伍七は動きを止め振り返る。韋莊と知ってあわてて体を小さく屈め、棒を前に控えて会釈する。

「遠慮せずに続けていいぞ」

韋荘の声に伍七は顔を上げる。細長い顔に切れ上がった目、真一文字に結んだ唇、なかなか引き締まったよい顔をしている。汗びっしりである。

「何歳になった」

伍七は背筋を伸ばし、

「十一歳であります」

先ほどから響かせていた掛け声と同じ大きな声だ。十一歳にしては背も高い。

「いつもここで稽古しているのか」

「御祖父ちゃんにみてもらっています」

「伍武もきているのか」

「そこにおります」

伍七が指差すのは槐の根元の反対側。幹にもたれて伍武が居眠りしている。かつて韋荘が打ち据えた酔いどれである。

伍七が伍武を揺り起こす。

「もう終わったのか。三百やったか」

伍武は皺くちやの目をこする。

「旦那さまがそこに立っておられます」

伍七が耳元でささやく。伍武は急いで立とうとするが、足がもつれてよける。伍七が支えながら、地面にころがる杖を取って手に握らせる。

「よい孫を持ったな」

「へえ、お蔭さまでこやつも大きくなりました。もう少しすれば、お屋敷の役にも立ちましょう」

伍武は杖にすがるようにして立つ。からだが大刻みに揺れている。

「揚州についてきてくれた伍伝は大した働き者だ。范完と二人に任せておけば店は何の心配もないと、蘭くんは言っている。よい息子にこのよい孫もいて、おまえも安心だろう」

「へえ、こんなあつしにはできすぎです」

伍武は殊勝なことを言う。酒ばかり食らっていたころは、「俺さま、俺さま」と尊大に構え、悪態ばかりついていた。いつでも目がとろんとして手に負えなかったのが、いまその目は、この孫が何よりも大事と語っているようだ。

「おまえがいたからこそ、よい倅ができ、よい孫に恵まれたのだろう」

韋荘は伍七の肩を軽く叩き、

「おまえの御祖父ちゃんは、西の遠くまでいき、たくさんの立派な手柄を立てた。我が莊園の誇りだ。そんな御祖父ちゃんに手ほどきされておまえは幸せ者だな」

「はい」

伍七は顔を輝かせる。伍武は照れ臭そうに、孫の顔を見て笑っている。

「おまえは御祖父ちゃんの手柄話を聞いたことがあるか」

「はい。もちろんです」

伍七は誇らしげである。

「あの話、王さまの幼い娘を助けたという話だが、あれをまた聞かせてくれ

ぬか」

半分以上の歯が抜け落ちてしまった口をぽかんと開けている伍武に向かって言う。

「王さまの娘。はて、いつことでありましたか」

伍武は首をかしげる。

「忘れたのか。槍でその足を突かれたという、あれだ」

「あれはですな」

伍武は目を左右に動かして思案する。その顔に韋荘は思わず笑いそうになるが、伍七の手前押し殺す。

伍武が酔っ払ってばかりいたころ、子供達を集めては昔の手柄話をよくしていた。伍武が必ず超人的な活躍をし、子供達はかたずを飲んで聞き入った。話は日によって異なり、幼い子は伍武には数知れぬ手柄があると単純に感心したが、年が長じると伍武の話を見目に見えなくなり、大人達は全く相手にしない。



伍武は額をへしへしと叩き、

「あれは、この足をひきずらねばならなくなったあの事件でございましょう。何の、何の忘れるものですか。少々長い話になりますから、お立ちになったままでは」

と、韋荘に切り株を勧め、伍武は地面にどつかと座り込む。伍七は立つて聞く。

伍武の話の大略はこうである。

漠々たる西方の荒野を進軍していくと、蛮族の襲撃を受け、命からがら王宮から逃げてきた王家の人々と出会う。事情を聞くうちに、馬の蹄の音が轟き、蛮族の大軍が姿を現す。敵味方入り乱れる激戦となり、王家の人々は逃げ惑い、伍武は、生まれて間もない娘を王妃に託される。伍武は王女を背に負い、暮れゆく大地を一人走る。蛮族の一騎が追ってくる。伍武は、勇敢にも仁王立ちになり、槍を横たえて真つしぐらに走りくる敵を迎え撃つ。敵の槍と伍武の剣が交差し、槍が伍武の腿を突く。しかし、そのときすでに早く、

伍武の投げた剣が敵の喉を貫いていた。

韋荘が記憶している話と随分と相違があるが、

「敵と真正面から向き合った証拠がこれだ」

着物の裾をたくしあげ、腿の傷を見せるのは昔と同じである。

「よいか、どのようなことがあっても、後ろに傷を負う恥ずかしい真似をしてはならぬ」

伍武に言われて伍七は大きくならずく。

「たくましい子だ。伍七のような子がいてくれればこの荘園も安心だ」

「少しでもお屋敷のお役に立ちますようにと、育てております」

「感謝するぞ。おまえにはこれから先、曾孫の代までも育ててもらいたい。

まだまだ元気で長生きしてくれ」

「あつしなどはもう老いぼれ。目の覚めるのが遅すぎました。ずっとお屋敷に迷惑の掛け通し。いまさら悔やんでもおつつきません」

「私がこうしていられるのはおまえのお蔭ではないか。伍七、この立派な御

祖父さんによく教わるのだぞ」

韋荘は立ち上がり、伍七の肩をもう一度叩く。がっしりとした骨組みだ。たくましい青年に間違いないく育つだろう。

「すっかり稽古の邪魔をしてしまったな」

韋荘は南山を下る。

一人静かに四方を眺めることはできなかったが、久しぶりに伍武の手柄話  
が聞いた。嘘か真かわからぬが、楽しくはある。

再び伍七の声が響き始める。あの少年にはまだ悩みなどないのだろう。稽  
古でたっぷり汗を流せば、何か考える間もなく眠ってしまうのだろう。

伍武はすっかり変わった。老いただけではない。酔ってくだを巻いていた  
ころとは別人のようだ。荘園にとつては好ましい変化だ。その点は、杖で打  
ちのめした甲斐があったというべきだろうが、釈然としないものがある。

伍七が剣術の稽古に励むのは、荘園に役立つ人間になるためである。それ  
ほど遠くない将来に、お上に召され、何年間か兵士として戦場を巡る。伍武

や伍伝のように莊園に帰ってこられるのは幸運な場合である。主家のために兵士になるのが定めとして伍七はこの世に生まれ出てきた。そのことに疑いをさしはさむ余地などないよう教え育てられている。

伍七が剣術を習うのと同じように、韋莊自身は貢挙の勉強を習った。そのことに疑いをさしはさむ余地のないままに、己は貢挙を受けた。生まれながらに己に定められたことだった。しかし、それは本来の己のすることではないと、やめてしまった。伍七も同じようにやめたらどうなるのか。それは韋莊にとって困ることである。

伍武の爺さんはどうして酔っ払ってばかりいたのか。韋莊の祖父と父の命を救ったのをいつまでも自慢し、酒をくらってばかりいた伍武の姿を見るのは苦痛だった。伍武がいなければ韋莊は生まれていない。伍武は間違いなく恩人である。いつもだらしなく飲んだくれている男が、己の恩人であるのがたまらなく嫌だった。伍武の爺さんにしてみれば、逆にたまらなく嫌な思いがあったのだろう。伍家の人間は命を張って仕えている。韋家の人間は莊園

で安穩に暮らしている。何か理不尽ではないのか。伍武の爺さんを有無も言わず杖で打ち据えた己の行為は理不尽ではなかったのか。それ以来、伍武の爺さんはすっかりおとなしくなった。伍七を主家のためにと躓けてくれていることに、後ろめたいものを感じる。

伍武の爺さんがもしも違うときに違う場所で生まれていれば、もっと別の生き方があつただろう。酔っ払ってばかりいた何十年間かは、莊園にとって大いに迷惑であつたが、伍武の爺さんにとつても大きな損失だつただろう。最も充実した日々が送れるはずの年代を無為に終わらせてしまった。伍武の爺さんにとつて本来はどのような人生が望ましかつたのか。それはわからない。わかつたところではいままから取り戻せるものではない。

何かが間違つたのではないか。それは何であるのか。

坂を下りゆくと、道の脇に小さな祠がある。お狐さまの古い祠である。池の新しい立派な祠にお狐さまは移り、楊爺が長年一人で大切にしてきた元のこの祠は、草木の中に取り残されている。それが寂しいものとして目に映り、

韋荘は祠の前に立ち止まり、手を合わせる。

去年は留守をしてしまった祭を今年は盛大に行おう。伍武の爺さんにもそのときばかり大いに呑んでもらおう。いまできるのはそれくらいだ。

韋荘は、すっかり日の暮れたなか、屋敷に帰るとすぐに都の蘭に手紙を書く。秋の祭で莊園の者にとびきり良いものを配りたいから、いまからよく吟味してほしいと記す。

### その祭まであと二日。

韋荘は南山にいる。剣術の稽古をする伍七の姿は今日はない。埤に帰るまでのひとときを思い思いに惜しんで過ごすかのように、遠く近くで鳥が囀る。祭を前に、山頂の枝や下草が刈り払われ、いつにもまして広々と四方を見渡せる。この眺望を一人静かに楽しもうとここにきたのではない。

日は西空に傾き始めている。山頂に立つ一本の槐の蔭より出て、南東の空

に向かう。風のない穏やかな秋、空は淡い水色に煙り、視線を上げていけば、次第に土の色がまじりくるかのように、空と大地との間は朦朧として、遠く決してここからは見えはしないけれども、ぼんやりと濁る彼方に揚州が存在しているはずである。

いまさら後悔しても遅い。後悔とは常に遅れるものだとしても、いまはいかにも遅すぎる。すでに半年も経ち、いまさら後悔もない。

なぜ揚州から帰ったのか。踏みしめている地面から突き上がって、己の身を刺し貫くものがある。それは自責の念か。耐え難き痛みに、どうにかして身を保って立っている。

痛みがあるからといって、それで帳消しになるものではない。立っていらなくなつて当然、目はあけていられず、息はできず、己がここに存在できなくならなければその方がおかしい。それなのに、生きて後悔している己がここに立っているのが疎ましい。そう思っている己がいるのが疎ましい。

なぜ揚州から帰ってきたのか。

揚州の店から伍伝が戻ったのは今朝のこと。祭に合わせてやはり帰ってくる蘭に店の状況を報告するためである。蘭はまだ莊園に着いていない。

伍伝はすぐに東の屋敷にいき、薛未亡人に帰還の挨拶をした。莊園の主は韋莊であるが、儀礼的なことは薛未亡人が先である。

店は至極順調であると伍伝が報告すると、薛未亡人は満足気に伍伝をいたり、豪勢な食事をふるまった。たかが一使用人の分際にと、伍伝は恐縮したが、薛未亡人は伍武の爺さんをはじめとして伍家の主だった者呼び、気前のよさを大いに見せた。

薛未亡人は間もなく還暦である。韋韜を「能なし」と罵っていた壮年のころは、言葉に棘があり、瘦せた顔立ちはぎすぎすとした印象を与えた。いまでは、ゆつたりと教え諭すように話し、顔もふつくらと、どちらかと言えば福々しいと見えるほどになった。莊園の人々を畏服させた自信が薛未亡人を変えたのだろうか。

伍伝はすっかり商売人らしくなった。蘭の見込み通りだ。揚州の町の噂話



を面白おかしく語って、薛未亡人を喜ばせた。薛未亡人はすこぶる上機嫌で、伍武の爺さんに向かって息子を褒めちぎり、上等の酒を伍武のために持つてこさせた。伍武は「明後日のお祭でたんといただきますまでは、酒は断っておりませう」と遠慮した。それが薛未亡人をさらに喜ばせた。

韋荘もそこに並び、宴が終わった後で、伍伝を連れて西の屋敷に移り、改めて揚州の様子を聞いた。薛未亡人への報告に虚飾はなく、店は順調そのものであった。それはよかったのだが、伍伝は周囲に人がいないのを見計らつて、

「実は」

と、耳打ちした。それは嫋嫋の消息であり、最も聞きたかったことであり、聞いた後では、最も聞かずにおきたかったことだ。

伍伝のそのときの声が、南山に立つ韋荘の耳にまた響く。

「嫋嫋さんが亡くなられました」

韋荘は耳を塞ぐ。無駄である。もう聞いてしまったことは消えはしない。

死んですでに二ヶ月。病死、それは悲嘆からのものであると伍伝は噂に聞いていた。

韋荘は茫然自失のまま、いつしか屋敷の外に出て、そのうち狐潭のほとりをとぼとぼと歩き、楊爺に出会った。祭に関わる二三を尋ねられた。何を訊かれているのかわからず、「いつものように任せる」と適当な返事をした。気がつくとき、ここにきていて、南東の空を見ている。

なぜ揚州から帰ってきたのか。いまさら後悔してもどうにもならない。己を責めて行き詰まり、涙が頬を伝う。泣いてどうかなるものではない。

こうなるともしもわかっていたのなら、嫋嫋を揚州に置いて帰っただろうか。それを問うてどうかなるのか。

一篇の詩がよみがえる。

晴煙漠漠柳鬢

揺れる柳に淡い靄が流れる

不那離情酒半酣

離別の酒は醒めようとしない。

更把馬鞭雲外指

馬の鞭をとり雲の外を指す

断腸春色在江南　この胸の痛み、江南のこの春。

揚州を出た次の日の朝にこう歌い、これをもって揚州との別れとした。

韋荘は目を閉じる。揚州がその下にある空の方に目を向けているのはつらい。

なぜこのような詩だったのか。

断腸春色在江南　この胸の痛み、江南のこの春。

そう繰り返せば、あのとときの苦しさがいまの後悔に重なる。

恥ずべき詩だ。揚州は正確には江南ではない。そこからして現実から離れて曖昧にし、普通の離情を装って歌った。嫋嫋がいたからこそその思いは詠まらず、己の心から遠いところで言葉を並べた。己自身を傷つけまいとこうしたのか。実際のところ、この程度の詩に見合うものしか己の心にはなかったのか。

真に嫋嫋を思う気持ちがあつたのならば、こうではなかったはずだ。詩などつくらず、あのとときにだって揚州へ取って返そうとすればできたはずだ。

この詩を詠んだとき、馬を並べる蘭がいただけだ。もしも、「嫋嫋とは別れられない」と言ったならば、蘭のことだ、きっと引き止めたりしなかっただろう。ところがそれとは反対のことをした。

「兄貴は俺を恨んでいますかな」

と、蘭は言った。それでもしも、

「恨んでいる」

と、叫び、馬に鞭を当て、揚州に駆け戻ったらどうだったか。

「あくまでも私が決めたことだ。これで終わったのだ」

韋荘は穏やかに答えた。

「恨まれても仕方がないと、俺は思っていますな。兄貴の情は俺にはわからない。だからこうした無茶もできるのですな」

「いつも通り、そなたには助けられている」

そのときの己の言葉にどれほどの確信があったのか。

過ぎ去ったことを目を閉じて思うつらさに負け、韋荘は目を開ける。遠く

揚州の空がある。

偽りの詩と、偽りの言葉。嫋嫋に最後に言ったのは「必ずまたくるから」。嘘であると互いに了解しているから別れが成り立つとは、これ以上に醜い理屈があつただらうか。

韋荘は揚州の空に背を向け、槐の大木を見上げる。

己が為したのは、偽りに偽りを重ねたという一事だ。本来の己とは、恋をする己であると思つたのはいったいどういうことだったのか。

虢州に帰り、歳月の流れゆくままに忘却させてしまおうとしていたところに、嫋嫋の方は忘れようとはしないで、自身の命を終わらせた。嫋嫋は真実の心を貫き、己は偽りの心に逃げた。生まれて初めて恋した女であつたのに、最後は真実の心で応えようとしなかった。

そもそもは韋荘の一目惚れから始まった妓楼通いだった。嫋嫋は始めはとまどいがちであつた。夏に向かつて、二人の間の情が細やかになり、最良のときを迎えた。夢のような日々だった。秋風が立つところから、韋荘がいずれ

は帰る身であることが、暗い影を落とし始めた。嫋嫋の情は日々確かなものになり、韋莊はそれに反して、燃え上がるのが早かったせいか、熱情をそのままには維持し難くなった。嫋嫋の素朴かつ内気であるところに韋莊は惚れたのだが、慣れ親しむにつれて、それが物足りなくなっていく。わずかな齟齬から嫋嫋がうつむいて黙ってしまうと、韋莊はもどかしさから粗雑な言葉を発し、ずれが大きくなった。長安の一流の妓女と比べてはいけないのだが、嫋嫋は文雅の素養に乏しく、韋莊の興をそぎもした。詩の意味を説明してやるのが煩わしくなり、当意即妙の返答がないのが味気なくなった。

秋の深まりとともに、蘭が気持ちの整理を促し始めた。嫋嫋は所詮色里の女、心の底から惚れたりするはずがないと、蘭の言うように、韋莊も強いて思ってみようとした。嫋嫋がしみじみとした情をときに見せるのは、己を引き止める手立てであろうと疑ってみようとした。嫋嫋が、金が切れればそれで終わりのただの遊び女なら、未練なく別れられるのにと、理不尽な考えも持った。

旅が一年を超えても、虢州にはまだまだ帰りたくないとの思いがあった。以前と同じ日々に戻りたくない。新たな何かを掴もうと出た旅であるのに、何もまだ得られていなかった。何もなしでは帰れない。しかし、揚州でいつまでもぐずぐずしている訳にはいかない。

冬になると変化があった。嫋嫋が冷たいそぶりを見せるようになった。韋荘はとまどいつつも、これで己の恋も終わりになると理解した。

仏蕃に寄進すると約束した堂の建設が進んでいた。完成すれば揚州に居続ける理由はない。堂の壁の画を貫休が描き終われば落成式で、いよいよ別れである。嫋嫋はよく承知していたようだ。

手のない少年の孫何に会って間もなく、韋荘と蘭は含弘山寺を訪ねた。そのときは、貫休は汴州から戻っておらず、一篇の詩を置いて立ち去った。秋の中ごろの雨の日に、貫休がふらりと妓楼に姿を見せた。相国寺で会ったときよりよい僧衣を身につけ、顔もいくらかふつくらしていた。大勢の着飾った女が脂粉の香をぶんぶんさせる中に混じって貫休は臆することなく、韋荘、

韋と詩や画を談じた。書にも一家言あり、筆をとるや、珍奇な書体を披露して二人を驚かせた。

仏蕃の堂の壁画を依頼すると、

「画とは筆が描くもの。一本の筆が、天地間に漲る生氣を受け得たときに画は初めて成ります。愚僧が頼まれ、引き受けましようとして、筆をとつても、それで描けるものではありません。逆に、筆が生氣を受けたときには、愚僧が腕を止めようとしても、画は自ずと成りましよう。そのようなときがいつくるのか、筆に聞かねばわかりません」

と、応じようとしなかった。

妓楼から貫休が帰ると、蘭は伍伝にそれなりの金子を持たせて寺に届けさせた。しばらくして、仏蕃と貫休を引き合わせた。韋莊は同席しなかったが、大柄の二人の僧が向かい合った様はなかなかの見ものであったらしい。貫休は仏蕃を見ると、腹を抱えて笑った。

「お堂はどこにおつくりですか」



貫休の間に、仏蕃は建築中の堂へと案内した。貫休は作りかけの壁を見て、「次にここには、筆に導かれて参ることになりましょう。いつになっても知れませんが」

と、言った。

年の瀬も間近になったある朝早くに、貫休は堂に現れた。昨夜の夢に羅漢を見たと言い、描く準備をにわか始めた。孫何を助手に呼び、以来、堂に籠り切りとなった。

貫休の仕事は速かった。一方で、嫋嫋と韋荘の感情はもつれていった。嫋嫋がつれなくするのは、むしろ本物ではなく、別れに備えてのことだと、韋荘ははつきりと感じ取り、恋心に再び火がついた。秋の間に、嫋嫋にも足りなきを感じたことが、心に刺さる棘となり、ここで己の真情をどうかしてわかってもらいたいとの思いに駆られた。嫋嫋は拒んだ。韋荘は己の心をどうしたものか持て余した。

韋荘はふらりと貫休の仕事ぶりを見にいった。想像していたのとはまるで

異なる画を貫休は描いていた。羅漢とは悟りを開いた仏陀の高弟である。それまでに見たことのある羅漢図は、いずれも無念無想、穏やかな風貌のものばかりだった。貫休の羅漢図はかけ離れていた。およそ悟りとは無縁のような顔だ。ぎろりと目をむき、ふてぶてしさにあふれる羅漢が壁の中に居座っていた。貫休はそのような羅漢を夢で見たと言う。しかも、一晚に一人ずつ順に十六人の羅漢に会ったと言う。さらに珍妙なのは、どの羅漢もどこか仏蕃と似ていることだった。

仏蕃は信用のならない似非坊主であるとの印象は、何度会っても拭い去ることはできなかった。貫休は汴州で会ったときよりも僧侶らしくなっていた。孫何少年が貫休に心服するのも、もつともであるとうなずけた。画道と仏道を究めようとしている貫休に、この羅漢図はそぐわないものがあると感ぜられた。

羅漢図の前でとまどう韋荘の脇で、貫休がふふつと笑った。

「迷妄は払おうとして払えるものではありません。迷妄の底にまで達したと

きに初めて迷妄の外に出られるのでしよう。迷妄に耐えねばそこまでは至らず、耐えるには、これくらいのも面魂が備わっていないなければならないでしょう」

不意に韋荘の頬が赤く染まった。己の風貌は優しく名門の子弟として恥ずかしからぬものである。それが嫋嫋を己に引き付けもしたのだから、嫋嫋との恋が己を悩ませ、どうしたらよいのかわからなくなった。羅漢たちは、人間の根源的な苦しみについて悩み抜き、悟りを得た。最も難しい問題を深めていくには、このふてぶてしさがなければならぬだろう。小さな悩みに捉われている人間はやはりそれに見合った小さな顔しか持たない。韋荘は羅漢図の前で一人恥じ入った。

一 年が改まってすぐに羅漢図は完成した。蘭は、揚州の名士を招いてお披露目をした。羅漢図の前から幕がはずされると、人々は驚嘆した。貫休の名は一躍揚州の人々の間に知れ渡った。

次の日の朝である、蘭は二頭の馬を曳いてきて、

「荷は舟に乗せ先に出しました。こいつにまたがって、ぼくりぼくりといけ

ば、泗州あたりで追いつきましような」

と、樂しげに言った。

何の相談もなく蘭はそのようにした。韋荘は即座に了解した。別れは突然であつた方がよい。

「必ずまたくるから」

嫋嫋に告げて、それで終わりだつた。そして嫋嫋は死んだ。韋荘と別れてじきに床に伏せ、夏の暑い盛りを前に。それが伍伝から聞き得た全てだ。

疑いもなく己が嫋嫋を死なせたのである。もともと嫋嫋に惚れたのは己である。そうでなければ嫋嫋は己を知ることさえなかつた。その己が理不尽な別れを告げ、嫋嫋を死なせた。つまりは殺したのだ。

嫋嫋の死を聞いて泣いた己は醜い。己が死なせておいて、それで泣くとは。南山でそんな涙を流し、ひと通りの悲しみにひたつてから、坂を下つて屋敷に戻る。それで終わりだ。伍伝から聞いたことなどはや何もなかつたかのように、元の己に戻り、後は平然と暮らすのである。あれほど嫌がつていた

莊園での日常を、何食わぬ顔で送っていくのだ。それでよいのか。よくないと云ったところで、他に何があるのか。

韋莊の胸は痛み続けている。赤く燃え盛る炭を投げ込まれたようだ。この痛みがあるから、己には、全くの偽りではない真実の心があるのだと、言い訳をしようとしている己がいて、韋莊は嫌悪を感じる。この身をできることなら引き裂いてしまいたい。

それでどうにかなるのならどうかしたい。この狂おしき、どうしたらよいのか。たとえ、引き裂いたところで、死んだ嫋嫋がどうにかなるものではない。要するに全ては己への言い訳でしかない。どこまでも身勝手なのだ。

そうだ。己は身勝手である。いつか己のために生きようと決めたのではない。かかったか。莊園のため一族のため先祖のために貢奉を受けるなどというのは金輪際やめて、先祖も一族も莊園も己のために使っていこうと思ったのではないのか。妾の子の韋愠を杖で撃って平然としていられる己を皆に見せつけたではないか。血がほとばしるのを見て言い知れぬ快感を覚えた己がい

たではないか。

それがいまは何だ。遠くの空の下で、一人の妓女が死んだと聞いて、なぜ動揺しているのだ。女が死んだのはもう二ヶ月も前だ。いまさら涙を流してどうなるのか。後悔したところで遅すぎる。

だったら後悔などするな。涙など流すな。偽りによって女を死なせたのなら、その偽りこそを貫いたらどうか。女を捨てたのだ。だったら、嫋嫋が死んだと知ってもいささかも心を動かささないよう薄情さを貫くが良い。死んだ嫋嫋も、そんな己を見れば、俗世への妄執を断って、成仏できることだろう。

己は卑劣な男だ。嫋嫋を死に追いやった男が卑劣でないはずがない。それを認めよう。泣いたり後悔したりしたのは、卑劣と言っても弱すぎる。どうせなら、迷妄の底に達するまでに卑劣さを極めたらどうか。

「非情であれ」

己に言い、大木を凝視する。木に情があるのかないのか、それはわからない。木の枝の先に秋の空。天に情があるのかないのか、それはわからない。

しかし、己には情がないと決めよう。卑劣を極めた先にあるのは非情だ。今日まで己には貫くものがなかった。この南山に立ついまから、己には、貫くべき非情があるでしょう。己のために生きると言いながら、いままでは何と不徹底であったことか。一人の女が死んだくらいで泣く男ではいけない。非情な己でなければ、これから乱れていく世をどうして乗り切っていけるのか。裸ん坊の朱温のようなむきつけき男に負けぬには非情でなければならぬ。

南東の空を見る。もうここには涙する己がいなくなっているのを確かめる。「非情であれ」

もう一度己に言い聞かせ、南山の坂を下る。

西の空に低くなつた日が、枝々の上の方にだけ光を浴びせる。埒に帰る鳥が、小さな群れを成して頭上を通過する。

旧いお狐さまの祠の脇を素通りし、じきに道にぶつかる。左は屋敷へ、右は狐潭に通じる。先ほどいい加減な返事をした楊爺のところに行くか、それとも、もしかしたら韋蘭が帰っているかも知れない屋敷に行くか、小さな思

案をする。

背後に足音が響く。山には己一人しかいなかった。誰がくるのかと、振り返る。薄暗くなった木立の間、小走りでやってくるは一人の少年。剣術の稽古をする伍七ではない。

韋荘が立ち止まったのを見て、少年は足を止める。誰であるのか。細い体は息子の純だ。

一度は止まった息子が、すぐに思い直したかのように、韋荘の目の前にまどくる。息が弾んでいる。走ってきたせいだけではなさそうだ。緊張したこわばった顔つきである。

息子が突然どうしてここに出てきたのか。韋荘は少し身構える。

純は父の前で手を組み合わせ、揖するでもなく、何か言うでもなく、おどおどといまにも泣き出しそうな顔になり、そのままうなだれる。この父を恐れているのか。

純は十四歳だ。伍七の方が余程上に見える。昔からこんな子だった。まと



もにものと言えないのは、いまになっても変わらない。韋荘は不快になる。

息子はようやくやくぎこちなく礼をすると、肩をすぼめ、全身を揺する。何とかして声を出そうとしているかのようだ。韋荘はもどかしさから、舌打ちする。息子の体がびくりと動き、一段と深くうなだれる。

いましがた非情な男となった韋荘である。このまま息子を置いていつてしまおうかと思う。それでは、勇気を奮って出てきた息子が可哀相かと、さすがに父親としてそう思うと、息子も正念場と、

「父上」

と、声を出す。震え声だ。父と息子が二人だけで向き合うのは何年ぶりか。やっとのことを出してきた細い声に、不意に、息子が愛しい存在と思える。たった一言のために、これほどまでに息子は緊張している。

息子は次の言葉が出せずに首を垂れる。

韋荘はすぐにまた別の思いに駆られる。この息子を怒鳴りつけ、荒々しく脇に押しやり、この場を離れてしまいたい。非情な男にこの息子は似合わない

い。

「どうしたんだ」

発した声は、自分でも驚くばかりに厳しい。息子は身を震わせる。疎ましさの不憫さが交じり合い、

「言いたいことがあるのなら言ってみるがよい」

今度は幾分か穏やかな声だ。

純はしばらくもじもじと、言葉を搾り出そうとする。

「父上にお聞きしたいことがあります。お尋ねしてよろしいでしょうか」

「何でも聞くとがよい」

「では、お尋ねいたします」

息子は一瞬顔を上げ、そこで言いそびれ、下をまた見て黙る。

「どうした、言いかけてやめるな」

韋荘に厳しく促される。純は深い息を吐く。

韋荘はまた胸を衝かれる。身をかがめ、息子と同じ高さになって顔を覗き

込む。これほど間近に息子の顔を見るのはどれほど前からのことか。

「さあ、言ってみなさい」

息子は目だけをわずかに上げる。父が笑みを浮かべるのを見て、

「ではお尋ねします」

「なんだ」

「父上は、もう貢奉はお受けにならないのでしょうか」

韋荘はからだを真っ直ぐに伸ばし、息子の頭を上より見下ろし、腕を組んで脇の枝先を見上げ、

「その気はない」

ぶっきらぼうに答える。

「やはりそうなのですか。それだけなのです」

純は頭を下げる。

息子はこんな質問をしにわざわざきたのか。しかも、これほどまでに緊張して。

韋莊は、己がうろたえ始めていることに気づく。貢挙について聞かれたか  
らなのか、息子に聞かれたからなのか。

「父上、身のまわりにくれぐれもお気をつけください」

息子はくるりと背を向け、たちまち坂を駆け上る。

「待て」

韋莊は言うが、その声は小さく、純は薄暗がりの中に姿を消す。

あたりは静まり、何事もここではなかったかのようだ。

何だったのか。訳の知れぬ不可解な出来事だ。

とにもかくにも、屋敷に戻ると決める。蘭が帰ってきていれば、気分を一  
新させてくれるに違いない。

小道の横で狐潭からの流れが小さな音を立てる。この水が水車を回し、田  
畑を潤し、莊園を支えている。いつもなら気持ち落ち着けてくれるせせら  
ぎの音であるのに、今日は逆に胸がざわつく。どうしたことか。嫋嫋の死と、  
息子の奇妙な行動。動揺した心はおさまらず、歩くにつれて鼓動が早まり、

その音が耳に聞こえてきそうだ。

秋の夕暮れは思いの他に早い。あたりは暗がりへと沈みつつあり、桑畑の横まできて、莊園の人々はすでに家路についてしまったのか人影がない。

不意に、ぞくつと寒気を覚える。韋莊は胸の前に腕を組む。腕の力で、からだに走る悪寒を抑え、胸の鼓動を鎮めようとする。自ずと足が止まる。

己は何であるのか。己は変えられないのか。問うても答えのない思索へと沈む。非情になると決めて、すでにまた迷っている。半ば目を閉じ、周囲から己を切り離し、己のなかへ入り込んでいこうとする。

ここに歩く韋莊が、もしも、貢拳の勉強ばかりをしていたころの韋莊だったならば、全ては終わりだったのだろう。韋莊は思考の深まりとともに、立ち止まり、そうしていることさえ意識から失われ、まして、近づきつつ足音があるとは、気づきようもない。

そのままでは終わりとなる最後の瞬間に、韋莊の体が反応した。右にわずかに動き、それが韋莊の命を救う。

熱い。左の股の裏側、火のような熱さが走る。

韋荘は飛びのく。駆けようとして、足が崩れる。これは火ではない。痛みだと自覚するより先に、地面を蹴る足の力がなくなる。二歩か三歩か進んだろうか、体がかくんと前のめりになる。斬られたのだ。そう了解したときに、林の中にころがり込み、腕を木の幹へと伸ばし、指先が掴めたとわかった瞬間に力を込め、身をぐいと引き入れる。

後ろを見返る。刀を振り回す男がいる。誰だ。

身をよじつていまま少し林の中へと入る。手が腿の後ろを押さえる。ぬるつとし、激しい痛みが突如始まる。

声を出しそうになるのをこらえる。

あれに斬られたのだ。刀をやたらに振り回す男は誰だ。刃先が枝に当たり、ばちばちと音が響く。あいつは動転しているようだ。

そうとわかつて、韋荘は少し落ち着いてくる。ずるつと身をひきずり込む。

「どこへいった」

外の男が叫ぶ。聞いたような声だ。男は動きを止め左右を探る。韋荘は息を潜める。

男は刀をぐるぐるまわし、

「こつちか」

見当違いの方角に向かって怒鳴る。その声は、まさかあの男。そうかと思うと、からだつきはそれらしい。

「どこにいった」

男は今度は林の中を覗いて怒鳴る。韋荘はじつと音を立てずにいる。

男は右に走ってあたりを探り、左に走って探る。

「どこにいった」

また叫ぶ。狼狽している男が、より確からしくあの男に見えてきて、韋荘は安堵する。傷は痛むが、あいつなら殺されることはあるまい。

桑畑の方に、馬の駆けくる響きが起こる。男はびくつとし、

「おい、どこへいった。返事をしてくれ」

何だか哀れっぽい声を出す。これで間違いない。妾の子の韋慍だ。馬の響きはたちまちすぐ近くになる。

「誰だ。そこで何をしている」

怒鳴る声に、

「きゃっ」

と、慍は妙な叫び声を上げて、林へと飛び込む。がさがさばささと、韋が倒れる近くを通り、一目散に奥へと突き進んでいく。

馬が外に現れる。そこから飛び降りたのは声でわかっていた。蘭だ。助かったと思う。

「私だ。ここだ。斬られた」

声が出る。

「兄貴」

蘭はすぐに駆け寄ってくる。

「死ぬほどのことはない」



韋莊の言葉に、手探りで傷の様子をみて、

「誰にやられたのですかな。刀で後ろからとは、よほど恨まれるようなことをしたのですかな」

腿を縛ってくれる。

「慍だ」

「慍が、兄貴をですか。ということとは」

「思い当たることでもあるのかい」

「それはどうですか。で、慍は逃がしますか」

「許さぬ」

韋莊は先ほどの決意を思い起こす。

「捕まえるのですな」

「断じて許さない。慍の仕業ならなおさらだ」

蘭は立ち上がり、懐より笛を取り出し、高い音で強く吹く。世の中が物騒になってきたので、何かあったときには呼び子を鳴らして人を集めることに

なっている。蘭はその音に似せる。

「とにかく屋敷に戻りますかな。痛んでも、我慢して馬の背で揺れてもらわねばなりませんな」

「大丈夫だ。歩かずにすむだけでした」

蘭の背に負われて道に出る。

第一番に楊爺が駆けつける。たまたま狐潭から屋敷に向かう途中で笛の音を聞いたと言う。蘭が手短かに説明する。愠の名は出さない。楊爺は憤慨する。

数人の男達が集まってくる。

「旦那さまに狼藉を働いた犯人を逃がすでないぞ。荘園の外に出られぬよう、林の四方を固めろ」

楊爺は怒りの声で指図する。

「向こうがもしも乱暴を振るってきたら、斬り捨ててもよろしゅうございましょうか」

楊爺の間に、韋荘は、

「むろんだ」

と、答える。

莊園はすぐに大騒ぎとなる。松明を手にした男達が処々に散り、広場には煌煌と篝火が燃やされる。

韋荘の傷はそれほど深いものではない。屋敷に着くまでに馬に揺られたせいでかなり出血し、榻に身を横たえようと、たちまち気が遠くなる。

次に気がついたときに、韋荘は、己の手が誰かによって握られているとまじ意識する。目をあけると薛未亡人である。

眠っている間この感触がずっとあったようだ。それが痛みを和らげてくれたのか。揺れる灯に薛未亡人の顔を見て、信じられないことが起こっていると感じる。

「御心配をおかけして申し訳ありません」

韋荘が身を起こしかけるのを、薛未亡人は止め、

「じつとしていなければいけません。動くとも傷が開いてしまうと、蘭ちゃん

が言っていました。どこの名医もあの子にはかなわない。あの子がいてくれて本当に良かった」

薛未亡人の眼差しは我が子を見る母親のようである。己の母にそのように見られた記憶は韋荘にはない。母とはこのようなものなのか。どうしてそのようなことを思うのか、韋荘にはわからない。

「おまえにも心配をかけたな」

薛未亡人の後ろに立つ弟の藹に向かって、不可思議ないまの気持ちを押しつけるように言う。

「誰がこんなことをしたのでしょいか」

「暗がりです、誰なのかわからなかった」

韋荘は顔をしかめる。薛未亡人がいて、愠の仕業とは言い難い。

「犯人はすぐにここに連れられてくるでしょう。こんな酷いことをして逃れられるはずがない。私が絶対に許しません。よりによって祭の前の大事なとき」

薛未亡人は怒りの形相になる。

韋荘はしばらく天井を見つめ、

「蘭くんは」

と、弟に尋ねる。

「後れた一行が到着したので、広場に下りていきました」

「蘭ちゃんは祭の品々をたくさん都から持ってきてくれました。それなのに

これでは、日延べを考えないといけないだろうね」

薛未亡人は韋荘の心を探るように言う。

「それはいけません。お狐さまのお祭は荘園の大事。延期をしたら、私を襲

った下手人に笑われるでしょう。お祭はいつも通り、いや、いつも以上に盛

大に行いましょう」

「さすがは荘ちゃん、立派です。これでこそこの荘園は心配なし。こんな大

切な荘ちゃんを狙うとは、とんでもない。絶対に捕まえて、さて、どうして

くれようか」

と、ひとしきり怒りを顕わにしてから、

「私としたことが、怪我人の横であまり騒いでもいけない。今夜はゆっくり休んで、傷を治すのが一番です」

薛未亡人は韋荘の手をいま一度握り直して部屋を出ていく。

その手の感触が薄れ、代わりに傷の痛みが戻ってくる。

藹が静かに立ち続けているのに目を向け、

「あれは慍だ」

小さくつぶやく。弟が顔を寄せる。

「慍が斬りかかってきたのだ」

「慍くんでしたか」

藹に驚く様子はない。弟が喜怒哀楽の情を表にしないのはいつものことだが、何やら納得しているようでもある。

「心当たりでもあるのかい」

蘭にも同じことを言った。

「慍くんならと思っただけです」

「慍に恨まれることを私はしたのかい。杖で撃つたことか。あれはもうずっと前のことだ。それだけに、十分に良くしてきたつもりだ」

慍に勉強部屋を与え、金銭の不自由もさせていない。勉強の進み具合を見てもやった。いまも、薛未亡人に告げないだけの気遣いをしてやっている。慍は何が不満なのだ。

「では、慍くんではないのでしょうか」

「いや、あれは慍だ。あの声とあの姿、慍以外にはいない」

「恨んでいるのが、慍くんではないと、私は思うのです」

「何だい、どう言うことだ。慍は誰かの代わりにやったのかい」

藹は答えようとしない。

韋荘は目を閉じる。弟は言いたくないのだろう。無理強いしたくない。

慍は誰の代わりにしたのか。弟が言いたがらないのは誰だからなのか。その答えなら一つある。そうだったのか。

傷の痛みに火がつく。からだ全体が燃えるようだ。

あれか。そうなのか。あれか。

ならばどうするのか。許さないままで。断じて許さない。非情になると決めた己だ。決して許しはしない。

焼けるような思いにしばらく目を閉じたまましていると、蘭が戻ってくる。

蘭は部屋に入るなり、後から着いた者たちについて勝手に話し出す。都から同行したのは五人。楊爺の甥の助、店の若い者二人、韋莠の娘、それに小間使いの阿枉（あおう）だ。莠の娘は九歳になった。久しぶりに祭を見たいと強く希望し、それで遊び相手に二歳上の阿枉も一緒にきた。子ども連れで思うように道がはかどらず、予定よりも二日ほど遅れた。今日も莊園を前にして日が暮れかかり、韋蘭だけが先に馬を走らせて到着し、迎えを呼ぼうとしていたのだった。

「今日はあきらめて、途中で泊りと決めていたら、兄貴は、道端で冷たくおねんねだったのでしょうな」



蘭は笑う。

「私一人でも、あれには負けぬ」

「どうですか。後ろに傷を負っては、伍武の爺さんに笑われましような」  
韋荘は苦笑する。あれで慍の肝がもう少し太ければ、やられていたのか。もしも己が死んでいたら、ここはどうなるのか。慍が下手人だとは知られずにいて、そのうちにもしかして慍が貢挙に受かったりすれば、あれが莊園の主となるのか。薛未亡人だって、貢挙に受かったら、嫌でも慍の存在を認めない訳にはいかないだろう。

そううまくいくものか。己でさえ落ちた貢挙だ、慍には無理だ。慍はまるで勉強が足りない。この前、それを思い知ったはずだが、注意を受けたのを逆恨みしたのか。

「分別のない者の、突然の暴挙は防ぎようがない」

韋荘は吐き捨てるように言う。

「そうですか。突然なのですか。何か兆しがあったのではありませんか

な

蘭に言われ、旧い祠の前で息子に会ったのを思い起こす。そうか。からだ  
がまた熱くなる。息子は知っていたのか。どうして知っていたのか。明らか  
だ。弟が言う通り、愠は人の代わりにしたのだ。それは誰か。息子が知って  
いたのだから一人しかない。あれだ。純の母親だ。韋荘の妻だ。

なぜ妻がと問うまでもないことだ。妻と愠は莊園の中で孤立している。二  
人には薛未亡人に嫌われていると言う共通点がある。妻が嫁入りしてきてす  
ぐに、すなわち愠が十歳のころに、二人はその共通点によって親近感を持つ  
た。それから十余年、韋愠もとつくに立派な大人になり、妻は三十半ばでも  
との美しさを保っている。ここ一年半は韋荘は揚州への長い旅に出ていた。  
その間の日々を二人はどのように過ごしたのか。

決して許さない。

蘭は韋荘の表情を見て口を曲げ、

「いまはともあれ、ゆっくり休まれるのですな。朝、目を覚ませば、痛みも

和らぎ、事件も結着となりましょう」

藹の肩を押して、一緒に部屋から出ていく。

一人になると、いよいよ増す傷の痛みにも、非情を貫く決意をいっそう強く固める。

**広**場を臨む石段の上に立つ。弟の藹の肩にすがる。

蘭には無茶だと言われた。結着をつけるにはこうするのが良いと、朝までに決めた。

石段の下に集められた一族の者は韋荘の姿を見て静まり返る。

「この通り、私は無事である」

弟の肩から腕を離し、一人で立ってみせる。

朝日が林の上にある。東の門の前に置かれた椅子より薛未亡人が立ち上がる。

「この莊園は、先祖の遺徳、お狐さまの靈力によって守護され、何人といえども傷つけることはできません。見るがよい。我が莊園の主はあのように堂々と立っているではありませんか。私はここで莊園の主と皆をこの目で見えます。この莊園はどのようなことがあるうとも、昇りくる日を誰も止められないように、永久に繁栄を続けるのです」

薛未亡人は両手を朝日に向かって伸ばす。広場に万歳の声が起こる。

韋莊が言う。

「明日は大事な祭である。揚州の旅に出ていた私にとっては三年振りだ。これまで以上に盛大に、そして皆には存分に楽しんでもらえるように準備を進めてきた。それは計画した通りに行く。この莊園はいかなることによっても、いささかたりとも揺らぎはしないのである」

再び歓呼の声が起こる。

「明日のために、今日はしっかりと準備をしてもらいたい。諸君らが心おきなく仕事に励めるように、言っておきたいことがある。皆も聞いているよう

に、私は夕べ、襲われ、危うく殺されかけた。しかし、お狐さまの御加護によつて、私はここにこうして元気に立っている。大事なお祭を前にこのような不逞を働いた者をお狐さまは断じて許しはしない。お狐さまは大いに怒っておられる。そのお怒りを静めるにはいかにしたらよいか。むろん、皆も良く知っている通りである。その者の肝をお狐さまにお供えし、お許しを請うのである」

「おお」

と声が広場に湧く。

「お祭は明日。一刻の猶予もありません」

薛未亡人が声を張り上げる。

「では、その者をここに連れ出せ」

韋荘が手を挙げて合図をすると、東の林より楊爺が姿を現す。九年前と同じように、縄で縛られた男を引き出す。前と同じようにうつむく韋愠が、背中を押されてよろよろと出てくる。

愠は東の石段の下までくると、叫び声を上げてひざまずき、薛未亡人に許しを請う。泣きながら訴えるが、楊爺に縄を引かれ、若い者に背中をどやされ、地面の上をころがされるようにして、西の石段の下に移動させられる。愠はうづくまる。

「皆にこの者の顔をよく見せてやれ」

韋莊の指示で、若い者が愠のからだを前に向け、顎をぐいと上に引き上げる。愠は涙で崩れた顔を人々の前にさらす。

「よく見るがいい。愚かなこやつを顔を」

韋莊は石段を降りる。傷が痛むが構いはしない。

愠はがたがたと震え出す。韋莊はその脇に立ち、蘭より仕置き用の杖を受け取る。

「諸君らがよく覚えているように、私はこの者をここで杖撃ちにした。それで懲りたと見て、私はこの者を許した。しかし、昨日、こやつは大それたことを行った。もう許すことはない。裸にしろ」

慍の白い肌が顔わになる。悲痛の叫びを上げ、また泣いて詫げる。

「なぜやったのか、落ち着いて説明してみろ。それが筋の通ることなら、お狐さまにもお慈悲と言うものがあるやも知れぬ」

慍はうなだれる。

韋荘は上下に杖を振る。風が鳴り、慍のからだがびくつと動く。

「言わぬのなら、致し方あるまい」

慍は身を伏せ押し黙っている。

韋荘は杖を振り上げる。

「待ってくれ」

慍が叫ぶ。

韋荘は杖を静かに下ろす。

「言うのか」

もしも慍が有のままを告げたらどうするのか。韋荘の心はまだ定まってい  
ない。

韋慍はわなわなと身を震わせ、口を結んで、首を振る。

「言わぬのか」

慍は首を腕の中に入れて身を丸くする。

「では、撃つよりあるまい」

杖を構え、びしりと叩く。白い慍の背中に杖が当たる。九年前と同じである。

「うっ」

慍が呻く。これはまだごく軽く撃つただけだ。

韋荘はいま一度、前よりも力を込めて撃つ。慍は鈍く呻き、韋荘の腿に痛みが走る。傷口が割れたのだろう。

九年前には、ここで妻が叫んで韋荘の手を止めようとした。今朝その声はない。

韋荘はまた撃つ。慍の肌が破れ、血が噴き出す。かつて味わった快感を思い起こす。



韋莊の腿の裏が熱くなる。己の足からも血が溢れ出ているに違いない。

「言わぬのか」

韋莊は撃って撃って打ち据える。慍の血が四方に飛び散り、ぐったりとする。

蘭が韋莊の両肩を抑える。

「兄貴、これくらいだ」

杖を中空に止め、

「こやつが口から肝を吐き出すまで打ち据えてやる」

「それよりも前に、兄貴が参ってしまう」

蘭は、堅く握られている韋莊の指を一本ずつ杖から離し、その杖を手に取り、先を韋莊の足元に向ける。己の血が池をつくっている。

目の前がすつと暗くなる。地面にへたばる慍の姿が黒い汚物のように見える。

「これを捨てる。穢れたこやつの肝など、お狐さまは喜ぶものでない」

口中でそう言うと、韋荘はその場に崩れる。

## 翌日は祭。

昼を過ぎてから、韋荘は身を輿に乗せ、そろりそろりと、狐潭を臨む祠の前へと運ばれる。

早朝からの神事は薛未亡人によって執り行われた。一族の者が皆楽しみにしていた大盤振る舞いに、十分すぎるまでに腹をくちくし、道に倒れるまでに酒に飽き、莊園はどこも満ち足りた顔ばかりだ。人々が道を左右に分けて輿を迎え、ある者は祭の祝いを、ある者は傷の見舞いを言う。韋荘はにこやかに、

「大丈夫だ。心配いらぬ。うちには天下一の名医がいるのだから」

昨日の杖打ちで傷が大きく口を開いた。蘭が布で堅く縛って止血した。煎じてくれた薬を呑んで気を落ち着け、ほぼ一昼夜、眠り続けた。普通ならま

だ安靜にしておくべきなのだろうが、三年振りの祭とあっては、屋敷でじつとなどしていられない。

祠の前に、薛未亡人と藹が心配そうな顔で立って見ている。輿が止まり、屋敷から運ばれてきた榻がその前に据えられ、数人の男に支えられて身を移す。榻の上から祠を拝す。

「いかなるときにも神事をおろそかにせぬ立派な主振りです」

薛未亡人は褒め讃え、茶と菓子をお勧めする。皿に山盛りとなっているのは、蘭が都で仕入れた美しい菓子と、荘園で作ったいつもの棗入りの揚げ菓子である。それをつまみ、談笑することしばしの後、薛未亡人は屋敷に帰ると言って立ち上がる。

「お疲れでございます。朝早くから何もかもやっていたいただきまして」  
韋荘は拝謝する。

「礼を申さねばならぬのは私の方。このような立派なお祭ができるまでに荘園をしてくれたのは荘ちゃんの方。昨日の振る舞いといい、まこと立派にな

られました。御身は荘ちゃん一人のものではありません。我等が一族、三百人が御身一人にかかっています。くれぐれも大事になさい。どんなことがあってもお狐さまがお守りくださいます。それでも、気をつけるに越したことはありません。どうです、一緒に帰りますか」

「いま参ったばかりですし、この好天、少しばかり、皆が楽しむのを眺めていようと思います」

「喜びを共にするのは主の良き心得。夕風の立つまでは帰るのがよろしいでしょう。昼間はこのように暑いくらいであつても、やはり秋、急に涼しくなりましょう」

韋荘は自分の乗ってきた輿を薛未亡人に勧める。

「私も皆と楽しみを共にします。池のまわりを歩きつつ戻りましょう」

薛未亡人は女たちを引き連れていく。その周りに笑い声立つ。人を見れば怒鳴り散らしていたのは遠い昔のことである。

薛未亡人あつてのこの莊園だ。薛未亡人はあたかも一族全員の母親のよう

になった。一昨日の夜、薛未亡人に握られた手の感触がよみがえる。

しかし、その母親の愛は一族全員に向けられている訳ではない。不幸にもそれを受けられなかった一人が慍だ。九年前に慍を杖で撃つたのは薛未亡人を喜ばせるためではなかった。しかし、結果として、それによつて薛未亡人の信頼を克ち得たのは間違いない。己のために慍を踏みつけたようなことになった。その後味の悪さから、慍にはことさら手厚くしてやった。それなのにあれは切りかかってきた。

薛未亡人はなぜこうまで己を大切にしてくれているのか。二人の息子とは不仲であるのに、莊園の繁栄のために己が特に必要だからなのか。

かつて己は薛未亡人をねじけた性格の浅はかな女と見下していた。最初の旅から帰った後に、打算的に薛未亡人を利用しようとしたのは己の方であった。薛未亡人をほとんど騙して揚州の旅に出た。浅はかなのは己の方だろう。

薛未亡人の姿が遠くに消え、一行の笑いさざめく声も届いてこなくなると、蘭の所在を弟に尋ねる。

「先ほど、叔父上を送っていかれました」

「お祭にお見えになっていたのかい」

「お酒をたくさん召され、詩を吟じ、碁を打ち、楽しんでおられました」

「それはよかった」

「度を過ぎされたようで、叔母上が顔をしかめ、蘭くんを送っていくように言われました」

薛未亡人の顔が目浮かぶようだ。

「叔父上も慍のことは聞かれているのだろうか」

「この他、たくさんのお酒を召されていたのはそのせいなのでしょうか」

韋荘は嘆息する。

叔父の期待に己は背いてきた。薛未亡人よりも叔父を大切に思ってきたのに、どうしてなのか。

都の菓子を口にしても苦い味がするだけ。強いて狐潭の水のきらめきに目を向ける。お狐さまのお祭は、己が留守だったときも入れてこれで六回目。

人々はこの日に一年の労苦を忘れる。この賑わいこそが、貢奉を落ちてから為してきたことが虚しいものではないと言える証だ。己がいなければこのお祭はない。

小舟が進んでくる。いつもは楊爺が乗る舟を、今日は一人の少年が漕ぎ、一人の少女が座っている。少年は伍武の孫の伍七、少女は都からきた阿枉だ。

「祠の前を通過するときは、遠くからでも必ずきちんと拝むんだ」

伍七は舟の中で深く二回礼をする。阿枉がそれをまねる。

韋荘はその仕草に微笑む。伍七はそうしようと楊爺に教えられたのだらう。

阿枉が顔を上げる。荘園に初めてきた幼い少女だ。

「ほんの子どものようだ。あれで店の用に立っているのかな」

韋荘は横の弟に言う。

「姉上が大変気に入られていると、蘭くんが言っていました」

「それなら間違いないのだらう。確かに素直でかしこそうな顔をしている」

韋莊は、その少女を、どこかで前にも見たような気がふとして、かたわらの卓に飾られている花を指し、

「これを伍七に渡してやってくれないかい」

と、弟に言う。藹は舟を招き、花を渡された伍七はきよとした顔。

「それを阿枉の髪に挿すんだ」

韋莊が笑いながら言う。

伍七はびっくりし、それでも主人の命とあれば逆らえず、照れくさそうに、言われた通りにする。阿枉の顔が赤らむ。

「よく似合っているぞ」

韋莊がまた笑うと、伍七は頭をかき、それでも嬉しそうに阿枉の髪を見る。

「ゆっくり一周してこい。田舎の池も美しいところがあると、すみずみまで見せてくるんだぞ」

「へい」

伍七は声を弾ませ、ぎいぎいと漕ぎ出す。



「子どもはよいものだ」

韋莊は舟を見送る。

伍七よりはまだ幼い頃に、韋莊の父が死に、仲の良かった隣の李兄弟と別れて都を出た。母の監督のもと、貢挙のための勉強ばかりの日々となった。李兄弟には幼い妹がいた。妹とも遊んだかすかな記憶がある。あのまま隣同士で大きくなり、李兄弟も己も貢挙に合格していれば、あの妹と結婚と言う話も持ち上がったかも知れない。家柄も釣り合いがよい。もしもそうなっていたなら、まるで違う人生があつたはずだ。

李兄弟の妹のおぼろげに残る顔が、あるいは阿枉に似ているのか。そのように気もする。遠い昔のこと、そうではないような気もする。

別の顔が浮かんでくる。くりくりとした可愛らしい阿枉の目。それがよく似ている。桂兒にだ。揚州の嫋嫋のところのいた桂兒とそれがそっくりではないか。

韋莊の胸が痛む。

桂児はいまはどうしているのだろうか。己を恨んでいるに違いない。

伍七の漕ぐ小舟は、曲がりくねった池の奥へと姿を消していく。

取り返しをつかないことだ。嫋嫋を思い切るべく南山において非情の男になった。遠い桂児を思ってもどうにもならない。それでも胸が痛む。桂児はいつも笑っていた。あれはあれで不幸な娘だった。その不幸に、また一つの不幸を己は加えてしまった。

いまさら己を責めてもどうにもならない。

せめてできるのは、いまここにいる桂児に似る阿枉を思うことだ。あの幼さで奉公に出ているのだから、阿枉の身にも何かしら重く苦しい事情があるのだろう。あの二人がいま持っている舟の上の楽しさを守ってやりたい。嫋嫋を死なせ、桂児を不幸にした。だから、伍七と阿枉には、思う存分、この池で楽しませてやりたい。

これはお祭の日の特別な楽しさだ。それは今日だけだ。伍七と阿枉をこのまま池で遊ばせてやりたくても、それはできない。いまは永遠には続かない。

阿枉はすぐに都に帰り、伍七のここでの平穏な少年の日々は残りわずかだ。莊園を出て兵士になる日は遠くない。過酷な兵役に耐えて、幸いにも伍七が無事に莊園に帰ってきたときには、二人がかつて味わった小舟の楽しさは遠く離れた過去のものとなっていよう。伍七と阿枉がこれから別々に過ごす時間が二人を変え、元には戻れない。今日のお祭のときだけにしか、あの二人の楽しさはないのか。

「子どもはよいものだ」

韋荘は無理にまた同じようにつぶやき、無造作に都の菓子に手を伸ばし、口に入れ、いよいよそれを苦いと感じる。

「純はどうしている」

ぼそつと韋藹に尋ねる。己の娘や息子を、伍七と阿枉のように見やったことがあっただろうか。

「叔父上のところにいるようです」

「そうか」

おさまっていた傷の痛みがまた始まる。

彩霞はどうしているのか。それは弟には尋ねない。

己のしていることは矛盾だらけだ。麗らかな池の風光に反して、苦すぎる胸中の味だ。

けたたましい馬の響きとともに、楊爺が現れる。何事かと問うよりも、

「伍武が死んだようにございます。よりによって祭りのさなかに。お屋敷にお帰りいただけますか。蘭のお坊ちやまはどちらでしようか」

「蘭くんは叔父上を送っていったそうだ」

楊爺はすぐに若い者を山に走らせる。

「蘭のお坊ちやまなら、息を吹き返すわざをお持ちかも知れませんから」

楊爺は韋荘を榻から輿へと移す。

「で、伍武はどこなのかい」

「取りあえず、家に運ばれていきました」

「伍武は今日はどうしていたんだい」

「あのあたりで大酒を食らい、若い者に昔話を聞かせていました」

向かいの釣魚台を指差す。

「あれはお祭の酒を楽しみにしていた。それがたっぷり呑めたのなら、本望だろう」

「何もお祭の日に死ななくてもよいのに」

楊爺は舌打ちする。

「それもあいづらい。最後まで酒で迷惑をかけるとはな。伍七にも知らせてやらねばなるまい。せつかくの舟遊びだが」

韋荘は池の奥へと小者を走らせ、屋敷へと向かう。伍家の長老が死んだとあれば、それなりのことはしてやらないとならない。

輿は屈強の男たちにかつがれ、池の水を堰き止めている堤を越える。

「あそこに倒れていたのをごさいます。どうせいつものように酔い潰れているだけだろうと、若い者が見に下りると、息がすでに通っていないのです」

水路に下る斜面の草がそのあたりだけ押し倒されている。

「伍武は何歳だった」

「この爺よりは一つ下でございます」

「まだ六十になっていなかったのか。ずっと老けて見えた」

「自堕落な暮らしが長かったからでございましょう」

酔っ払ってばかりいたのが寿命を縮めたのか。それは伍武が自堕落だったからなのか。伍武を酒に向かわせる何かがあったのではないのか。

屋敷に戻ると、伍武の葬儀について薛末亡人と相談し、特別な銀を伍家に与えるを決める。

「何も怪我の身の荘ちゃんがわざわざいかずとも、藹ちゃんで十分でしょう」  
薛末亡人にそう言われても、韋荘には、気がすまないものがある。伍武は祖父と父の二代にわたる命の恩人だ。それを杖で撃ったのだ。伍武には借りが残ったようだ。

秋は夕暮れが早い。伍武の家に着いたときには、伍武の亡骸を囲んで伍家

の面々が座る屋内はただでも暗さに沈んでいる。

蘭がきている。

「いかに俺でも、冷たくなった者を生き返らせはしません」

韋荘は香を焚き、伍武の死に顔を見、伍家の人々に言葉をかける。

「伍武は我が韋家のかけがえのない恩人である」

伍武が二代にわたって韋家の当主の命を救ったこと、武勇に優れ、若い者に慕われたことを讃える。韋荘の言葉にひとつひとつうなずく伍伝の蔭で、伍七が泣いている。伍武がこのごろ最も可愛がっていた孫だ。

韋荘がひとわたり語ると、蘭が口を開く。

「伍武の爺さん、とうとう酒臭い状態で死んでしまいましたな。酒を呑む癖さえなければ、若き日に節度使の婿さまになって、いまごろは立派なお屋敷に住み、高位高官に昇った息子や孫に囲まれ、栄耀栄華を極めていたでありますように」

「そのような話があったのかい」

「兄貴は聞いていなかったですか。伍武の爺さんが節度使の娘をもらいそこなつた例の顛末を知らぬとあれば、爺さんの弔いに、俺が話をしますかな。爺さんほどにはうまくは語れないでしょうが」

それは、生まれたばかりの王女を助けたのと同工異曲の話。違うのは、節度使の十五六の娘だったこと。井戸の内に隠して、敵と切り合い、腿を槍で突かれながらもみごと娘を守り通す。その働きで、節度使はその麗しい娘を伍武にやろうとした。ところが、その娘が何が嫌いだと言って酒臭い息ほど嫌なものはない。それでいろいろな珍事が起こって縁談がだめになると言う笑い話。

子供達を大いにわかせた伍武の仕草を、蘭が大袈裟に真似すると、伍家の人々は笑いつつ泣き、泣きつつ笑う。

「閻魔大王も、きつと伍武の爺さんの酒臭さに辟易し、爺さん、この世に追いつ返されてくるかも知れませんか」

韋荘は蘭の話聞きつつ、伍武の死によって韋家の一つの時代がこれで終



わったと感じる。

伍武が若くして主家と唐朝のために西方で兵役についたところ、韋家は立派な屋敷を都に構えていた。家運はじわじわと傾きつつあったが、何事もまだおおらかで、いづれ誰かが立派な官人となればすぐに盛り返せると思われていた。だから平気で借金を積み上げていた。しかし、実態は火の車、次々に土地を手放し、虢州の莊園一つに縮こまってしまった。伍家と范家は、そのようになつた韋家に仕え続けた。主家のためにならないことをした不屈き者もいたが、先祖伝来の主従関係はなお強固に保たれた。それがあつたから年々のお祭を行えるまでに莊園は豊かさを取り戻せた。

この先もそれが続くのか。唐朝は傾きつつあり、反乱が繰り返されている。皇帝の権威が覆るようであれば、莊園における韋家の権威もこのままではあるまい。伍武が酔っ払ってばかりいたのは、伍家が韋家の下に服従せねばならない現実にかかしら理不尽さを感じていたからではないのか。韋家にとつて幸いだったのは、伍武が割り切れない思いの淵源を探らず、安易に酒に紛

らそうとしてくれたことだ。杖に撃たれて反発するどころか、最後は、主家に仕えることの大切さを孫に教え込んでくれた。代々そのようにして主家への忠が説かれることで韋家は続いてきた。これからはもうそうはいかなくなるだろう。

伍武は旧き良き時代の人間だ。唐朝の衰亡とともに韋家も滅びていくのか。お狐さまのお祭もあと何回できるのか。伍武に死ぬ前に酒を吞ませてやれたのが、せめてものことか。

蘭の話が終わり、外に出る。輿が寄せられ、上に乗る。門に篝火が焚かれ、その外側はすでに夜である。

闇にふっと白い影が動く。韋荘の近くへと音もなく寄ってくる。揺れる炎を反射して二つの瞳が光る。

韋荘の胸が一瞬高く鳴り、誰の瞳であるのかわかる。

「どうかしたのか」

瞳に向かって声をかける。

影は返事をするよりも前に、火の光の届くところへ入ってきて、赤く顔が照らし出される。娘の彩霞だ。

地面に膝をつき、大人のような太く畏まった声を発する。

「父上にお知らせする儀が一条。それをお願いする儀がやはり一条ございませす」

その声に気を押され、韋荘はにわかには返事ができない。

父を圧倒するこの娘は幾つになったのか。己が二十二のときの子であるから十六歳と勘定する。

ややあつて、

「ここで申し上げてよろしいでしょうか」

韋荘は体を引き締め、

「言うがよい」

娘はわずかに顔を上げる。

「お知らせとは、母上がいなくなりましたこと」

声はさらに低い。

韋荘は平静さを装い、

「いなくなったとは、どこへだ」

「それはお知らせする一条の内ではございません」

「いつのことだ」

「朝です」

「なぜ早くに知らせなかったのだ」

「それもお知らせする一条の内ではございません」

彩霞はあくまでも落ち着き払っている。

妻はどこにいったのか。追放された慍を追ったのか。そうに違いあるまい。

母ができるだけ遠くにいけるよう、彩霞は半日の間黙っていたのか。そうに

違いあるまい。

「わかった。おまえはなぜ母と一緒にいかなかったのだ」

それも答える内にはないと返事をするのか。彩霞は父を睨むようにして

言う。

「私は母とは違います」

その声も顔も妻に良く似ている。

「そうか。わかった。で、願いと何か」

彩霞は目を逸らす。

「一日も早く、この荘園より他家に嫁に出していただきたくお願い申し上げます」

「嫁にか」

「申した通りです」

この娘は何を考えてこのようなことを言うのか。己はこの娘をどう扱った  
らよいか。

背中を冷や汗が伝う。何を動揺しているのか。非情であると決めた己がこ  
こでどうしたことか。

妻は消えた。それでよいではないか。己と嫋嫋にはできなかつたことを慍

と妻は成し遂げたのか。それもよしとしよう。

娘はどこかに嫁ぎ、ここには居たくないと言っている。この莊園は自分のいる場所ではないと言っている。それはよいことなのか。仕方のないことなのか。

非情と決めた己には、妻もなく、子もなくて当然だ。

「わかった。叔母上とよく御相談しよう」

韋莊は押し殺したような声で言う。

彩霞は顔を上げる。

「ありがとうございます」

こわばった笑顔を、火の光で一瞬だけ見せ、彩霞はくるりと向き直る。

闇へと入っていかうとするのを、呼び戻そうかと韋莊は腕を伸ばしかけ、

それは非情な男にそぐわないと、そのままにする。

「待ちなさい」

後方で蘭が言う。彩霞の白い影が止まる。

韋莊は心の内に起こるものを抑え、

「放っておけ」

と、言う。

韋莊のその声に彩霞は走り、蘭は黙る。

輿が動き出す。彩霞が去ったのとは別の方角の闇の中へと韋莊の身が入る。首を垂れ、目を閉じる。傷の痛みがよみがえる。

こうなるのでよかったのか。あるいは全て間違っていたのか。目を開き、闇に探る。それは彩霞の去った跡か。

初めから間違っていたのか。初めからとはいつからか。

闇にふっと光が走る。伍武の魂か。お狐さまの火か。あるいは己を導くものか。

「これだったのか」

誰にも聞かれぬ声で言う。この一事か。

全てが間違っていたとしたら、初めに戻って、矛盾を解きほぐすしかない。

それができるとすればこれだ。

確かなのか。それしかないと思えても、いまは確信を持ってない。

闇に一瞬見えた光、それが、これしかないただ一つの事として間違いないものになって、それをするのが確実に可能になるまでは、考えないようにしよう。そうしないと、不意にきたものは、不意に去ってしまうだろう。

時がくるまで、人には言わず、己にも言わない。それまで非情の男を貫く。

そう決意すると、韋荘の耳に、蘭の足音が聞こえてくる。

この従弟にだけは言いたい気がする。それも止めておこう。これはこの闇の中の一人だけの秘密なのである。

る。  
**韋**荘の妻が莊園から姿を消した年の暮れ、妻の弟が人目を忍んでやってくる。

「姉の身に何かありましたでしょうか」



言いくそうに尋ねる。

薛未亡人は人を遠ざけ、駆け落ちした顛末を語る。

弟はひどく恥じ入り、

「不貞の姉は、もはや我が孫家の者ではありません。もし逃げてきましても、門の内には入れません。道で死のうが、縄目にかかるうが、私どもには関わりありません」

「韋家としても離縁とし、あの女は両家とも関わりなき者と致しましょう。お互いに恥となるこの件はどうぞ御内密に」

薛未亡人は弟にいくばくかの絹を持たせて帰す。

その翌年の咸通十四（八七三）年三月、厳かな行列が長安郊外の法門寺より発つ。宮城までの三百余里にわたって兵仗が並び、その間を、荘重な音楽を奏でつつ進む。都門の外で大群集に迎えられる。この日のために、富家が建てた楼が幾つも高さを競い合う。楼上は見物の貴顕でいっぱいである。門から中へ大街へと入れば、いよいよ鈴なりの人だかり。その喧騒に音楽は掻き

消され、人々は目の前にきた行列の中央の車を拝む。車の中には、いつの世かに遠く天竺より渡ってきた仏骨がある。

同昌公主を失った後、皇帝は深く仏教に帰依し、それが昂じて、宮中に大寺院を造り、仏骨を迎え入れるに至った。行列が宮中に到着すると、皇帝は随喜の涙を流す。この一事に巨万の富が費やされ、法門寺には宰相以下が寄進した金帛が山と積まれる。

奢侈品を手広く扱う蘭の店にかなりの利が転がり込む。同昌公主には二度も儲けさせてもらったことになる。

仏骨が宮中におさまり、その靈験もあらたかに世が鎮まれば目出度しであるのだが、それよりわずか三ヶ月で皇帝は病死し、十二歳の息子が後を継ぐ。

僖宗（ききそう） 皇帝である。

皇帝が代われれば宮中は一変する。同昌公主の婿の韋保衡はすぐに失脚、南方に流され、次いで自尽を命じられる。同昌公主を悼む曲を作った楽工の李可及も配流の身、仏骨には法門寺にお引き取りいただく。宮仕えの人々はす

ばやく身を翻し、新しい朝廷でいかにして良い位置におさまるか目の色を変え。都の商人は新たな金蔓を求めて走り回る。韋蘭は張直方（ちよう ちよく ほう）に誼を通じる。

張直方の父は節度使として権勢を振るった。父が死に、若い張直方が継いだ。だが、苦勞知らずの息子は、旧くから父に仕えてきた部下を顎先で使い、その未熟な人格が猛烈な反発を招いた。下を抑えられず、都へ出奔。中央では、先代の恩を思う人の引き上げで、順調に出世し、近衛兵を指揮する金吾大將軍の地位にまでやすやすと昇った。人を人とも思わぬ振る舞いは、幾度となく揉め事を起こし、ついには抜き差しならぬ事情によつて、洛陽に送られての蟄居同然の身の上となった。それで大人しくなるような張直方ではなく、土地の暴れん坊を屋敷に集めて連日の酒盛り、興が湧けば一回を従えて大親分気取りで狩猟に繰り出す。悪党どもは誰の土地だろうが構わず馬を走らせ、官道だろうが田畑だろうが、勝手に網を張つて獲物を追う。獲ればそこで酒盛り。近郷近在の迷惑はこの上ない。鳥獣も、張直方の一団が門を出るや、

互いに鳴き交わして遠くへ逃げるまでになった。

張直方は、浪々のみをかこつ者が助けを求めてくれば、広い屋敷に自由に住まわせ、遊ばせてやる。世の不满分子には大変に人気がある。蘭も何かの縁で張直方に面識を得て、獺の伴をした。

皇帝が代わり張直方は晴れて都の大將軍に返り咲く。都周辺の土豪連中は評判を聞いて、その膝元に集まる。長安の商人も頼りがいがあると、寄らば大樹の陰と決め、武大人もその一人となり、蘭もかねての顔見知りとあれば、自ずとその人脈の末端に連なる。

虢州知事の劉瞻も中央へ復帰となる。清廉潔白で名高い劉瞻が再び宰相に戻れば、朝廷は心機一転、かつての威信も取り戻せるのではないかと、人々は期待する。

長安の民衆は派手好きである。仏骨を迎えたときもそうであったが、何か事があるときには、いかなる散財も惜しまない。劉瞻が都に入る日、町の人々は互いに銭を出し合い、百戯の芸人を雇っての盛大な催しものを計画する。

劉瞻は、それ耳にし、嬉しいやら困惑するやら、騒ぎが大きくなりすぎるのを恐れ、その当日は都に入らずに、後日、こっそり皇城に入る。

劉瞻は都に帰ってものの三ヶ月もしないうちに死ぬ。塩鉄院において宰相に歓待され、帰宅した途端に病に倒れ、それっきりとなった。町では、宰相が劉瞻の復位を嫌って毒殺したと噂される。

十二歳の新皇帝は、父親が死んで己が皇帝になると言われたとき、宮中に入ったらどんな遊びができるのかと真つ先に尋ねた。宦官の田令孜（でんれいし）が、あれもできるこれもできると聞かせると大喜び。宮中に乗り込むや、父親の葬儀などどうでもよく、早速、遊びまくる。

田令孜は、新皇帝が生まれてすぐのころから近くに仕えてきた馬の飼育係。皇帝は田令孜を「阿父」（あふ）と呼ぶ。「お父ちゃん」ということだ。政治向ききことはこの「お父ちゃん」任せだ。「お父ちゃん」は子に優しく、皇帝が一瞬たりとも退屈しないよう遊び漬けにしてやる。費用は皇帝の印である玉璽を押しまくればいくらでも出てくる。宮中の倉から何でもかんでも引つ張

り出し、皇帝のお気に入りの子歌児連中に配る。倉が空になると、良い知恵があるとはかりに、官位の大売り出しをする。大金を出せば高い地位に昇れる。それで国庫の不足が補われる。批判がましいことを口にすれば、皇帝に名によって即座に死を与える。

こうなれば、新たな反乱が勃発しなすむはずがない。乾符元（八七四）年の終わり、新皇帝の即位から一年余りのとき、濮州の人、王仙之（おうせんじ）が立ち上がる。王仙之は塩商人から盗賊になった男。塩は国家の専売品。税率は非常に高く、元値の何倍もする官塩を民衆は買わされる。官塩より安い値の私塩を売る闇商人が後を絶たない。見つければ死罪だが、儲けは莫大である。王仙之は闇の塩で得た錢をばらまいて人を集め、義によって唐を撃つと高らかに宣言する。数千人の仲間がすぐに集い、濮州を手に入れ、隣の曹州も攻め落とし、数万の勢力へと発展する。

王仙之の動きに呼応する者が出て、反乱の連鎖は止められない。中でも一大勢力になるのが、冤句の人、黄巢（こうそう）の一団である。黄巢もまた私

塩商人。家が富裕であったことから若いときは勉学に励み、貢挙にも応じた。及第を果たせず、鬱勃とした思いで郷里に時を過ごし、いつか、王仙之の義拳を聞き、これぞ好機到来と、肉親八人とともに旗揚げをする。唐を討つと叫んで練り歩くと、その声を聞いて集まりくる者数をも知れず、一日にして何千の荒くれ者の大集団となる。

黄河の南側より長江の北に至る地域は瞬く間に大混乱に陥る。王仙之と黄巢は、居所を定めず、群集を率いて次々と攻撃目標を変える。官軍はその動きについていけず、賊の勢いは増すばかり。旗揚げから一年余り、王仙之は東都洛陽を目指して大攻勢をかけるに至る。

蘭が長安から洛陽に急行する。店の者を莊園に避難させる。万一洛陽が落ちれば虢州も安閑としてはいられない。一族全員が長安に逃げ込む事態も想定する。韋莊は、叔父の隠居所の近くの地下に石室を造り、いざというときには大事なものをそこに隠すことにする。薛未亡人は、莊園守護の祈願をお狐さまの祠で十四日間連続して行う。莊園は緊迫した空気に包まれる。まさ

にお狐さまの靈験であろうか、官軍は洛陽の手前で賊の撃退に成功し、王仙之は南に遁走する。官軍は賊に占拠されていた町を順次取り戻し、朝廷はひとまず安堵する。

蘭は洛陽に入って店を再開する。店は留守の間はかなり荒らされていた。

「店の事情を知る者の仕業でしような。目に付くところの物は案外そのまま、一番見つけにくいところに隠しておいた高価な品が盗まれていましたからな」

長安に戻る途中で莊園に寄った蘭がそのように言う。

「誰か心当たりでもあるのかい」

「詮索したところで、品物は戻りませんからな」

名を挙げようとはしないが、あの泣き虫の愠が一枚噛んでいるのではないかと韋莊は推測する。

落ち着きを得たこの機会にと、韋莊は娘の彩霞を嫁に出す。彩霞自身がそれを希望してから四年が経っていた。



嫁ぎ先は薛未亡人が決めた。さほど遠からぬ町の裴(はい)家の息子だ。薛未亡人も羨や藹の嫁選びほどには熱心でなく、先方が旧家の例にもれず経済的に苦しく、何よりも韋家からの持参金をあてにしているとの様子に、

「それなら我が家の手前、彩霞を大事にしてくれるだろう。あれは変わった娘だから、そういうところでないことやれないし、落ち着かないだろう」

彩霞はこの縁談に何も言わず、父親に型通りの挨拶だけして莊園を出ていく。

娘がいなくなつてしばらくの間は、韋莊にも苦い思いが残るが、それもじきに薄れ、日々の楽しみは、藹の子どもたちである。反乱が始まる前に生まれた長男の綜(そう)と、その翌年に生まれた長女の淑娥(しゅくが)の二人だ。弟の子は妙に可愛い。

韋莊自身の息子である純は、母親が出奔して以来、叔父の韜の隠居所で暮らしている。姿だけは時折見かける。薛未亡人が実篤な老先生を招き、東の屋敷で、孫息子たちに勉強を習わせていて、そこに純もくる。薛未亡人の話

では、「純ちゃんが一番。荘ちゃんとの子と、うちのぼんくら息子どもの子は断然違う」とのことだ。

そうこうするうちに、執事の范実が、父親の病氣見舞いのために荘園を留守にする。范実の父は、荘園の金をくすねて韋荘に杖打ちの刑を食らった前の執事である。田舎に引込んだ父の不行跡を恥じる范実はほとんど音信不通としていたが、死ぬ前にどうしても息子に会いたいと言ってきたので、見舞の品を持たせて韋荘は范実を送り出す。

四ヶ月ほどして、范実が父親の葬儀を済ませて帰ってくる。父親がいまはの際に言った詫びの言葉を韋荘に伝える。病に倒れ、これも主家に仇を為した報いであると、悔恨の日々を送っていたと言う。

その上で、范実が驚くべきことを言う。荘園を追放された愠が、范実の父親のところに出していた。二年ほど前のことだ。愠は非常にみすぼらしいなりに、顔つきも以前とまるで違っていた。韋家への恨みつらみを並べ、一緒に杖で打たれた仲間として、手を貸してくれないかと頼んだ。范実の父

は、自分には何の遺恨はなく、「お坊ちやまもどうぞ正しい道をお歩きください。貢奉を受けるお助けなら、この屋敷を売ってなりとも、どうでもいたしましよほどに」と言った。慍はまことに意外な面持ちで、よからぬ企み事が頭を離れない様子だった。范実の父は小金を渡して慍を帰し、その際に韋莊の妻について尋ねた。慍はまともな返事をしなかった。

范実の報告を聞き、

「このことは誰にも言ってはならぬ。とくに純にはだ」

韋莊は堅く口止めする。

妻はどうなったのか。慍を追って出ていったのに、その慍に捨てられたのか。

韋莊の心に妻を哀れと思う気持ちが始めて生まれる。この莊園に嫁いでこなければ、別の生き方があったであろう。

そう思うと、あのお祭の夜の思いがよみがえる。間違いをただすために考えた一つのことがあった。それを為す時はまだ至っていない。その前にすま

せておかねばならぬことがある。いたずらに時を延ばすのでは決してない。我が一大事である。

例えば、叔父の韜に對してだ。叔父の心には背くことばかりしてきた。本當は、誰よりも叔父と相通じるものがあるに違いないと思っているのだが、叔父の時代の莊園には戻せない。ならば、叔父に何ができるのか。江南への旅を贈りたい。叔父は何よりも先祖の韋応物の詩を愛し、応物が知事を勤めた蘇州の土地を踏んでみたいと願っている。南の地でも戦乱がおさまったならば、蘭に頼んで叔父を蘇州に連れていってもらおう。そうすれば、己の決意を明らかにできる時もあるだろう。

乾符五（八七八）年の春、洛陽攻略に失敗して南方に転戦していた王仙之が敗死する。足掛け四年に及ぶ反乱も鎮まるだろうかと韋莊は期待する。しかし、王仙之に代わって黄巢が賊の首領におさまり、返って勢いづいてしまう。黄巢は徹底した流動作戦を取り、町を攻略しても居座らず、取れるものを取ってしまうと次の標的へとすぐに移る。官軍は翻弄され、賊は好きに各地を

荒らしまくる。これでは旅はまだもって先の話である。

朝廷は反乱に対しておざなりな対応しかしない。皇帝の「お父ちゃん」の田令孜は、出鱈目のし放題。宰相は居ても名ばかり、何ら実権を持たない。皇帝のお膝元で万一民衆が反乱を起こしてもしたら困ると、宰相連中は貧者に迎合した人気取りに懸命に努める。宮中の出入りの際に、宰相は大袋を背負った者を後ろに従わせる。中は銭でいっぱいだ。貧者が集まってくると、袋をあけて銭をばらまく。朝廷になお残るまともな人たちが、「盗賊のために民が安眠できずにいる状況を正そうとせずに、こんなことで恵みを垂れていると勘違いする。何の意味があるのか」と批判しても、何も変わらない。

弟の莠はそんな都で、貧者たちに利息なしで銭を貸している。そのやり方は当然のことながら高利貸し連中に嫌われ、時には店が襲われもする。蘭が豪傑の張直方に近づいてからは、そうした面倒なことは表立って起こらなくなる。張直方の威名は大したものだ。それはよかったのだが、宰相が銭をばらまき出すと、莠のところは銭を借りにくる者がぐっと減った。それがよい

のか悪いのかはわからない。

そのようなある日、娘の彩霞が嫁いだ裴家から一人の男がやってくる。薛未亡人に時節の挨拶として、古くから家に伝わるという器を贈る。さほど価値はなさそうだが、盛唐期の華やかな色彩の品である。

男は彩霞の婿の伯父に当たり、彩霞はよい嫁である、盛んに言葉を飾る。上辺は丁寧だが、どこか下卑た挙動に薛未亡人は不興顔である。

伯父は彩霞の母の様子を尋ねる。

「嫁御殿が、いつもいつも心配されてましてな。わしがよく聞いてきてやろうと約束して参ったので」

と、愛想笑いしつつ、薛未亡人や韋荘の顔を不躑躅な目でじろじろと見る。

裴家には韋荘の妻のことを一切伝えていない。病気ということにしてある。出奔の事実を明らかにすれば、縁談はまとまらなかつたろう。

「可愛そうに、あれは、今日も薬を飲んで、臥せております」

薛未亡人はありもしない病状を説明する。彩霞が母のことを案じるなどと

ありもしないことを言ったのだから、釣り合いがとれている。

韋荘は黙っている。下手に口をはさむと、薛未亡人の話と合わなくなる。

伯父は見舞いの言葉を連ね、ひひひと奇妙に笑う。薛未亡人はうんざりした顔で、しかし、伯父を御馳走攻めにし、金品を持たせて帰す。

「どこかから、何か聞いたのだろう。ああやって、あの家からは、また金をせびりにくることだろうよ」

伯父が莊園を去ると、薛未亡人は不愉快千万という声を出す。

韋荘は苦いものを感じる。

娘が希望したことではあったのだが、よりによって、あんな嫌な目付きをした伯父のいる家にかせてしまった。娘を捨ててしまったようなものだ。

娘にすまないと思う気持ちが生まれる。

間違っていたと感じたあのお祭の夜に、ただちに誤りを正そうとしていれば、このようなことにはならなかった。それができないからこうなった。

韋荘は己に反問し、いつか必ず間違いを正すときがくるだろうからと、淡

い期待にかけ、なお変らぬ日々を過こしていく。

黄巢は朝廷の無策に乗じ、王仙之の夢を果たすべく、再び洛陽に矛先を向ける。洛陽から人々が逃げ出す。蘭は洛陽に乗り込む。自ら店に陣取って状況を見定め、今度は逃げるに及ばないと判断する。その見通しが当たる。さすがに官軍は面目にかけて洛陽を守り抜き、黄巢軍は大敗を喫する。

黄巢軍は総崩れとり、南へ南へとひたすら逃げ、長江を渡り、追われ追われて遙か彼方の建州にまで逃げ込む。そこまで追い払えば、さしもの黄巢もじきに息の根を止められるに違いないと、都の人々は、長く覆っていた暗雲が一気に晴れ上がったような気分になる。

乾符五（八七八）年秋、莊園ではお狐さまのお祭を行う。戦乱の影響で、こしばらくはごく小規模なものしかできなかつたが、久しぶりに元通りの賑やかなものにする。長安と洛陽を行き来して忙しかった蘭が、人々への配り物を都で買って帰ってくる。

韋莊は蘭を連れて叔父の隠居所を訪ね、南方への旅を叔父に勧め、蘭に同



行してほしいと頼む。二人にとって突然の話であったが、蘭はすぐに韋荘の思いを察し、

「親父どものも、死んでから見るよりは、その前に蘇州を見ておいた方が良いでしょうな。それにこの可愛い息子と旅を共にするのも、さほど悪くないのではありませんかな」

叔父は、この年齢で長旅はと尻込みするが、息子がさも楽しげに旅を誘うので、だんだんとその気になっていく。

お祭が終わると、蘭は一度長安に戻って留守になる間の始末をつけ、虢州に再びきて用意万端整えば、叔父は言われるまま、すぐに出発となる。伍家から屈強な男一人を選んで供人とする。叔父は年齢を気にしていたが、毎日山野を跋渉しているだけあって実際には足腰はすこぶる達者である。

韋荘は、叔父が帰ってきたときに、いよいよその時がくるだろうと考える。己の人生をやり直すのだ。

**翌**乾符六（八七九）年九月九日。

韋莊は、従弟の蘭、楊爺とともに南山への坂を登りつつある。

重陽の節句。高きに登って四方を見晴らし、菊の酒を酌み交わし、色づいた茱萸の実を髪に挿して悪気を祓う。

今年の重陽を、旅から帰ったばかりの叔父の韜とともに、莊園で最も高い南山において祝う。叔父は別の道から藺とともに隠居所から山頂に向かいつつあり、山頂では楊爺の甥の楊胆が宴の準備を進めている。

楊胆はこの春に莊園に戻った。陝州の豪農に婿入りし、役人に楯突く事件を起こし、しばらく韋莊の莊園に身を隠していた胆は、ほとぼりが冷めるのを見計らって、婿入り先に帰った。楊胆の義父はほっとしてこれまでの心労が一度に噴き出たのか、床に伏せ、かつて都の色町にわざわざ遊びにいくほどの精力家もみるみる衰えた。それと同時に、楊胆と義母との間に面倒が生じた。義母は、色好みの義父が娶った若い後妻である。先妻の娘である楊胆

の妻と齡がさほど変わらない。義母は寝た切りになった夫の看病のためにと甥を呼び寄せた。やけに男前の甥で、かいがいしく病人の世話をし、義父はすぐに信用した。楊胆は何かと理由を設けられて義父から遠ざけられ、実の娘さえ病床を見舞うのが難しくなった。義母は病人の脇で、この甥がもしも家の後継ぎだったらどれほど安心かと、さめざめと泣いた。夫が訳を尋ねると、楊胆が恥知らずにもいやらしい目付きで自分のことを見たり、家の財産を調べて何やら思案したりしていると、訴えた。義父はすぐには信じなかったが、義母は「あれの根性が腐っているのは、見舞いにもこないことでわかりましょう」と怒ってみせた。義父は楊胆を疑い始め、跡継ぎのことをしかと定めぬまま他界した。

義母と甥はかつての事件を蒸し返して、楊胆を縄目にかけて家から追い出そうとした。楊胆は困り果てて伯父の楊爺に救いを求めた。韋莊は、かねてから楊胆を欲しがっていたから、義母にそれなりの銀を渡して、今後一切関わりなしとの念書を書かせ、楊胆夫妻を莊園に引き取った。狐潭の楊爺の小

屋を少しばかり拡張して三人が住むようになった。

楊爺は六十も半ばになってから一緒に暮らす家族を得、己の後継ぎができて安心したのか、急に年寄りっぽくなった。一途さが昂じ、同じことをくどくどと言う。楊爺が心を砕く最大の関心事は、甥夫婦ではなく、依然として韋莊、莠、藹の三兄弟と蘭のお坊ちやまがたである。楊爺は韋家にきてからずっとお坊ちやまがた、とくに韋莊が立派になるのを願って、身を捨てて仕えてきた。老境に至ってその思いはますます強まり、蘭が韜と旅に出ている間は始終、二人の身を案じ、都で何かあると莠は大丈夫かと心配し、莊園では常に、韋莊、藹に少しでも変わったところがないかと気を遣う。お坊ちやまがたに少しでも気にかかるとが生じると、何でもかんでもお狐さまにお祈りする。楊爺の狐信仰は度を超え、南山への坂を上る途中のいまも、道の脇にある古い祠の前で足を止めたまま、念には念を入れて長々と拝んでいる。ぶつぶつと何やら唱え、韋莊と蘭が痺れを切らしても一向に止める気配がない。楊爺がすることだから二人とも付き合うしかない。

ここの祠は、池の畔に新しく立派な祠ができてからしばらく間は草木に埋もれたままになっていた。楊爺も気にせず放っていたのだが、賊が一回目に洛陽に迫ったときに、狐潭の祠で薛未亡人が毎日祈り、楊爺はそれだけは十分でない気がして、旧い祠を修繕しそこでも毎日祈った。そのかいがあつて韋家には何事もなかったのだと楊爺は堅く信じ、以来、旧い祠にも日を決めて供え物をしている。

祠の前での一連の長い手順を終えると、

「蘭坊ちやまに申し上げたきことがございまして」

と、楊爺は振り返る。

「俺にか」

楊爺の真剣な様子に蘭は顎鬚をしごく。旅の間に蓄えた鬚は長く立派になっている。

「長年お仕えして参りましたこの爺の顔に免じ、いらぬお世話とおっしゃらず、こればかりは聞いていただきとうございます」

「やけに大袈裟だな。何でも言ってくれ」

「申し上げたきは一つのお願いにございます。この爺めは心配でならないのでございます。爺を助けると思つて、お聞きいただきましたのでございます。他でもありません、今度、都にお帰りになりましたなら、どうぞ、張直方さまをあてになさるのは大概になされていただきたいのでございます」

蘭はひゅうと口を鳴らし、

「これは思いがけないことを言う。それはまたいったいなぜなんだい。張直方さまには何かと世話になり、莠くんも助けられているのだが」

「それはよく存じているのでございます。それでもぜひお願いしたいのでございます」

楊爺はくどくどと繰り返す。

「筋の通った話なら聞こうではないか。いくら爺の願いでも、訳がわからなくては諾とは言えないな」

「では、申し上げます。それは壬辰の年の冬にあったのでございます」

「しばらく前だな」

「左様でございます。張直方さまがまだ洛陽にいらしたときのことでございます。張直方さまのお屋敷に居候をしております王知古と申す者が、ある雪の日、洛陽郊外に遊びに出て、それが、馬を走らせ裸同然の姿で帰つてきまして、狐に騙され、身ぐるみすつかり剥がされると、張直方さまに訴えたのでございます。大方は、博打で取られたか、女に騙し取られたに違いないのでございますが、張直方さまは大いに怒りまして、もとより無類の狩り好きでございますから、王知古に美々しい狩衣を着せて先頭に立たせ、屋敷中の者を引き連れ、仇討ちと称して狐狩りに繰り出したのでございます。あちらこちらに網を張り、狐や兔の塚のあるところを囲み、獯猛な犬を何十匹となく囲みの内側に突入させたのでございます。犬の吠え声があたり一面にこだまし、穴から追い出された狐は百頭を超え、張直方さまはそれを手当たり次第に捕らえまして、悪いことをしたお仕置きだと、まあ酷いことに、生きたまま皮を剥いでしまったのでございます。爺はこの恐ろしい話を聞きまし

て、これは許されることではなく、きつといつしか恐ろしい報いを受けるに違いないと思っておるのでございます。いまは金吾衛大將軍として肩で風を切っておられますが、ろくな死に方はなされないに違いありません。蘭坊ちやま、その巻き添えになりませんよう、どうか御注意いただきたいのでございます。爺は気が気でなりません。どうぞ、この爺めを安心させていただけますのでございます。これからはもう張直方さまにはお近づきになりませぬよう、お願いするのでございます」

楊爺はべったり地面に額を擦り付けて、何度も何度もその願いを言う。

お狐さまの信仰に凝り固まった楊爺の珍妙な願いに蘭はどうするのかと、韋荘は脇で眺めていると、蘭は仕方ないと言う顔を従弟に見せ、

「わかった、わかった、おまえの願いの通りにしよう。世の変転は予測がつかず、寄らば大樹の蔭と、寄った樹があっけなく倒れることもあるからな。風任せの俺が、世間の風を避けようと、樹の蔭に隠れてはいかん。いますぐと言うのは難しいが、潮時を見て、張直方さまからは離れるとしよ



う」

楊爺は喜びに満ちた顔を上げ、

「さすがお坊ちやまでございます。爺は嬉しゅうございます。ぜひそうなさつてくださいませ。人はあてになりません。お狐さまにお願いするのが一番でございます。お狐さまに酷い仕打ちをしてまともに死ねるはずがございません。お狐さまのお守りがありましたからこそ、お二人はこうも御立派になられたのでございます」

莊園がお狐さまにいかを守られてきたかを楊爺は諄々と説き出す。

「わかった、わかった、そうなのだろうな。俺と親父殿が旅から帰ってこられたのもやはりお狐さまのお蔭なんだろう」

「もちろんでございますとも。この爺めは毎日欠かさずお願いしておったのでございます」

楊爺はもう一度、祠を拝す。蘭は困ったという顔をするが、楊爺の思う通りにさせるしかない。韋莊は、楊爺の背を見つつ、長年にわたって仕えてき

てくれている楊金に、己は何か酬いるものがあつたのだろうかと考える。

楊爺の気がおさまると、三人はようやくその場を離れ、坂をゆつたりと上る。

三人が山頂に到着したのは、まるでそれを見ていたかのように、向かいより、叔父と弟が現れるのと同時となる。槐の下に、四つの座が設けられ、宴席が整え終わっている。

韋荘は、楊爺と楊胆には山から下りてもらおう。叔父の韜と従弟の蘭と弟の藹の三人に、今日はここで、己の決意を告げるつもりでいる。いずれは楊爺にも聞いてもらいたいことではあるのだが、まずは三人に告げ、己の決意が揺るぎないものであることを己の内で確かめねばならない。楊爺にいたずらに心配をかけさせる訳にはいかない。

韜が南向きに座し、菊の花を浮かべた盃を青空に向かって挙げる。

「今年の重陽を南山で迎えるとは、思つてもいないことだった。夏の初めに広州で死んでいて何の不思議もなかった。ここで菊の酒を呑めるとは実に不

思議である」

叔父は盃に口をつけ、韋荘に回す。

「幸いと四人がここに揃いました。叔父上が蘇州にいかれ、それより南にお出になることがあっても、せいぜいのところ杭州止まりと思っております。よもや南も南の広州とは、驚かされました」

韋荘は酒を呑み、盃を蘭に渡す。

「もしも俺と親父どのが広州でどうにかなっておれば、すでに鬼と変じて、何千里の道のりもほんのひとまたぎ、やっぱり兄貴とここでまみえておりましたよ。この宴はどうころんでもできたでしょうが、鬼となった身に酒が旨いとは限りませんからな、面倒でも二本の足を使ってここまで登ってきて、こうして呑めるのはやはり幸いと思うべきなのでしょうな」

蘭は酒を呑み、最後に藺に渡す。藺は真面目で、

「死ぬとか鬼とか、重陽の節句にはいささかふさわしくありません。叔父上の長寿を純粹に言祝ぎたいと思います」

盃を上げ、頌詩を唱え、酒を呑み干す。

盃は叔父の手に戻り、蘭が酒を注ぐと、

「広州を出るのがあと一步遅れていれば、この酒に会うことはなかった。こやつ運の強さによるものだ。こやつがいなければ、広州のどこかに虚しくいまも屍をさらしておらねばならないのだろう」

韜は呑まずにそのまま盃を蘭に渡す。

「その御心配は御無用でしょうな。俺がいくら親不孝の息子だとしても、さすがに、父親の屍を野にさらしたままでは帰ってきませんからな。土を薄くかけるくらいの手間なら惜しまずに、手向けの酒も二三滴ばかりなら垂らして進ませましょう」

蘭は盃の酒をあらかじめ呑み、地面にはたりと雫を垂らして合掌してみせる。

「見たか、たいした孝行息子をわしは持ったものだ。だいたいどうして父親が殺されても、己一人は無事でいると決め込んでいるのか」

叔父は笑う。

「はるばる広州までいかれたのは、蘭くんが無理やり引つ張りまわしたからなのでしよう」

韋荘がやや非難がましい口調で言う。

「いや、こやつのせいではない。わしがどうしてもいきたがったのだ」

叔父は息子の弁護を始める。蘭はにやにやしなからそれを聞いている。

「しかし、そうではあっても、蘭くんは危ない橋を渡ったものです。どうだったのだ、まさに危機一髪だったのだらう」

「見通しが甘かったのですな。さすがに俺もそれは反省しておりますな。耳にしたところでは大丈夫と踏んだのですが、もっと慎重であるべきでした」

「賊の動きが予想外に速かったのだ。こやつはせいではない」

叔父はまた息子の肩を持って当時の状況を説明する。

この親子はどのような具合に旅を過ごしてきたのか。かつての韋荘の旅も蘭がいたからこそ楽しいものであった。

「あれほど叔父上のことを頼んでおいたのに無茶をしおって、罰としてもう

一杯呑むが良い」

蘭が手にする盃に酒をなみなみと注ぎ入れる。

「この罰なら有難くいくらでも受けましようが、親父どのはこうして恙なく帰っておるのですから、そもそも罰には当たらないはずですけどな」

蘭は酒をしばらく眺めて、仕方ないと言う顔をつくって、一気におおる。

「少なくともこの私を心配させた罰がある。春に届いた手紙には驚かされた。杭州で書いて寄こしたあれだ。婺州（ふしゅう）で貫休どのに会われたと言うのも驚きであったが、広州に向かうつもりと書いてあったのには本当に度肝を抜かされた。どうしてそんな遠くにいくのか、不可解千万。その後はそなたから何ら便りがなく、一方で、黄巢の賊軍が広州になだれ込んだと聞こえ、気が気でなかった。一杯や二杯の罰では到底足りない」

韋莊がまた酒を注ぐと、叔父はなおも息子をかばうように、

「広州はわしが願ったのだ。異国の船が出入りするあの町を一度は見えておきたかった。眩く輝く幻の町だ。あそこを見られたのは、この旅の何よりの収

穫。あのときに見ておかなかつたら、いまや本当に幻となつてしまったあの町は、永久に見られない」

叔父は遠く目を細める。

叔父と蘭の旅は、韋応物が知事を勤めた蘇州を訪ねた後、江南の諸都市を巡っていき、貫休が生まれ故郷に在るとの噂を耳にして、婺州の開元寺を訪ねた。貫休は十六羅漢図を描いてから世間にも名を知られ、戦乱を避けて田舎に帰り、仏と画の二つの道を追い続けていた。手を失った孫何も出家して貫休に従った。蘭は、画名は高まりつつあつても絵筆さえ十分に備わつていない暮らしをしているのを見て、開元寺境内に小さな草堂を建てて寄進した。その婺州から杭州にいき、折角ここまでできたのだからいつそ広州に渡つてみるかと、便船を得て海路、広州に入った。

広州は南方貿易の拠点。長安、洛陽、揚州、成都に次ぐ第五の都市である。南の国々の産物が街に溢れ、他の都会にはない独特の雰囲気が漂う。叔父と蘭が広州に入ったのは四月。強烈な日の光が、白色の広州の街並みをいやが

上にも眩しく輝かせていた。

「あの美しい街並もいまではどれだけ残っておりますかな」

「わしらは、あたかも夢の最後を見てきたようだ。夢とは大唐の繁栄。広州の夢はすでに終わり、あそこを出るのが一日か二日でも遅れていたならば、わしも夢とともに消えてしまっていたのだろう」

「それにしてもよくぞ御無事で」

藹が言うと、

「そうそう、この酒は藹くんの手伝っていたくださすかな」

藹は酒で満たされている盃を前に置き、それを藹が手に取って眺めている間に、赤い実のついた茱萸の小枝を父親の髪に挿し込む。重陽の日にはこれを魔除けとして長寿を願うのが習慣である。

「これ以上の長寿を望まぬわしには無用のものである」

叔父はすぐに引き抜いて、ゆつくり立ち、実を一瞥し、

「この派手な色はわしには似合わぬ」



と、つぶやき、槐の枝にそれを掛け、

「この木の千年の寿命を祈るとしよう」

槐を見上げて、再び座につく。蘭は藹の前の盃を父親に回して、槐の枝から茱萸を取り、

「親父どのには嫌でもまだまだ長生きしていただきませんとな。俺も、これではまだ二十四孝に仲間入りする手柄を立てていませんからな」

父親の髪にもう一度挿す。韜はまたすぐに引き抜き、

「冬に筍でも掘って食わせるつもりだろうが、わしには佳味を貪る欲はない」と、実を今度は藹の髪に挿す。藹が遠慮するのを抑え、

「この四人の中で最も若いのがそなただ。数年前にきた廬山の愚笠子は信じるに足りぬ道士であったが、そなたの子孫が我が一族を後の世へと伝えるとの予言ばかりは正しいと思いたい。今日のこの重陽の宴を、最後まで覚えていて、子孫に語れるのはそなたであろう。そのときに、この叔父が生きていたのはまだ唐の世だったころ、あのときの重陽の節句はああであったと、思

い出してほしい。そうなれば、このささやかな宴も虚しく消えるまでにはなおしばらくの歳月が許されるのだから」

「韋荘は、叔父の前に置かれている盃に手を添え、

「何をおっしゃいますか。叔父上はまだまだ御壮健。長い旅も悠々と楽しんで帰ってこられたではありませんか。来年も再来年も、十年先も二十年先も、重陽の節句をお迎えになるのは間違いありません。さあどうぞ」

と、呑むよう促しつつ、今回の旅は叔父の心に適うものであったに違いないと感じる。己が莊園においてすべきことの一つがこれで終わった。

「この老体が長旅に耐えられたのは、我が宿願が果たせるよう、あるいは祖先が見守ってくださったからだろうか。蘇州を訪ね終わりたいま、これ以上の寿命を貪る気はなく、老体に許されていた時はすでに超えたようだ。広州までいったのは、わしが受けても良い幸を超えて求め過ぎたようだ。そのためにあの地で死んでしかるべきであったのだが、不思議にも、今日のこの山の好天に巡り会えた。これが我が生涯の最後の酒となるのが最もよいと、

わしは思うのだ」

叔父は一気に呑み干す。

「ここで親父どのに死なれましては、広州でせっかく拾ってさしあげました命が無駄になってしまいますな。子の心を知らぬ親ですな」

「叔父上がお帰りになるまでどれほど兄上が気をもんでおりましたことか。

いつまでも悠悠自適の日々を山でお過ごしになっていただきとうございます」

藹は髪に挿し込まれた茱萸を取って叔父に挿し、

「兄上のあの詩を、叔父上に聞いていただきましょう」

藹は体を大きく構えると、朗々と吟じる。

繚繞江南一歳帰

江南に舟を巡らせること一年

帰来行色満戎衣

帰りくれば、衣は旅の色に染まっている。

ひと月ほど前、揚州の店から、叔父と蘭が虢州への帰還の途についたと知らせてきたときに、叔父の心を想像して詠んだ詩である。

旅の間に蘭自身が書いて寄越したのは杭州からの一通だけだった。それが

届いてそれほど経たないうちに、黄巢が広州に向かっていると聞こえてきた。

黄巢は間もなく滅びるはずと期待していた朝廷の人々は愕然とした。黄巢は朝廷に向かって、自分を広州の知事に任命すれば、今後はおとなしく皇帝の命に従おうと言った。それを呑んで一件落着にしようと考えた宮廷人もいたが、広州が有する富は莫大で、それを与えてはかえって黄巢は手がつくれなくなる、朝廷は拒絶した。黄巢は猛然と広州城を囲み、広州はもろくも短時日で陥落した。唐朝が断つたのを恨みとし、黄巢は町を徹底的に破壊した。

そうしたことが莊園に断片的に聞こえてきて、後に揚州からの手紙が届くまで、韋荘は気が気でなく、楊爺は連日、お狐さまの祠で祈り続けた。

詩が終わると、蘭はすぐに、

「兄貴にしては上々の出来と言いますかな。寝ていても書けるいつもの癖は相変わらずではありませんが」

「相変わらずなのはそなたの口の悪さだ」

韋莊は苦笑する。叔父は、

「もうひと苦労かふた苦労も経験すれば、ぐっと詩はよくなるう」

至極もつともな言葉に、

「お教えまことに有り難うございます」

韋莊は畏まって頭を下げる。

「巧むことなく、己を出さず、自ずから湧き出る言葉ばかりが存在するようになるのならば、それがあはるいは真正の詩と言うものであるか。そなたも、いずれはそのような境地に達することもあろう」

「私には及びもつかないことです」

韋莊がそう言うのは謙遜ではない。何が難しいと言って、己を出さずとは到底できるものではあるまい。

叔父は、人為を廃し、莊園が自ずから良き状態に至るのを理想とした。それは美しい願いであったが、現実には莊園は自堕落に流れ、韋家の没落が加速された。韋莊は薛未亡人とともに、厳しい規律の枠に人々をはめこんだ。

韋莊自身は、本来の己は何かと言うことにこだわり、己を去り自ずから然るべきところに至る叔父の考え方とは遠いところで四苦八苦してきた。

「兄貴の詩は、字の並びが立派なのは昔から、しかし、いつも何かが足りないのですな。それは兄貴自身に足りないものがあるからでしょうかな」

従弟の皮肉はまことにその通りと思える。己に足りないものがあるから、己に執着し、あるいは、敢えて非情になろうとする。

「詰まらぬ詩しか書けぬのは詰まらぬ人間であるからだ」  
そう言う韋莊の前に蘭は盃を置き、

「兄貴は酒で狂を発することがありませんな。常道を頑なに守るのでもなく、逸脱もしない。それで詩もほどほどなのですな」

韋莊は従弟の注ぐ酒を見つつ、ここで己の決意を明かすべきかと考える。ここに出すのは狂なのか常道なのか。しかし、韋莊は一瞬のためらいによって、別のことを口にする。決意を明かすのはいま少し先であるようだ。

「叔父上が旅をされた南の土地は、いまごろはいかになっておりましようか」

叔父は空を見上げる。

「この蒼天のもとに唐土がある。それがいかなることになっているのか、あるいはいかなることになるのか、わしはそのような問いをいま持とうとしない。わしは広州が破壊される寸前に、あそこから脱出した。同じようにして、唐土がどうにかなる前に、この世から出ていくつもりだ。わしは唐の盛時にかろうじて間に合い、唐が滅びゆくより前に、この世を去る。わしにはその幸いが許されていると思いたい。そなたたち三人には、気の毒ながらそれは許されていない。だが、その気の毒さが、そなたの詩には、幸いとなるかも知れない。詩にその幸いがもたらされるまで、そなたが長寿であるよう、その盃を呑み干すがよい」

韋荘は、己の決意と全く無縁でもない叔父の言葉に従って盃を呑み干し、  
蘭は、

「天が定める寿命によって間に合わぬのなら仕方ありませんが、唐が滅びるのを見ないのは幸いと言えましようかな。秦が滅びて漢の高祖が天子の位に

就くのを見ずに死んだ人に向かって、幸運だったと言えましようかな。あるいは、隋の煬帝が死に、我が唐の高祖皇帝が御即位されるのを見なかった場合はどうですか。親父どのもいましばらく長生きをし、唐が滅んで、新たな英雄がですな、それは黄巢とか言う野郎かもわかりませんが、天子の位におさまるのを見ておくのも、人生の痛快事の一つになると言えるではありませんかな。菊の酒を、親父どのに重ねていただきましようかな」

蘭が盃へと腕を伸ばすのを韋莊は遮り、

「それは違う。黄巢は悪辣な流賊だ。唐が滅び、新たな英雄が出現するなど、軽々に口にすべきでない」

「確かに、黄巢はいまのところは悪辣な流賊ですな。そうでなくなるのは、いつ気がつくかですな。俺が黄巢なら、遅くとも広州に入ったときには気づいたでしょうな。あの町を破壊したのは大失敗でしたな。南蛮からもたらされる富で、誰も見たことのない新しい国を建てる好機であったのに、自分の手で台なしにしてしまいましたな。それもやむを得ないのでしような、何し



ろ、黄巢は貢挙を受けた勉強家、かの青虫連中の一人ですから。唐に恨みを持ちつつ、長安、洛陽に魅せられておる。王仙之が二度とも失敗した洛陽攻略を、きつと繰り返すでしょうな。そのときに気づけるかどうか、黄巢が本物になれるか否かの最後の機会となりましょうな」

「気づいたらどうなるのだ」

「唐を超えたる世がつかれるでしょうな」

「奪うしか知らないあの男に何ができるのか」

「兄貴は親父どのと同じで、旧き唐を引き摺っておられるから、唐とは違つ世がすぐそこにあつても目に入らないのでしような」

「古いものに拘泥はしない。新しい世がきてもよい。しかし、それをもたらすのが、黄巢のような悪人であるはずがない。断じて違わねばならない。黄巢のために無残にも殺されたたくさんの方々の無辜の民があまりにも哀れではないか」

韋莊はここで己の決意を明かすべきと思ひ、いかに話し始めるか短い思案

を始める。

そのわずかな隙に、少しく黙っていた藹が、

「戦のない世は未来永劫あり得ないのでしょいか」

と、ぼそりと言い、三人がその顔を見ると、いつも通り、他人には愚鈍と見なされる表情である。

その弟は、出し抜けに、

安得壯士挽天河　　どうかすれば、立派な男に、天の川の水を引いてこ

させ

浄洗甲兵長不用　　地上の鎧甲を洗い流し、永久に使えなくさせられる

のか。

と、詩句を吟じる。南山全体に響く美しい声である。

「杜甫の詩であるか」

叔父が言う。安祿山の乱の余燼がなお消えやらぬころ、天の川の水で地上の戦争を洗い流してしまいたいと、歌ったものだ。

「美しい想像ですな」

蘭は青空を見上げる。

韋荘も同じように天を仰ぎ、銀河の水がいましも奔流となって天より流れ降り、唐の各所に渦巻く兵乱をすっかり洗い流してくれぬものか。

韋荘の頭の中には、その空想とともに古聖賢の言葉が渦を巻き始める。孔子も孟子も、戦乱のない世をもたらず方策を追い求め、実践しようとした。儒学は人の世を良くするための学問である。韋荘は物心ついてから二十年余り儒学を学び続けた。それで何を身につけたのか。貢挙に合格することだけが念頭にあつて、古聖賢の言葉を実地に活かすことなど考えていなかった。藹が出した「戦のない世はあり得ないのか」の問いに、己はどのような答えを持っているのか。

叔父はしわぶき、韋藹とは別の詩を吟じる。

十載構屯難

十年にわたる戦難

兵戈若雲屯

兵戈が雲のごとく地上を覆う。

叔父が吟じるのは必ず韋応物の詩。先の杜甫の詩よりも数年の後、戦火がまだ完全にはおさまっていないころ、重陽の日に詠んだものである。

吾生自不達 私の人生は行き詰まったまま

空鳥何翩翩 空の鳥は自在に翼を翻している。

天高水流遠 天は高く、水の流れは遠く

日晏城郭昏 日は暮れ方に向かい、町は暗くなりゆく。

徘徊訖旦夕 行きつ戻りつこの朝夕に

聊用写憂煩 我が憂いを写すしかない。

叔父の声は低く重く、詩が終わると、誰もがうなだれる。

韋応物の「憂煩」とはいかなるものだったのか。しばし四人はそれぞれの憂煩の内に沈思する。

わずかに風が出て、静かに木の枝を鳴らし始める。叔父がぼつりぼつりと語り出す。

「この佳き日に、我が生を終えたいとの思いが募る。死は幸いにも憂煩に対

し永遠の決別を告げてくれよう。敢えてかように望まざとも、七十にならんとするこの身、死は間近だ。そなたたちは不幸にも、これより十年、二十年、三十年と生き、そなたたちの子はさらに四十年、五十年と生きねばならない。その年月の間に、明日は昨日より佳きものを見られると期待して叶うときがくるのだろうか。わしの生涯にそのようなときはなかったが、なお昨日の佳きものがすぐ近くにあった。揚州、蘇州、杭州、広州を見てきた。唐の佳き日々が生んだ、昨日までの佳きものがあつた。見た直後に、佳き広州は消え、いずれ杭州も蘇州も揚州も消え、洛陽も長安も廢墟となろうか。そのような問をわしは持たぬと言つたばかりだが、消えぬのを望むは、黄河が清らかに澄むのを待つより難しく、天の川が兵器を洗い流すよりも難しいだろう。我等が祖韋忠物は安祿山の乱に遭遇し、都長安が賊の手に落ちるのを目の当たりにした。だが、我が大唐の大綱はそのときなお太く強く、唐朝はそれより百有余年の繁栄を誇つた。わしはその黄昏のときに生まれ、暮れなずむうちに生を終えられる。わしの願いがより確かに叶うものなら、この佳き日にこ

「ここで我が生を終えたい」

叔父の述懐は深い嘆息とともに終わり、四人は再び沈黙に陥る。

風の細い音、鳥の遠い声。蘭が笛を取り出す。

皮肉な言い回しを得意とする蘭だが、笛の音は清らかに澄む。蘭の心はまことはこの笛の音と同じであるのだろう。

日が槐の上を通過し、西の空へと移るころ、藹が立ち上がる。時分とみて、楊爺と楊胆が置いていった箱より、料理の盛られた皿を出し、卓へと運び始める。蘭も笛をおさめ、その手助けをする。

蘭は皿を手にしたまま、坂の下方を見て、体の動きを止める。

「誰もここにはこないはずであるのに」

韋荘の耳には、枝葉を踏むかすかに音が聞こえてくる。

「やや、これは珍客到来ですな」

韋荘は、誰がくるのかと立ち、坂の口へと少し歩めば、楊爺の四角い体がぐいぐいと上ってくるのが見える。その後ろに、上下に動く筥がある。手に

する錫杖が見え、僧侶がくるようである。

「誰かわかりますかな」

「余程背の高い僧と見えるが」

蘭はふふと笑い、

「わかりませんか。間違いありません。仏蕃ですな」

まさかと思つて見れば、からだの大きさは仏蕃のものとも見える。仏蕃とは七年前に揚州で別れたままだ。

ここ数年、仏蕃の居所は知れない。貫休の描いた十六羅漢図が評判となつたこともあつて、蘭が寄進した堂には多くの人が訪れるようになった。仏蕃の法話に惹かれてか、金剛経の札に靈験によつてか、富豪や大官の信者も増え、堂を巡つて幾つもの棟が連なり、門前に市をなす大寺院へと発展した。ところが、仏蕃は忽然と姿を消した。叔父と蘭が旅の往復で揚州に寄つたとき、仏蕃は不在だった。一方で、ごく最近、長安に金剛経の札を配る僧が現われたと聞こえ、蘭も韋荘も仏蕃を思つたのだが、それが本人であるか定か

でなかった。

坂の口で出迎えたのはまさしく仏蕃。巨大な鼻、しゃくれ上がった顎、深い眼窩、垂れ下がる耳、それは仏蕃そのものである。

蘭が型通りの一別以来の挨拶する横で、その仏蕃の顔を間近に見て、不思議なたじろぎを覚える。蘭が言うに合わせてうなずいてはいるが、己の内でざわざわと生じつつあるものに気を取られる。それは何であるのか。

仏蕃は微笑みかけてきて、韋荘もさりげなく返す。内なる動揺は大きくなっていく。

話すのは蘭一人に任せ、いっそうのたじろぎに、目の前のこの僧は、同じ仏蕃にして以前の仏蕃ではないと知る。

蘭は仏蕃を槐の下の席へと導き、叔父と藹を引き合わせる。楊爺は手際よく座を整え、いままで叔父がいた場所を仏蕃の席とし、その横に叔父が座す。韋荘は楊爺に促されて二人の向かい側に座り、その左右が蘭と藹の席となる。楊爺は離れた地面にしゃがみ、仏蕃をじろじろと見ている。狐信仰に固まっ



た楊爺には僧侶に畏敬の念を持つことはない。

「揚州のお堂で、十六羅漢の三番目がお上人さまに最も似ると伺い、直にお目にかかれぬのを残念に思っております。はからずもこのみすばらしい莊園にお越しいただけまして、嬉しい限りにございます。これはいかなる縁の為せるものでありましょうか」

叔父は料理を盛った皿を示して仏蕃に勧める。仏蕃は合掌し、

「愚僧が羅漢さまに似るとはあまりに勿体なきお詞、愚僧ごときは羅漢さまとは似ても似つかぬ、悟りを得ぬ一所不住の未熟な修行僧。縁があるやらあらざるや、愚僧にはわからず、あるとすれば、みな御仏のお導きでしょうか。そうと思つて、御仏に全てをお任せできればよろしいのでしょうか、それがままならぬのが、輪廻の巷に惑う者の業でありましょう。縁とは、あると言ふのならあり、ないと言ふのならない。そのようなものでありましょうか。どうでしょうか、違つておりましょうか」

「お上人さまにもおわかりにならないことが、私ごとき俗人にわかりましょ

うか。揚州のお堂に二度お参りさせていただき、門前には参詣の流れが絶えず、お上人さまのお帰りをいまかいまかと皆が望み、お上人さまの御高德を慕わぬ者として揚州には一人もない様子でした。なぜに揚州を離れておられるのでしょうか」

「堂を出てすでに六年。いつか帰るのか、二度と帰らぬのか。愚僧にはわかりませぬ」

仏蕃の声は暢やかである。

揚州で最初に見た仏蕃は、異臭のたちこめる暗い小屋に貧乏人を集めて札を売りつける似非坊と見えた。揚州にいる間に、その胡散臭さは払拭されず、貫休がなぜ仏蕃に似せて羅漢を描いたのか理解できなかつた。いまここにいる仏蕃は、そのときとはまるで違う。魁偉な風貌は同じだ。むしろ猛々しさは増している。

「揚州にはお帰りにならず、かえって私どものところに、いかなる御用でお立ち寄りくださいましたのでしょうか」

と、叔父は尋ねる。

「愚僧にはもとより用と申すものはなく、世に無用の者であります。御仏のお導きによつて、都を出て広州を志しての旅路、道で虢州の名を聞き、ふと足がこちらに向かいました」

「広州とおっしゃいますか。黄巢によつて灰燼に帰したといわれるあの町でしようか。はて、それはいかなる御用でございましょう」

「いま申しました通り、愚僧には用というものはありません。ここしばらく長安におりまして、ふと広州に向かう時がきたと知れ、それで歩いていてるのです」

「広州には悲惨な目に遭う人々がたくさんいるに違いなく、金剛経の札をその者たちに配るためでございましょうか」

「広州に参ればそのようになりましょう」

「広州に向かう時がきたとはどのような訳でございましょうか」

「愚僧が思いますに、大切なのは時というものでありましょう。時に至らね

ば事は為されず、事を為す時を逃せば、それは失われたままとなりましょう。時とはそのようなものではありませんか。違っておりましようか」

「私には先ほどからお上人さまのおっしゃることがよくわかっておりません」  
「時について申せば、その一つは、御仏のお言葉が耳に入る時機がありますよう。広州の人々がその時を迎えているのなら、愚僧はそこに居りたいものです」

「そのような時機であるとはいかにしたら知れるのでありましようか」  
「すでにして知れば知っておるのでしよう」

「なるほど」

叔父はうなずく。

楊爺はいつの間にか座から離れ、かしこにしゃがんでそっぽを見ている。叔父と仏蕃の掴みどころのない問答に興味を失ったのだろう。韋荘も、叔父が何に納得したのか了解できないが、一つのこと気づく。仏蕃が以前と違って見えたのは、どうやらその目に理由があるようだ。

仏蕃は衣を直し、

「何やら妙なことをしやべってしまいました。せつかく得たこの機会、お二人にお礼を申し上げるのが、まず先でありました」

堂の寄進を受けたことについて蘭と韋荘に深々と頭を下げる。

韋荘のからだが硬直し始める。仏蕃が頭を下げているこの状況に、強い違和感がある。ここにおいてよりふさわしいのは、己が頭を下げることではないか。仏蕃の前に我が身を投げ出し、伏し拝んだらどうなのか。それが似つかわしくあるのではないか。そのように心の内で思っていることに気づき、韋荘はそれまで以上に困惑する。どうしてそう感じたりするのか。

仏蕃が身を起さず。

以前とは変わったと感じた仏蕃の目を韋荘は見る。その目によって、心の底まで見抜かれているかのようだ。隠すことはあるまい。仏蕃になら見てもらつてよい。そう感じている己に、韋荘は激しくたじろぐ。

仏蕃に帰依しようというのか。金剛経の札に身を委ねようというのか。な

ぜだ。

三人に向かって言おうとしていた決意はどうなってしまうのか。まだそれは口にしていない。誰も知らないことだ。このまま消してしまえば誰にも知られない。仏蕃がここにいま現れたのは、己が口に出すのを止めるためか。いまはその時機ではなく、むしろ仏蕃に帰依する時機であるのか。

韋荘は無言で仏蕃に会釈を返す。

叔父はもう一度皿を勧める。仏蕃は合掌礼拝し、何やら口に唱えて、箸を手にする。

山頂での四人の宴は五人の宴となり、楊翁が一人離れて背を向けている。蘭は、いつものように勢いよく酒と料理を口に入れ、弁舌を振るい出す。

「お上人さまも御覧の通り、ここ数十年來、唐土におきましたは、土地を失い流亡する者は数知れず、お上に楯突く反乱もまた数知れず、賊が悪いやら官が悪いやら、大地に無数の屍が曝されるありさまとなりました。これくらいは、恐らくはまだ序の口なのでしょうな。天下はこれより乱れに乱れるの

でしょう。乱れた世にこそは、救いというものがあってしかるべきで、民を救うのはいかなる者でありましょうかな。剣を手にする英雄ですか。これまでの歴史は英雄が霸道によって天下を制してきましたが、稀には、儒家の説く仁の教えの王道政治が現出することもあるのでしょうか。はたまた、御仏の教えが衆生を救うのですかな。思い起こせば、かつて隋の世が乱れ始めた大業年間に、洛陽に数十人の白装束の男が現れました。華を持ち香を焚きつつ建国門より入り、何をなすかと見れば、『ああら、有難や、弥勒菩薩さまが地上にお現れになり、衆生を一人残らず救って下さいますぞ』と触れてまわる。煬帝の暴政に苦しんでいた民衆はその言葉に喜び、白装束集団に加わり、弥勒菩薩のお導きだと言って官署を襲い、火をつけ、物を壊して大騒ぎを起しました。しかし、俄に生じた民衆の反抗など、正規の兵士が剣を向ければたちまち鎮圧されるよりなく、弥勒菩薩を奉じた者、千余家が処刑されました。とんだ弥勒菩薩のお導きであった訳ですが、しかし考えてみれば、この事件をきっかけとして、隋の全土は蜂の巣を突いたような騒

ぎとなり、十年も経ずして隋は滅んだのですな。弥勒菩薩が地上に現れたのは、あるいは本当だったのかも知れません。お上人さまはいかにお考えになりましたでしょうか」

仏蕃は箸を置き、

「弥勒菩薩さまが地上にお姿を現わされることがあるのかないのか、愚僧の知るところではありません。愚僧が知るのは、御仏の教えによって民衆が救われるという一事のみです。大業年間に弥勒菩薩さまが現れて、天下が救われることもあったのかも知れません。それもよろしいでしょうが、一人の煬帝と言う男はどうであったのでしょうか。救いを得られたのでしょうか。残念ながらそうではなかったのでしょうか。違つておりまじょうか」

「お上人さまが残念がるのが解せませんな。煬帝のためにどれほど多くの血が流されたか。残酷な皇帝が救われたか否か顧慮する必要がどこにありますようかな」

「煬帝を顧慮せずして、この世の誰を顧慮するのでしょうか。御仏の前に、煬



帝も他の誰も変わりはありません」

「それはおかしいですな。極悪人も聖人も同じなら、この世で何をしてもいいとなりましょう。それが御仏の教えなのですか。煬帝も救われるのなら、善を行う理由はなくなりましょう。なるほど、それでわかつてきましたな。都にはいったい幾つの仏寺がありましたか。揃いも揃って何をしているのですか。国家鎮護のお勤めを為し、皇帝よりたくさんの金をもらい、衆生済度のお勤めを為し、民衆よりたくさんの銭をまきあげ、ただ己の利のために大伽藍を構えている。それで結構な仏弟子と威張ってられるのも、だからなのでしょうな」

「愚僧は国家鎮護のお勤めは致しません。もしもそれがまことに御仏の心に適うものあれば、都にあれだけの仏寺が並んで、黄巢の乱が起こるはずがありません。御仏の教えは人を救いはしても、天下を救うものではありません。違っておりますか」

「そこまでおわかりなら、お上人さまは、天下の多くの僧からのけ者とされ

ましような」

「いやいや、実のところ、愚僧は何もわかっておりません。いま申したのはうっかり口より出てしまっただけのこと。お忘れ下さい。愚僧が確かに知りますのは先師の教えのみ。天竺より唐土に参り、金剛経を奉じて、唐土の民を一人でも救うようにと言われました。愚僧は救いの何たるかを知らず、ただ先師に言われた勤めを果たそうとしているだけです」

仏蕃は穏やかに何の気負いもなしにそのように言う。

叔父が尋ねる。

「御仏の救いと言われますが、死んで後の世とはいかなるものでしょうか」

「愚僧は知りません」

「六道輪廻を仏弟子は説かれると聞いておりますが」

「愚僧も聞いております。しかし、それが確かであると知る者がどこにおりましようか。違いましようか」

叔父はぼんと膝を打ち、

「これはよきお言葉をお聞きしました。お上人さまからもそのように伺い、安心致しました。今日はまことに佳い重陽でございます。唐の世が夢と消えるのなら、その夢のうちに死ぬのが、私の望み。死んでの後の世がいかなるものかを知らぬままに死ねるのもまた幸い。孔子のように、来世はわからぬものと、語るのも聞くのも止めておくのが最も深い知恵。はからずも、お上人さまからも同じお答えを頂戴しました。現世において平穩な一日を得られれば人は十分でございます。花は自ずから咲き自ずから散る。それだけのこと。天の道は自ずとそうなのでございましょう。まやかしの人の知恵が乱さない限りは」

叔父は一人で得心している。

蘭は酒をぐいとあおり、

「今日のこの宴が仏縁によるものであるなら、婺州においてももう一つの仏縁があり、貫休さまにお目にかかりましたな」

「ほう、あれからお目にかからずにおりますが、お変わりなくお過ごしだっ

たでしようか」

「近頃では、都にも貫休さまの名が知られ、書や画に結構な値がつくようになりしましたな。商う者としては有難いですな」

蘭は笑う。

「そうですか。どうやらあのお方とは、もうお会いすることはありますまいと、愚僧は思っております」

「そうかも知れませんな。貫休さまはこの先、故郷の婺州におられるのでしよう。法力をもって婺州を守らんものと、熱心に読経に励んでおられましたな。親父どのも、貫休さまの読経の迫力には驚かされましたな」

「そうであった。私のような老人は死んでしまえばすむが、世の多くの者はこれからも長く生きねばならない。家を守り、町を守るには、頼れるものにはすがりたい。法力でも武力でも、強くなるものを民衆は望みましょう。貫休さまは婺州において信者を増やしつつあり、杭州にはまた別に若くて勢いのある者がいて、貫休さまはその人を高く買っておられました。もしも法力と

武力が一つになって、より力を強くするのなら、民にとっては幸せなことなのでございましょう」

仏蕃は目を閉じている。蘭が説明を加える。

「それは錢鏐（せん りゅう）と申す男のことですな。都にもその名は聞こえてきていますな。噂では、貫休さまがその錢鏐に会われて、天下を治める相があると申されたとか。錢鏐が節度使になれば世が変わると、杭州の民衆は待ち望んでいるともいわれますな」

かつて黄巢が洛陽攻略に失敗し、南へ南へと逃れ、長江を渡って江南の地に入り、手当たり次第に各地を荒らしまわっていたころ、杭州へも黄巢がくると聞こえ、町の人々は震え上がった。偉い人たちは怯えてばかり、全く無名の錢鏐が現れ、人々を率いて黄巢軍の前に立ちはだかった。錢鏐は敵の出鼻をみごと挫き、杭州は手強いと黄巢は進路を変えた。杭州は無傷で、錢鏐は一躍英雄となった。

仏蕃は目を開き、

「貫休さまのお心は愚僧には知れません」

その声に、韋荘は氷のような冷たさを感じる。

叔父も藹も同じような感覚になったのだろう、宴席が白けた雰囲気になった。仏蕃もそれに気づき、

「一つ思い出したことがあります。堅い話ばかりが続き、せつかくの重陽の宴を台なしにしてしまったようです。ここで座興に、先年、武当山の小さな禅寺に投宿しました折に、処弘じょこうと申す僧から聞いた話を語ってみましたと思うのですが、お聞きいただけますでしょうか」

打って変わって朗らかな声で、楽しげな笑みさえ浮かべる。かつて揚州の檻樓小屋で聞いた名調子が韋荘の脳裏によみがえる。

「是非ともお聞かせいただきたいものですな」

蘭はそう言いつつ、仏蕃の前の卓の上の皿を脇に寄せる。仏蕃は懐より笏を取り出し、軽くぽんぽんと叩く。仏蕃の顔が相国寺の講釈師の親父に似てくる。楊爺が笏の音に誘われるようにしてじりじりと寄ってきて、仏蕃の正

面にしやがむ。

「武当山とは御案内の通り均州にございます。その均州と房州のあたりで少しばかり名の知られた王八という盗賊がおりました。この王八、腕自慢の乱暴者ながら、面白い癖がございまして、それは何かと申せば、ひどく理屈っぽい。例えば、金持ちの家に盗みに入るとします。門の前に立ち、押し入るに先立って、心の内に、その家が盗賊に襲われてしかるべき十分な根拠を列挙する。こんな具合です。三代前の姑は嫁いびりが大好きで、嫁は井戸に身を投げて死んだとか、腐った肉を赤く染めて高い値で売り、それを食べて腹を壊して死んだ者が数知れずいたとか、宦官の何某に賄賂を贈ってうまいことやったとか、本当かどうかわからぬが、その家にあつたようなことを並べ立て、その罪のためにとうとうここに家の破れる日がきたのであるから自業自得、よって我が行為は正当なものであると、十分に論証してより、やおら忍び込むのでございます。

ある晩のこと、王八は一人で武当山の寺の前まできますと、今夜ここに入

ると決めまして、例によって、先の住職には女犯の大罪があるとの話を作り出し、後家を手籠めにしたときのありさまをひとくさり、己にしか聞こえぬ声で語りました。もちろんそこは初めてきた寺で、先の住職とは誰なのか、王八は一向に知りはしないのです。

さて、王八が長い物語を終え、いよいよ寺に忍び入りましたのは、夜も深々と更けゆくころ。本堂の中は真つ暗。奥にほんのり明るく浮かび上がりますのは、どうやら金の仏像。こいつはよい、これをいただいていこうと、ここでまた、この仏像は民から搾り取った錢で鑄た不浄のもの、よって盗んでも罪にはならないと、出鱈目の話を連ね、えいやと肩に担ぎます。赤ん坊くらしいの大ききの割にはなかなか重い。金箔ではなく、全身が無垢の金の塊かも知れぬと、王八は大喜び。そろりそろりと、本堂の扉より足を出しますと、ぐいと膝に当たるものがあります。それを押して前に進もうとして、体が邪魔されます。さつき入ったときには何もなかったはずだがと、不思議に思いつつ、右に避けますと、やはり膝に当たるものがまたある。先には進め



ません。左にいつても同じこと。つま先を伸ばして探ると何も無い。進もうとすると膝に当たる。いっそ跳び越えようかと、えいとばかりに上体を前のめりにすると、肩から跳ね返されます。『はて面妖な』。舌を出していぶかしんでおりますと、折りしも、東の空が明るく変じ、下弦の月が昇ってまいります。松の枝先に月が出て、堂の扉へと白い光を注がれてまいります。『やや』と、王八がうなつたのは無理ありません。そこには何も無いのです。

何も無いのならば前にいけるはずと、足を進めようとする、同じように膝に当たる。さすがに胆の太い王八もぞつとします。一步退き、扉の内に身を入れますと、『ここよりは出られぬぞ』。背後に響く童子の声。王八は身をすくめ、こわごわ振り返ります。とば口にさしこむ月影があるばかりで、奥の方は真の闇。もしやいまの声はこの仏像が発したかと、気づくと急に怖くなり、肩よりおろして床に置きます。『ここではない』と、また童子の声。王八、大慌てで元の場所に戻します。仏像を壇に据えるが早いか、堂の扉から飛び出ます。すると、縁先で一人の僧が座禅を組んでおります。それが、愚

僧にこの話を聞かせてくれましたところの処弘です。

王八はびっくり仰天。何しろそこは誰もいなかったところ。王八は、身を翻して縁より地に伏せ、いまここであったことを処弘に告げます。王八が思うには、この僧が法力を用いたに違いないと。

一方の処弘は、夕刻より座禪を組んでの無念無想、王八の声でいま初めて目を開いたのです。見れば、地上に一人の男が座しています。それも普通の男ではなく、全身が丸く光に包まれているのでございます。処弘はその神々しさに目を見張り、これもまた飛ぶようにして縁より降りて地に伏し、王八を拝します。王八は、眉が高く、額が広く、眼差し鋭く、ひと目で常人ではありません。

『御名をお聞かせくださいましょうか』。処弘の問いに、何が何だかわからなくなっておりました王八、素直に『許州舞陽の王建（おうけん）と申します』と答えます。『何を業とされましようか』。かつては田を耕し、牛の肉を商い、私塩を商い、いずれもうまくいかず、ただいまは盗賊。賊王八と呼ばれてお

ります』その名に満足しておられましようか』他に生きる術がなく、やむなく為すまで』立派なお体と、尋常ならざる面魂。虚しく小盗として一生を終える方とは思えません』男子ひとたび生を享けて、志もなく生きるはまこと詰まらぬと思いはしても、その日の食い扶持のためにこのようにしております』世の乱れに、そのお体とお知恵を、衆生救済のためにお使いになつてはいかがなものでしょうか』某にできるのなら望みもしましうが、所詮はこの盗賊稼業のはかない一生であります』御仏に帰依されませ。愚僧がここで剃髪して進ぜましよう』仏の教えは、死んで後、六道輪廻より解脱する救いへと導くものと聞いたことがあります、それは余りに迂遠なことと某には思われます』ならば、現世において、王道をもって天下を定め、衆生を戦乱の巷より救おうとは思われませぬか』それなら、男と生まれたからにはもとより望むべきこと。しかし、某などに何ができましようか』できるできないではありません。いまここで、二つに一つをお選びなさいませ』そうせねばなりませんか』いかにもいまがそのときです』ならば、某には、仏法よ

りは王道でありましょう』『されば決まりました。ここよりただちに東に向かい、兵士となられよ』

処弘がそう言いますと、王建はしばし考え、『ただいま仏罰を蒙り、某はここに変わるよりありません。しかと兵となり、天下を定めるために働きましょう。月明かりのもと、直ちに旅に出たと言うことです。処弘はその姿を見送りますと、意識が朦朧となり、気づいたときには朝日に身を包まれ、賊王八に会ったのが夢であったのかうつつであったのか、とんとわからないという次第でありました』

仏蕃が笏を静かに打ち話は終わる。楊爺がふうと大きく息を吐く。

「王建とやらはその後どうなりましたのでしょうか」

叔父が尋ねる。

「愚僧は聞いておりません」

「全ては御仏の為されたことだったのでございませうか」

「愚僧の知ることはありません」

蘭は、

「いずれにしても、世の乱れを待っていた男がそこにもいたということですか。揚州の町を裸でうろついていた朱温が、そのようなことを言っておりましたな。杭州の錢鏐も、黄巢が乱を起さなければ、男を上げる機会はこなかったでしょうからな」

「乱を望む者あり、治を望む者あり、救いを望む者あり、死を望む者あり、世はいろいろでございます。長く生きていればそれだけ、望まぬものを多く見、望まぬことを多く為さねばなりません」

と、叔父。

「現世のことは現世の者がそれぞれの考えによつて為すのでありましようが、その裏に御仏による摂理があるのか否か、それは誰にも知れません。賊王八に御仏のお導きはあったのかといえば、そうでもあり、そうでもないのです。この愚僧が金剛経の御札を配るのも、あるいは、御仏のお導きによるのではないのかも知れません」

「では一体いかなることを為されているのですかな」

「何も為していないのかも知れませんが。愚僧に御仏のお導きがあるうがなからうが、愚僧が何をしようがすまいが、御仏は衆生に向かつて救いの御手を差し伸べておられ、その証として金剛経のお札があるのでしょうか。それだけのことです」

「御仏の御手とはいかなるものですか」

「誰もが触れられるものです」

「誰もというからには、御仏の教えを信じない者、例えば、煬帝のような男もですか」

「無論です」

「ではこの俺もですか」

「左様です」

「ならば、伺いましょう、御仏の救いとはいかなるものかと」

「それは愚僧の知るところではありません」

「不可解 不可解。救いがいかなるものか御存知なく、しかし、それを広めるために歩いておられるのですかな」

「いかにもその通りです」

「わからぬ話ですな。お上人さまは広州に向かつておられるとおっしゃいましたが、それは長安の民を捨てていかれるということですか。長安の民と広州の民とを区別されるのですかな。御仏の御手には誰もが触れられると申しながら、長安の民より広州の民を先にするのはいかなる理由によつてですか」

「それも愚僧にはわかりませんと申せば、あなたさまは、愚僧が答えに窮して逃げたとお考えになるでしょう。それも仕方のないことです。金剛仙さまの弟子となりまして、なぜ故郷の天竺の民をさしおいてはるばる唐土の民を救いに出ねばならぬのかと先師に問いましたところ、やはり御仏の不可思議は知れぬとの答えよりありませんでした。愚僧は救いを待つところへと歩んでいくだけです」

仏蕃の目が変ったと思えたのは、知らぬと揺ぎなく言えるところにあるのかも知れないと、韋荘は考える。知らぬと言いつつ、仏蕃は全てを知っているかのように見える。それは知らぬことを知っているということなのか。

己は何を揺るぎなく言えるのか。今日はここで己の決意を明らかにしようと思っていた。叔父と蘭と弟に告げ、決意をいよいよ揺るぎないものにし、実行に移そうと思っていた。

己はこれまで常に迷い、誤りを繰り返してきた。かの祭の夜に、全ては誤りであったと知り、それをどうにかして正したいと思い、一つの解決策を得た。それを今日、ここで初めて口に出すつもりでいた。そこに仏蕃が現れ、不意に動揺を来たし、仏蕃に帰依しそうになった。どうしてこれほどまでに揺れ動くのか。

仏蕃には迷いはないのだろう。金剛仙に会ったという日から今日まで、迷うことなく、一筋の道を進んで、いささかも誤りはしなかったのだろう。それに比べて己はどうか。



楊爺が不思議そうな顔で仏蕃を見つめている。

いまを逃してはならない。仏蕃の言う時機とはいまなのだ。

韋莊は己の決意を告げるべく、身を前に進める。蘭がその様子に気づく。

韋莊は軽く咳払いをし、

「仏蕃どの、私が思いますに、人が生きるありさまとは、我が内なるものと、我が外なるものとの相克の表れであるのでしよう。我ら儒学を学ぶ者は、内なるものの根源を性と言い、外なるものの初源を天と申すようです。仏蕃どのならば別の言葉をお使いになるでしょう。人の本性が仁であり、その仁によつて義を行うのなら、天道に則つて世は自ずと治まり、我が内なるものと我が外なるものとの相克も生じなくなります。堯や舜の聖天子の時代はそれようであつたとされ、それ以後は、常に堯舜の時代に立ち戻るのを希求しながらも、ひたすらに遠ざかつてまいりました。されば、実のところ、人の本性は善ではないのか、あるいは、天道も是でないのかと、性と天を巡る疑義が唱えられ、すでに千年余りになります。人によつてその主張が異なるのは、

初めより正しい一つの答えがないためであるのかも知れません。そうであるのならば、もとより問いを捨て、現在我が外にあるもの、利益や声望にひかれて日々を送るのが第一の生き方となりましょう。しかし、乱世となれば、外より我が命に害を為すものに抗するののままなりません。第一の生き方は、我が内なるものをひたすらに貫き、世と相容れずと、あるいは命を捨てても、それでよしとするものでしょう。仏蕃どのは御仏の教えとおっしゃっておられますが、それを信じるのは仏蕃どのお心であり、結局は、御仏の教えは仏蕃どの中の内にあるのでしょう。恐らく、仏蕃どのは私のいまの言い方には同意なさらないでしょう。そもそも己を捨てられた仏蕃どの中には、あくまでも我が内なるものに執着する私の考え方を迷妄と御覧になられることでしょう。しかし、いまは私の申すことをお聞きください。私は己を顧みて、私の内に何か貫くものがあるのかと考えると、確かなものはありません。ならば、私は、我が外にある利益や声望にひかれて生きるのをよしとすべきでしょうか。思えば、私はこの二つの間で迷い続けてきました。私には、仏蕃どのは

ように貫いてきたものはなく、たどってきた跡を見れば、数々の誤りが残るばかりです。外に引かれ、内に戻り、成し遂げたものは何もありません。その場その場を小器用に凌ぎ、うまくいかねば逃げ、時にこれが本来の己なのだといを偽り、人をも偽って参りました。人生の最後までをこのように過ごし、すでに時遅しとなつて、後悔に己を責めつつ虚しく死ぬのが私のような愚昧な人間には最もふさわしいのでしょうか。しかし、いかに愚かであっても、我が内なるものと我が外なるものの相克の外に出て、そこにある調和を見出したいと考えることもあります。ここ数年來、誤りに満ちた己ではあつても、これを何かに捧げることで、相克の上に出られるのではと志向して参りました。誰にも言わず、今日までに己の内において固めて参りました。この重陽の日に、ここ南山において、私の思いを、叔父上、弟、そして蘭くんに聞いてもらうつもりで、今日はおりました。いまここに仏蕃どのがお見えになり、我が心を定めるべきときがここに至つたと確信しました。御仏の教えに導かれ、衆生救済のために身を捨てておられる仏蕃どにはもとより遠く及ばず

とも、私も人のため、世のために身を投げ出し、我が生き方の一つの答えと致します」

韋荘は息もつかずに一気に告げる。

これだけの言辞を費やさねば己さえ納得させられない。お祭の夜の思いはこの通りであったのか。その夜に直ちに身を正さなかった誤りを取り戻せるのか。仏蕃に帰依する機会を見送ってよいのか。全てが疑わしい。

楊叡が食い入るように韋荘を見ている。

「さあ楊叡も前にきて良く聞いてくれ」

韋荘はたじろいだことから生じた迷いを払おうとする。

盃に手を伸ばす。楊叡が進み出てそこに酒を注ぐ。韋荘は一息に呑み干し、「私は己の心の弱さを良く知っております。ここで決意を明らかにしようと思っていた今日になってからでも、まだ揺れ動きません。仏蕃どのの前で、己の卑小さを思い知り、足がすぐみえます。このまま口にせずにおくのが、実のところ卑小な私にはふさわしいのかも知れません。口に出したところで、結

局は貫徹ぬことになれば、一生を恥の内に過ごさねばなりません。そうなるとの予感もあります。しかし、それでたじろいでは何もできません。いま為すべきことを定め、それを口にせねば、これより何もできません。仏蕃どの、私はこれほどまでに弱い人間なのです」

「愚僧も同じ。明日には、御仏の教えを信じていない己があるのではないかと、始終恐れております」

「まことでしょうか」

仏蕃は合掌してうなづく。

「では、申します。言えば私の決心などは、ごく小さなもの。これほどまでに長い前口上を要するものではないのです。来年の夏、私は都長安に上ります。それは何のためか。再来年の春の貢奉を受けるためです。今度こそは進士及第を得ます。私はこの乱れゆく時代に、唐朝のために残りの人生を捧げると決めました」

言い切ると、韋荘は大きく息を吐く。言ってみればこれだけのことである。

天を仰ぐ。小さくとも決意は我が口より出た。もう戻りはしない。

上にはあくまでも澄んだ青い色がある。吹き渡るのは秋の風。胸に秘してきた思いが晴れ晴れとほどけ、代わって、ことさらに清々しい空気が胸へと入ってくるようだ。

韋荘の内ではすでに変化が始まっている。天よりゆっくりと視線を地上に下ろす。叔父も韋も藹も楊爺も中空に目を据え、堅い表情で、ぴくりとも動かない。仏蕃は目を閉じている。

叔父が最初に動き出し、深く嘆息する。

「ここではわしが年長である。まずものを言うべきであるのだろう。そなたの決意を耳にし、それを壮として、祝すべきだろうか。そなたが貢奉に落ちて虢州に帰ってきたのは十七年前だった。その折に、わしは、我等が祖、応物の詩を示し、そなたに奮起を促した。一族の長として、それがわしの為すべきことと考えたからだ。今日まで、それを悔やみ続けてきた。そなたは蘭と旅に立ち、帰ってくるなり、莊園の仕事をしたと言い出した。わしはそ

あなたの考えを是とした。貢挙では、わしはそなたの父を苦しめた。わしが貢挙を受けていれば、そなたの父はどれほど楽に生きられたか。わしは野に隠れ、日々を平穩に生きるのを望み、代わりにそなたの父を、さらにはそなたを苦しめた。すまないことだ。わしは、いま気ままな日々を送り、蘭とともに南方への旅もした。そなたのお陰だ。これ以上にわしに望むことはない。そなたはわしの心を知っていてくれた。わしの心を知るそなたが、いまから貢挙を受けるのがよいとは思えない。もしも、我等が祖、韋応物の詩がいまのそなたの心に影響しているのなら、それはどうか忘れてほしい」

「叔父上には感謝するばかりです。私ごときをそこまで思ってください、何を申してよいやらわかりません。私は叔父上の甥として生まれました。これをこれまで常に幸せとと思って参りました。正直に申して、私は、遠く宰相も出した韋家の嫡男として生まれました。ことをしばしば恨んできました。貢挙に合格し、我が家名を上げ、朝廷に居並ぶのが我が本分と、何ら疑いを持たずに二十七歳まで努めて、その貢挙に落ち、己を失いました。蘭くんとの旅に

出て、我と我が身を苦しめるだけの貢奉などには背を向け、我らの莊園を富ませることに専念すると決めました。藹と、ここにはいない莠と、そして蘭くんが助けてくれ、叔母上のお力もあって、莊園は幸いにもかつての繁栄を取り戻しました。いま私はすでに四十四歳です。孔子は四十にして天命を知ると言われました。我が天命とは何でありましょうか。ここ南山に四十四歳の身を置く我が身が何故にここに存在するのか。そこに潜む造物主の意図を思わねばなりません。孔子の弟子であるからには、天道は正しくあると思わべきでしょう。ならば、我が天命は、四十四歳でいまここに在意味があるかすべきでしょう。遠くは七代前に宰相を出し、四代前に蘇州刺史を出した一族の子として、ここに生きていることに意味があるとすれば、この莊は何をすべきなのか。言うまでもなく、それは生まれたときから明らかだったのです。父上、母上、叔父上、叔母上、皆様が初めから御存知の通り、私は貢奉を受け、大唐の再興のために尽くす人間だったのです。それ以外に何がありましょうか。叔父上が応物の詩をお示しになったのは、これ以上に



ない正しいことではありません。私は情けなくも、ただの一度、試験に落ちただけで心がねじ曲がり、我が天命に背を向け、今日に至ってしまったのです。私がかこまでできた跡には誤りが満ち満ちています。ここで言っていることも、きつと理屈の通らぬものでしょう。しかし、我が天命はこれであると知り、死ぬときに後悔しないですむよう、再来年の貢挙を受け、これよりは誤りを少しでもなくしていきたいと思ふのです」

韋荘が言い終わると、叔父は再び大きく嘆息し、腕を組んで深くうな垂れる。

微かに嗚咽が漏れる。楊爺である。肩を揺らして泣いている。

これが己の誤りを正すことになるのか。妻や娘に対して為したことは元に戻りはしない。ならば、この身を困難に置き、人の世に役立たせる以外にはではないか。仏蕃に従い、己の救いを求めるのは許されない。

蘭がひゅうと口を鳴らす。蘭は腕を挙げ、槐の向こうに低くなりつつある日輪を指差す。

「あれが今日のうちに沈みはしないと、誰も思いませんでしような。多くの者は、二百六十年の長きにわたって続いてきた我が大唐が滅びるのを想像するのは難しいと、いまもきつと言うのでしような。しかし、俺の見るところ、唐の命運はあの日輪よりも低きにありますな。兄貴は、この乱れゆく時代に、唐朝のために残りの人生を捧げると言われましたが、そこに何の意味があるとお考えなのですか。沈みゆく日を引き戻せるとお考えなのですか。万が一にも、それができるとして、天下のため、民のためになるのでしようかな」

「唐朝の再興のために尽くすのが、天下のため、民のためにならぬとそなたは思っているのか」

「当然ですな。官軍の性質の悪さは賊軍を上回りますな。これは親父どもの旅にあつて見聞きしたところですよ。お上の名を借りて兵を動かし、賊より先に略奪してやろうと、そんな將軍ばかりでしたな。黄巢が滅んでは兵を氣ままに動かせなくなると、だらだらと戦さが続くのを望んでおります。こんな

ことでは、さっさと唐が滅んでくれた方が余程民のためになるのではありませんか」

「ならば訊こう。唐が滅んでその後はどうなるとそなたは思うのか」

「二治一乱。国が滅べば、別の国が興りましような。歴史を見ればわかります。古く腐り切ってしまった王朝は直しようがありません。初めから新しいものを造る方がずっとたやすいでしょうな」

「確かに唐朝を直すのは極めて困難な仕事だ。だが、別の国は誰が興すのか。新しいものは誰が造るのか。黄巢か。杭州の錢鏐か。お上人さまが話された王建か。それとも裸の朱温か」

「いま名の挙がった連中には無理でしょうな。唐が滅びるのは必定と言って、二百六十年も続いた王朝ですからな、あっさり世話なく滅んでくれると言いついにはなかなかいかんでしょうな。まだまだ何十年もかかり、醜態の限りをさらすのでしょうか。新しい国が興るのはそれから先のこと、いま地上に生きている者などは皆死に絶えてから後のことでしょうか」

「それでよいと思うのか」

「よいも悪いも、歴史を見ればそうなるとしか言えませんが。漢が滅ぶには長い長い時間がかかり、次の天下が統一されたのは遙かに後のこと。唐はまだまだ滅びのほんの入り口にあるのですからな」

「私には大それたことは言えない。恥ずかしながら、いかなる困難があろうとも我が信念を貫き通せる類の男ではない。そのような男であるから誤りばかりの生き方しかできなかつた。常に迷い、常に挫ける。これからもそうだろう。我が決意を述べても、それを貫き通せる自信はない。天下に泰平をもたらし、民を救う大きな仕事は私にはできない。私が思うのは、例えば、ここでのお祭の日に、一人の少年が一人の少女に恋をしたとして、その恋が結ばれるようにしてやる、それくらいのことだ。それが為せれば私は本望だ。唐が滅び遙か先に泰平の世がくるのでは、いま恋する少女には遅すぎる。現に生きて目の前にいる人々に、ほんの少しの幸せを与えること、それが私の望みだ。私一人には、この莊園を守る力さえもない。黄巢のような賊が、も

しもここを狙ったりすれば、ひとたまりもない。一人の私はまことに無力。

しかし、もし私が唐の官人となれば、私の力は何倍にも大きくなる。貢奉に受かって何倍かになった私の力を、一人一人の小さな幸せを守るために使いたいのだ。遙か先の泰平を待つよりは、いまここで唐王朝の建て直しを図る方が、いま生きている者にはずっと役立つであろう。私はそう確信し、二度と受けまいと思つた貢奉に再び挑むと決めたのだ」

再び楊爺が嗚咽する。

「これこそこの爺がお聞きしたかったことでございます。お坊ちやまは、立身出世のために貢奉を受ける他の連中とは違つと、この爺はずつと思つておりました。お坊ちやまは弱さをお知りになるお方です。それがお坊ちやまの優しさなのでございます。いつしか必ずお坊ちやまがすばらしいことをしてくださると、この爺はずつと思つておりました。今日ついにその日がきたのです」

貢奉に落第したとき、楊爺のような普通の人間に生まれていれば、こんな

目に遭わずにすんだらうにと、己の生まれを恨んだ。楊爺がどうして己にあくまで尽くしてくれるのか、その理由がわからずにいた。そうしたことのが、今日ここで解きほぐされたことになるのか。必ずしも確信はないが、そうであつてほしい。

皆が黙る。

蘭がまた笛を取り出し、静かに吹く。

章華台でこの笛の音を聞いてから十数年、我が身にあつたことをたどる。その結果として今日のこの決意に至つたのだ。

蘭は笛の音を途中で切り、

「俺も一つの決意をここでしますかな。今日から俺は兄貴の手下だ。兄貴が貢挙に受かるまで、俺は兄貴のためだけに働く。そう決めましたな」

「何を言い出すのだい」

「俺は悪いことに、今日まで兄貴をずっと引っ張りまわしてきたのですな。さんさん兄貴を利用させてもらった。今日まで俺が好き放題やってこられた

のは兄貴のお蔭ですな。親爺どのを旅に連れていけたのもそうですな。俺は兄貴に感謝しております。これからは俺が兄貴に利用される番ですな」

「今日の莊園があるのはそなたの力があつたからだ。これからもそなたには莊園を支えてもらいたい。貢奉は私一人で受ければよいことだ。私は勉強に専念する。そなたは、莠と藹を助けてやってほしい。この莊園の経営は藹に委ねるつもりだ」

兄の言葉に藹は目を丸くする。その弟に向かって、

「急にこんなことを言つてすまない。しかし、おまえは大丈夫だ。蘭くんもいるし、何よりも叔母上がおられる」

「私のことは考えません。兄上がよろしければそれでよいのです」

と、藹はしっかりした口調で言う。

蘭は、

「そうそう。藹くんは大丈夫。しっかりしている。それに俺なぞいなくても、ちゃんと、もっと良い人がそばにいますからな。何の心配もありません」

と、藹の肩を叩く。弟の妻のことを言っている。

「やつと兄上のが天下に知れる日がきます。かつて不合格にした試験官たちは、十八年も遅らせたことを深く後悔することでしょう」

韋荘は、試験に落ちて帰ってきた日に、小川のところで弟が言った言葉を思い出す。藹はずっとそれを覚えていたのだ。

「私はそれほどの人間ではない。しかし、この歳月は全くの無駄ではなかった。私もそれなりに成長した。貢挙を受けるくらいは一人でやっていける」  
「それはどうですかな」

蘭はにやにやする。

「そんな情けない人間に見えるのかい」

「そうは言いませんな。唐朝の再興のために、民のささやかな幸せのために、今度は失敗は許されませんからな。俺も同じ目的のために、兄貴にはたとえ邪魔だと思われても、手伝わさせてもらいましょう。俺は俺の考えで兄貴の言を壮とし、兄貴のために身を尽くすと決めました。この決意は、失礼なが



ら、兄貴のより十倍は固いでしょうな」

「私の心を知らぬくせに」

韋荘が笑うと、蘭は盃を手にし、

「さあ、誓いの酒だ。親父どのと楊爺、それに仏蕃どのには、兄貴と俺の決意の証人になっていただきましょうな」

順に盃を回し、仏蕃も盃に口につける真似をする。

その仏蕃に向かって韋荘は、

「はからずも今日はお上人さまに私の決意を聞いていただくことになりました。この心はお上人さまとは雲泥の差。お上人さまのお心の強さの万分の一でも学ばせていただかなくては、ここで申したこともたちまち崩れましょう」  
「愚僧とて同じ。人の心はもとより定かではなく、確かなのは御仏の教えばかりです」

仏蕃は何を思ったか、金剛経を唱え始める。

その間に日は傾き、経が終わるころに、日輪は大地の縁に触れる。

楊爺は、

「秋は暮れるのが早ようございます。そろそろ降りられるのがよろしかろうと存じます」

と、人々を促す。

叔父は隠居所への道を、楊爺が送ろうとするのを断り、一人別れていく。楊爺は皿を箱に収めて手に提げ、四人の前に立って坂を下り始める。彼方より、叔父の声が風に運ばれてくる。

一望秋山静　望み見る秋の山は静まり返り

簫条形跡疎　人の踏み入った跡は稀である。

方願沮溺耦　願うべきは古き二人の隠者のように

澹泊守田盧　田を守りつつ淡き日々を送ること。

韋応物が隠棲への思いを込めて詠んだ詩だ。

これを吟じる叔父の心はよくわかる。叔父は韋荘が貢奉に挑むことにまだ納得していない。古来、道を行われぬ時代には野に隠れるのが賢者の知恵と

された。王朝の危うい時期に、何も好き好んでこの穏やかな風光を湛える荘園から出ていくことはない。

ここ十数年、曲がりなりにも韋荘の理想は田疇にあった。中央に出ることではなかった。先祖の詩は、いま決意したばかりの韋荘の心を揺さぶる。こうであるから蘭の助けがいるのか。しかし、思えば、応物も、詩に歌うような揺らぐ心を持ちつつも、唐の官人としての本務を果たしたのだ。南山において口に出したことの他に、これから己が進むところはない。己の弱さは十分に知っている。だからこそ人々の前に我が決意を現したのだ。今日の南山の重陽の節を決して忘れまいと、己に誓って坂を下る。

**薛** 未亡人は韋荘の決断を讃える。

「やはり荘ちゃんの違いです。誰とも違う。ここにきて本当に立派なこと。誰にもできることではありません。いまに満足せず、常に新たなものを目指

す。この莊園に留めておくなんて勿体なさすぎます。外に出て大いに働くべきと私は思っていました。お上も、世の人もそれを待ち望んでいます。莊園のことなら心配いりません。藹ちゃんも立派な大人になりました。それにあの子もいます。莊ちゃんはもう心おきなく勉強に。そう、今日からでも、他のことに一切気を使わなくて、専念なさいな」

薛未亡人の言葉を有難く受ける。

薛未亡人が「あの子」と言ったのは、韋藹の妻の陸氏である。薛未亡人は己の後継者を、息子やその嫁たちではなく、陸氏であると決めているようだ。

「そうそう、実は、莊ちゃんを困らせてはいけないと思って、いままで黙っていたことがあります。廬山の愚笠子先生、覚えているでしょう、私だけがこっさり聞いたのだけど、『あのお方の相が茫洋として掴みませんのは、大きく広く、某などには捉えようがないからです。あのお方、後々、宰相となるに違いありません』って。そう言ったのです。私は前からきつとそうなるに違いないと思っていましたから、大いにうなずきましたけど、でも、莊ちゃ

んは貢挙にはもうこりこりだったでしょう。だから、このことは絶対に口にすまいと思っていました。荘ちゃんを困らせたくなかつたし、それに、愚笠子先生の予言が正しければ、きつと荘ちゃん自身でいつか決意なさると思っていましたから。今日、荘ちゃんの口から聞けて、これ以上に嬉しいことはありません」

思い出してみると、あの落第の日から今日まで、もう一度貢挙に受けてはどうかと、薛未亡人から勧められたことは一度たりともない。薛未亡人とて本当はそれを望んでいたはずだ。薛未亡人は初めから己のことを理解してくれていたのか。貢挙を受けると決めて、薛未亡人の心にやつと応えらるようになったのか。

愚笠子の予言などあてにならない。貫休も似たようなことを言っていた。どちらも人の気を引くためにでまかせを言っただけに違いない。そんな言葉が正しいかどうかなどはどうでもよい。かつて虢州知事の就任祝いで見た劉瞻に一步でも近づき、ゆくゆくはそれこそ宰相をも目指すべきであろう。徳

の賊ではないと証するためにも貢挙に挑むのだ。

薛未亡人は穏やかに微笑んでいる。かつて怒鳴り散らしていたころには想像できない表情である。

薛未亡人は本来聡明な女性であったのか。それは、仏蕃に会ったときに、真剣な表情で、

「女でも金剛経の真髓を教わることはできましようか」

と、尋ねたことでさらに明らかになる。

薛未亡人は仏教だろうが道教だろうが何でも有難がり、愚笠子のような術士を簡単に信じてしまう愚かしい人間と見えていたが、

「真に正しい教えであるのなら、人にわからぬものであるはずはないと思います。女も人であり、金剛経が正しい教えであるのなら、私にも教えていただけることがあるのではないかと考えます。それは間違っていないましようか」

「御仏は全ての人に向かって教えを説かれました。男も女もなく、誰の耳に

もよく聞こえるものです」

仏蕃は、薛未亡人のために、五日にわたって、金剛経を一字ずつ読み解く教えを授ける。話術に巧みな仏蕃の講義は、ただ經典の文字を追うだけではなく、種々様々な物語を交え、薛未亡人は倦むことなく聴き続ける。さすがに十分に理解できない難解なところがあるのを残念がると、

「最も大切なのは、經典の文字にあるのではなく、御仏のお救いがあることと信じることにあります。經典など一字たりと弁えずとも、信じる心があれば、その方がよろしいのかも知れません」

仏蕃はそのように再三言う。

「それを伺い安心しました。私にも心迷わぬ死が許されると思いたいものです」

薛未亡人は仏蕃に多額の喜捨を用意する。仏蕃は身に携えられぬものは頂戴できぬと一切を拒む。薛未亡人は仏蕃にはそれ以上は言わずに、揚州の寺へ勝手に送ることにする。

**仏**蕃が虢州を去ると、韋莊は勉強を始める。

少年の頃から慣れ親しんできた聖典を開く。同じ貢挙のための勉強であるのだが、かつては無味乾燥としか思えなかつた一句一句が違って見える。生命を持った言葉として目に飛び込んでくる。古の賢人が、己の決意をより強固にするために直接語ってくれるかのようだ。

勉強は思いの他にはかどる。年が変わって春も半ばになったころには、前の受験で頭に詰め込んだもの全てが取り戻せたと確信できるまでになる。以前は知識を無理にまさしく詰め込んだだけだった。今回は、己の血肉と結びつけて収め得た。

黄巢は依然として南方で悪さを続けている。それはここ何年と同じだ。朝廷は年々歳々旧例に従って政が為され、来年の春にも当然、貢挙は行われると定まり、夏の暑さが厳しくなるよりも前がよかろうと、蘭が都から迎えに



やってくる。

心積りはできている。数日間の準備の後、吉日を選んでの出発となる。昔と同じように、まだ日が昇る前に、広場において一族の見送りを受ける。

「来年の春、荘ちゃんは嬉しい報せを携えて帰ってくることでしよう。そうなれば、私にはもう何の心配事ありません。この世は安心。あの世にいつでも、先祖に胸を張って会えましょう。荘ちゃんのお蔭で、荘園はこんなにも豊かになり、子々孫々までずっとこの繁栄が続きましょう。これほどまでに立派な甥を持つ者がどこにおりましょう。さあ、いつてらっしゃい。次に会える日が、本当に楽しみです」

年齢のせいなのか、かつての人前で泣くようなことのなかった薛未亡人が涙を流す。

「きつと叔母上さまにお喜びいただけるといいたします」

韋荘はきつぱりと答える。

かつて同じように見送られたときには大きな不安があった。あのころは若

く、体力も知力もいまより勝っていた。勿論いまも合格すると決まっていたなどいない。それなのに、薛未亡人の期待を重荷とは感じない。己の身の内に入れた聖賢の言葉が大きな自信を与え、唐土の民のために身を捧げようとの使命感が心を昂ぶらせる。

広場において叔母に辞し、韋藹ら数人を従えて一族の家が並ぶ間の道を歩み、石の橋を渡り、狐潭からの水の流れを遡って進み、三叉路で桑畑へ入り、丘の巖を一つ越え、だらだらと長い坂を下り、小川にかかる橋の手前で止まる。

かつて不合格になって帰ってきた日に、ここに合歡の木があった。いまは小さな四亭が建っている。近くで、数頭の馬が草を食み、蘭と楊爺が待ち受けている。四亭の屋根の下はと見れば、叔父の韜と息子の純がいる。叔父は、莫崖の上で純に身をあずけている。叔父は重陽の節句の後、体調を崩し、南山で希望したことが叶うのを切に望むせいなのか、目立って衰えた。韋荘は昨日のうちに隱居所を訪ね、出発の挨拶をすませた。それなのに、ここに叔

父がきていることに少なからず驚かされる。

小走りで四阿の下へと進み、地にひざまずく。

「よもやここにまでお越しくださいますとは」

叔父は純の膝から少しばかり身を起こし、

「昨日きてくれて、そのときはそれでよいと思ったのだが、春にはそなたを迎えられぬのを思い、いま一度、会っておきたくなった」

弱々しい声を出す。

「何をおっしゃいます。叔父上には、是非ともよき報せをお聞きかせする所存です」

「わしとてそれを聞けるのを待ち望みはする。わしはもう十分に生き、これ以上の歳月を必要としない。ならば、ここでいま一度、そなたに謝っておきたい。そうせねば気がすまぬのだ」

叔父は純に脇を支えられつつ頭を下げる。韋荘はその手を取り、

「謝らねばならぬのは不孝者のこの甥にございます。叔父上に長く御心配を

おかけし心よりお詫び申し上げます」

「わしはそなたの父にすまないことをした。そなたにもすまないことをした。いくら謝っても足りるものではない。そなたがこうして貢奉を受けに行くこの朝に至っても、わしにはなお解せないものがある。どうしていかれるのか、わしはあれこれ思うと、そなたにすまないと、居ても立ってもいられないのだ」

「叔父上のお心に副うのを何よりも大切と思いつつ、十分に果たすことができませんでした。貢奉を受けに参るのは、何よりも叔父上、叔母上、我が一族のためになると、考えます。しかし、それが叔父上のお心に背くものであるのならば、ここで取りやめてもよろしいのです」

「そなたの志を曲げてはならぬ。そなた自身の心に問うて、為すべきことを為すがよい。わしのことも、莊園のことも、先祖のことも考えなくてよい。

真の己を貫けばよいのだ」

「有難きお言葉 身に余ります」

「わしはわしで、そなたに謝っておきたかっただけなのだ」

叔父は自分の身を支えている純の手をさぐり、

「わしがここに来たのは、もう一つ心残りがあつてのことだ。春にまたそなたには会えぬ身、いまこの場で叶えてほしいことがある。聞いてはくれぬか」

叔父はさすがのように韋荘の顔を見る。

「私は何事も叔父上のお心のままでございます。何なりと仰せくださいませ」

「言つてよいのか」

「もちろんです」

「では言う。叶えてほしい願いとは、この純に関わつてのことだ。そなたの口から、どうか頼む、この純に、言つてやつてほしいことがあるのだ」

叔父は純の手を握り、視線を韋荘から純へとゆっくり動かしていく。純は韋荘の後ろで顔を伏せる。

韋荘はとまどいを覚える。しかし、叔父の思いは叶えるとすでに言った。

「何と申せばよろしいのでしょうか」

「こう言つてやつてほしいのだ。『おまえはたった一人の息子だ。我が志を継ぐ者があるとすれば、おまえの他にはいない』。そう言つてやつてくれ」

叔父はもう一方の手を韋莊の方へと伸ばす。細い腕が弱く震えている。

韋莊は叔父の顔から目をそらし、地面を見て黙考する。それから、純を見やる。目を伏せている息子の頬が紅潮している。

「わかりました。おっしゃる通りにいたします」

韋莊は叔父の手を取り、それを握つたまま、叔父に言われた通りを息子に向かつて言う。叔父はしきりにうなずき、

「よいか。おまえの立派な父上が、貢挙に合格してここに戻ってくるのを、わしに代わつてここで迎えるのだぞ」

叔父は涙声で純に言う。

思いも寄らぬ叔父の頼み、これまで考えたこともない言葉であった。それでも、息子に向かつて言つてみると、何やら胸のつかえが落ちたような感覚を得る。

「この父の代わりに、叔父上に大切にお仕えしてくれ。頼んだぞ」

韋荘は息子に、叔父から頼まれていない言葉を付け加える。

純は声にならぬ声で応え、楊爺が大きく泣き出す。

己は長く我が子を苦しめてきた。

韋荘は立ち、叔父の背に顔を押し付けて泣いている息子の両肩に手を置く。

「後は頼んだぞ」

純は小さくうなづく。

楊爺には楊胆という後継者があり、薛未亡人は藹の妻の陸氏を後継者に選んだ。莊園がこれからも続くには、韋荘にも後を継ぐ者がいなくてはならない。それは二十二歳のこの息子でなければならなかった。

「さあ、いこう」

韋荘が蘭に合図を送れば、いよいよ別れである。

蘭は馬に跨り、後ろに荷を積んだ馬列を従え、橋を渡る。

楊爺が駆け寄る。

「この爺は付いていってはいけないのでございませうか。長安のことなら、都生まれのこの爺にお任せくださいませ」

「爺の気持ちは嬉しい。だがな、おまえは、藹と叔母上のために莊園にいてくれなくては困るのだ」

「いえ、莊園の仕事ならば甥の胆がおります。あれはもう一人前です」

「もちろん胆は立派な若者だ。だがな、おまえの知恵のまだ何分の一も受け継いでいない。しっかりと仕込んでやってくれ」

「しかし、お坊ちやまが合格されるまではこの爺がお世話すると、その昔に申したはずでございませう」

楊爺は馬の鞍にすがる。

「よく覚えているぞ。だからこそ頼んでいるのだ。私は試験を受けに行く。そのときに、爺に最もやってもらいたいのは、この莊園を守ることなのだ。これは爺でなくてはできない。そして、お狐さまを大切に祀りしてくれ。これも爺がいなくてはできない。私が合格するよう毎日祈ってくれ。頼んだ



ぞ」

韋莊は楊爺の手を軽く叩く。節くれだったがっしりした手である。この手にどれだけ世話になったことか。

「貢奉に合格するまで、俺が爺に代わって兄貴を守ります。吉報を持って帰って、そのときに、兄貴を返します。安心して待っていただきましょう」  
蘭の言葉に、楊爺はしぶしぶあきらめ、橋の途中で止まる。

振り向けば人々がいる。

合格の報せを携えてここに帰る。それまで叔父には元気でいてほしい。馬首を前に向ける。

蘭と馬を並べてしばらく歩めば、じきに官道である。

いまも二本柳がある。不合格だったあの夏の日はこの下に立った。そのとき、この苦しい思いをまた味わうのなら、二度と受験などしないと買った。よもや十八年と言う長い年月を隔ててまた受験に行くようになるとは。

昔といまとは違う。長いこと探し求めていた本来の己の姿がここにある。

三本柳の下をくぐり、官道に出る。ふと別の思いが生じる。

ここで都のある西にはなく、東に向かつて歩み始めたらどうなるのか。道なりにいけば自ずと洛陽に着くだろう。そうなれば、かつてと同じ旅が始まり、揚州にいきつくだろう。貢拳などは投げ打ち、蘭と二人で江南の地を放浪する。それからの一生は旅の上だ。莊園には後継者がきちんと揃った。己はそこにいなくてもよいのだろうから。

蘭との気ままな旅がまたできたならばどれほど愉快であるか。これこそが本当の己だと、揚州においてかつて思ったではないか。それは旅であるからこそ得られたものだ。ならば、旅を終わらせなければよいではないか。しかし、悲しいかな、あのとときの本当と思った己が嫋嫋を死なせた。人を死に追いやるのがどうして本当の己であろうか。

「兄貴、俺はどちらでも構いませんな。試験場にいる兄貴と、遊里にいる兄貴と、どちらも本物でしょうからな」

蘭が言う。

韋莊はぎよつとし、すぐに笑う。

「いつまでも迷っていられる年齢ではない。いくぞ」

馬首を西に向ける。

「俺は兄貴を手伝うだけ。どちらへでも構わないのですが、今日は西に行くのですな」

「当たり前だ」

この歳になってもう一度、貢挙に挑めるとは幸せではないか。そうしたくても普通の人には許されない。賊に町を破壊され命を保てるだけで大変な幸運と思っている人が大勢いるいま、豊かな莊園を持ち、勉強三昧でいられるとは、何と言う幸福を己は享受しているのか。我が身一人のためこの幸運を使つては身勝手過ぎる。自分が持っているものとは比べものにならないほど小さな幸せを、必死に求めて得られずにいる人たちのために、己の残りの人生を捧げよう。だから貢挙を受けると決めた。嫻嫻には与えられなかった小さな幸せを、唐土の民の誰かに与えたい。その決意を揺るがせはしない。

「今朝は東の風。それに吹かれて西にいくと言うことですな」  
蘭が軽く馬に鞭を当てる。